

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

昭和62年度

昭和63年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

昭和62年度

昭和63年

奈良市教育委員会



免柵区全景（北から）

第144次調査

序 文

平城京の遺跡が奈良市街の地下に今なお眠り続いていることは市民の皆様方も御承知の通りであります。しかし、近年市街化区域拡大の波がますます大きくなり、貴重な埋蔵文化財が失われていく件数も増加する一方であります。このような状況の中で、奈良市は埋蔵文化財調査センターを開設し、ここを拠点として少しでも埋蔵文化財を保護しようと努力している次第であります。埋蔵文化財は国民共有の歴史的遺産であり、これに学び、それを将来へと引き継いでいくことは私たちにとって現実的に急務となっております。今後とも調査体制の充実をはかり、これに応えていく所存であります。

本書は昭和62年度に奈良市が発掘調査を実施したものについて、その成果の概要をまとめたものであります。今年度の調査では、平城京跡外においても大きな成果を得ることができました。これらの調査成果が少からず利用、活用されることを願ってやみません。

最後に、現地調査から本書の作成に至るまで御指導、御協力を賜わりました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

奈良市教育委員会
教育長 久保田正一

例　　言

1. 本書は、昭和62年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。
2. 昭和62年度には、35件の発掘調査を実施した。そのうち、東市跡推定地（平城京左京八条三坊六坪）の調査については、別に第8次発掘調査概報として刊行するので集録しない。また、昭和61年度に奈良北地区土地区画整理事業地において実施した試掘調査については、本年度に実施した本調査の概要と合わせて報告する。
3. 本書に収録した報告は次頁に記したとおりである。なお、平城京内の次数調査地の位置は平城京跡発掘調査地位置図に示した。
4. 発掘調査は以下の組織で実施した。

奈良市教育委員会

文化課 課長；亀井伸雄（%退職）、館野和巳（%着任）、補佐；清水統裕
文化係 係長；野口 宏、森 光彦、久保哲夫
埋蔵文化財調査センター 所長；島津幸男、主任；大原和雄、中井
公、森下恵介、西崎卓哉、篠原豊一、三好美穂、立石堅志、森下
浩行、鐘方正樹

なお、一部の調査については、奈良県教育委員会の協力を得ている。

5. 現地調査及び本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会の御指導・御教示を仰いだ。また、史跡大安寺旧境内の調査（第30次）では、奈良国立文化財研究所所長；鈴木嘉吉、同平城宮跡発掘調査部長；町田 章、奈良県教育委員会文化財保存課長；長谷川彰一、奈良市文化財保護審議会長；土井 実の各氏の御指導を仰いだ。記して感謝したい。

6. 発掘調査および出土遺物の整理には、下記の諸氏の参加、協力があった。
相原嘉之・江森幹浩・大西明彦・大西 誠・加藤健毅・金村浩一・河合順之・
桐山美佳・小池伸彦・藤田忠彦・古川成美・芹川順子・宋 梨萃・玉林尚子・
中島満寿江・保坂香恵・松田光広・松山径子・三上牧子・宮腰瓊璃子・村松京子・
山村光子
7. 報文中で使用する遺構記号、遺物の名称・型式等の標示は奈良国立文化財研究所、および当市教育委員会の刊行物に準拠している。
8. 報文中、および図中で表示した方位・座標は平面直角座標系VIに準拠する。
9. 本書の作成は、文化課長の指導のもとに調査担当者全員があたり、それぞれ分担して執筆した。その文責は、各報告の末尾に明らかにしている。
10. 本書の編集は、鐘方正樹が行なった。

目 次

I 平城山丘陵の調査

| | |
|----------------------------|----------------|
| 1. 長谷遺跡の調査 | 1 |
| 付論 奈良市歌姫町長谷遺跡の焼土の T L 年代測定 | 奈良教育大学 市川米太 10 |
| 2. 日葉酢緩陵古墳外堤の調査 | 12 |

II 平城京の調査

| | |
|----------------------------------|----|
| 1. 平城京八条二坊一坪の調査 第 134次 | 13 |
| 2. 平城京左京(外京)四条五坊十二坪の調査 第 144次 | 18 |
| 3. 平城京左京七条一坊九坪の調査 第 128次 | 21 |
| 4. 平城京六条三坊十一坪・東堀河の調査 第 138・141次 | 26 |
| 5. 平城京左京(外京)二条七坊十四坪の調査 第 126次 | 30 |
| 6. 平城京左京三条二坊六坪の調査 第 137次 | 33 |
| 7. 平城京右京五条一坊十五坪の調査 第 127次 | 34 |
| 8. 平城京右京四条四坊十二・十三坪の調査 第 129次 | 36 |
| 9. 平城京左京三条四坊十一坪の調査 第 130次 | 38 |
| 10. 平城京左京四条二坊十六坪の調査 第 136次 | 40 |
| 11. 平城京左京三条四坊五坪の調査 第 142次 | 42 |
| 12. 平城京左京六条一坊十四坪の調査 第 135次 | 44 |
| 13. 平城京左京三条一坊二坪の調査 第 143次 | 45 |
| 14. 平城京左京三条五坊五坪の調査 第 125次 | 46 |
| 15. 平城京左京五条四坊十四坪の調査 第 131次 | 47 |
| 16. 平城京左京四条二坊間路の調査 第 133次 | 48 |
| 17. 平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の調査 第 139次 | 49 |
| 18. 平城京右京三条一坊八坪の調査 第 146次 | 50 |
| 19. 平城京左京三条一坊七・八坪の調査 第 132次 | 53 |
| 20. 平城京左京一条四坊四坪の調査 第 140次 | 53 |
| 21. 平城京東四坊大路の調査 第 145次 | 54 |
| 22. 平城京右京一条北辺一坊六坪の調査 第 147次 | 54 |

III 寺院の調査

| | |
|------------------------|----|
| 1. 元興寺旧境内の調査 第10~13次 | 55 |
| 2. 史跡大安寺旧境内の調査 第29~31次 | 62 |
| 3. 法華寺旧境内の調査 第 1次 | 71 |
| 4. 薬師寺旧境内の調査 第 3次 | 74 |

平城京城・周辺のその他の調査 75

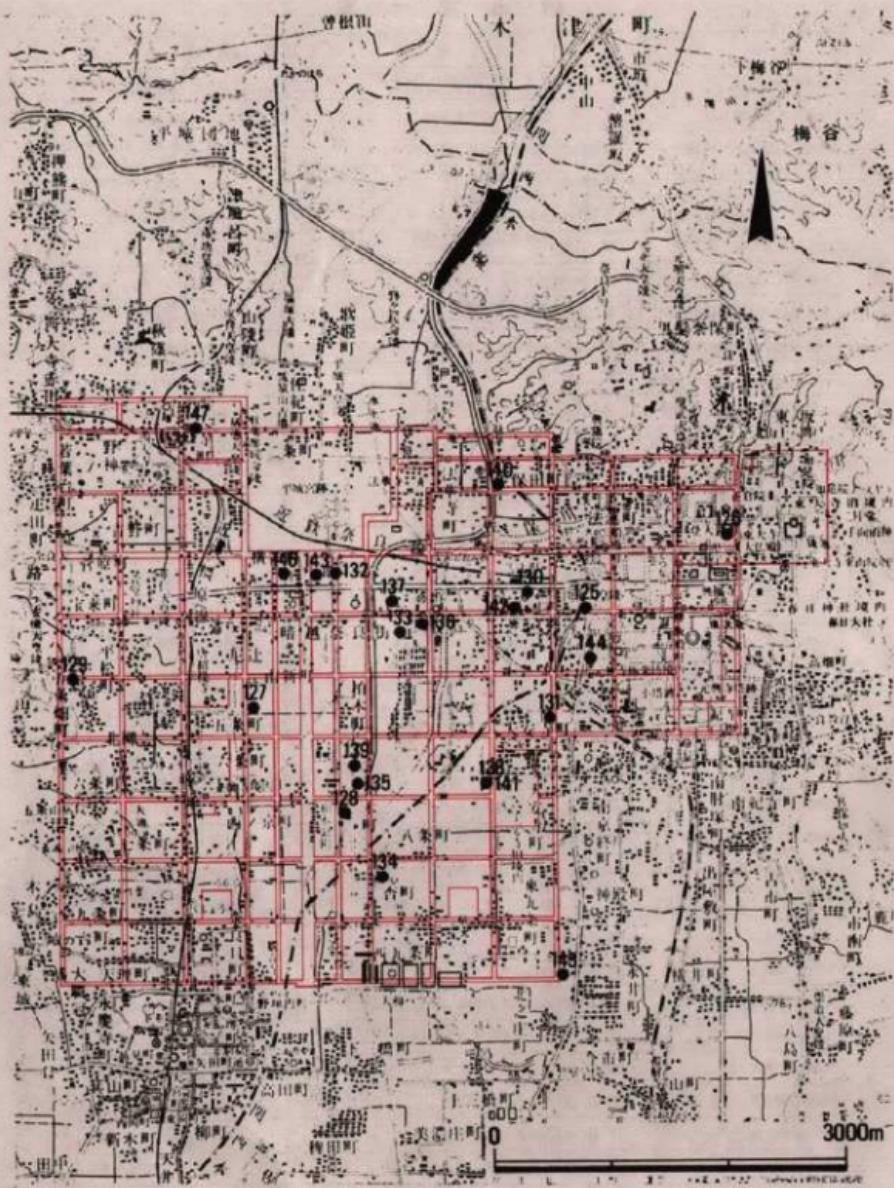
図版目次

卷首図版 発掘区全景(南から) 第144次調査

| | | | |
|----------------------------|----------------------|----------------------------|--------|
| 図版 1 長谷遺跡(1) | 調査地全景他 | 図版23 平城京左京三条一坊二坪 第143次 | 発掘区全景他 |
| 図版 2 同 (2) | S B01他 | 図版24 平城京左京三条五坊五坪 第125次 | 発掘区全景 |
| 図版 3 同 (3) | S B02他 | 図版25 平城京左京五条四坊十坪 第131次 | 北発掘区全景 |
| 図版 4 同 (4) | S B04他 | 図版26 平城京左京四条二坊坊間路 第133次 | 発掘区全景他 |
| 図版 5 日葉酢媛陵古墳外堤 | 発掘区全景他 | 図版27 平城京左京六条一坊十十五坪坪境小路 | 発掘区全景 |
| 図版 6 平城京左京八条二坊一坪 第134次(1) | 発掘区全景他 | | 第139次 |
| 図版 7 同 (2) | S D01他 | 図版28 平城京右京三条一坊八坪 第146次 | 発掘区全景他 |
| 図版 8 平城京左京(外京)四条五坊十二坪 | | 図版29 平城京左京三条一坊七八坪 第132次 | 北発掘区全景 |
| 第144次(1) 発掘区全景他 | | 図版30 平城京左京一条四坊四坪 第140次 | 発掘区全景 |
| 図版 9 同 (2) | S B01・S B04他 | 平城京東四坊大路 第145次 | 発掘区全景 |
| 図版10 平城京左京七条一坊九坪 | | 平城京右京一条北辺一坊六坪 第147次 | 発掘区全景 |
| 第128次(1) 発掘区全景 | | 元興寺旧境内 | |
| 図版11 同 (2) | S B01・S A02他 | 第13次(1) 食堂推定地発掘区全景 | |
| 図版12 同 (3) | S E01他 | 同 (2) 同 (3) 東面築地跡推定地発掘区全景他 | |
| 図版13 同 (4) | S E01出土漆紙文書 | 図版34 同 第10次 | 発掘区全景 |
| 図版14 平城京左京六条三坊十一坪・東堀河 | 第138次 発掘区第138次・第141次 | 同 第11次 | 発掘区全景 |
| 第141次 発掘区 | | 同 第12次 | 発掘区全景 |
| 図版15 平城京左京(外京)二条七坊十四坪 | | 図版35 史跡大安寺旧境内 | |
| 第126次 | | 第30次(1) 発掘区全景他 | |
| 図版16 平城京左京三条二坊六坪 第137次 | 発掘区全景 | 同 (2) S B02基壇 | |
| 図版17 平城京右京五条一坊十五坪 第127次 | 発掘区全景 | 図版37 同 第29次 | 発掘区全景 |
| 図版18 平城京右京四条四坊十二・十三坪 第129次 | 発掘区全景他 | 図版38 同 第31次 | 発掘区全景 |
| 図版19 平城京左京三条四坊十一条一坪 第130次 | 発掘区全景 | 蒙師寺旧境内 第3次 | 発掘区全景 |
| 図版20 平城京左京四条二坊十六坪 第136次 | 発掘区全景他 | 図版39 法華寺旧境内 第1次 | 発掘区全景他 |
| 図版21 平城京左京三条四坊五坪 第142次 | 発掘区全景他 | | |
| 図版22 平城京左京六条一坊十四坪 第135次 | 発掘区全景 | | |

調査地一覧

| 遺跡名 | 調査地番 | 調査期間 | 調査面積 | 備考 |
|---------------------------|-----------------------------------|-------------------------|----------------------|----------------|
| 長谷遺跡 | 奈良市佐紀町1517-4他、歌麿町1916-5他、奈良坂町831他 | '87. 4. 14 ~ 5. 27 | 1,000 m ² | 奈良北地区土地区画整理事業 |
| 日當作継続古墳外堤 | 奈良市山陵町御陵前350-2 | '88. 3. 9 | 22.5 m ² | 板本茂 |
| 平城京左京三条五坊五坪 | 奈良市大宮町1丁目26-1 | '87. 4. 10 ~ 4. 20 | 260 m ² | 日本生命保険相互会社 |
| 平城京左京(外京)二条七坊 +四坪 | 奈良市北半田東町1-2-3-1-3-2 | '87. 4. 13 ~ 4. 24 | 100 m ² | 魚元わかさ旅館 |
| 平城京右京五条一坊十五坪 | 奈良市五条町204-1 | '87. 4. 23 ~ 6. 10 | 424 m ² | 都跡公民館 |
| 平城京左京七条一坊九坪 | 奈良市八条町字三道寺473-1 | '87. 5. 18 ~ 6. 29 | 475 m ² | 黒タカ食品 |
| 平城京右京四条西坊十二十三坪 | 奈良市平松町569 | '87. 6. 24 ~ 7. 1 | 100 m ² | 向川博之 |
| 平城京左京三条四坊十一坪 | 奈良市大宮町2丁目153-13-14 | '87. 6. 26 ~ 7. 9 | 160 m ² | 安田生命保険相互会社 |
| 平城京左京五条四坊十四坪 | 奈良市大安寺町782-6 | '87. 7. 2 ~ 7. 9 | 48 m ² | 安本重一 |
| 平城京左京三条一坊七・八坪 | 奈良市二条大路南2丁目217-1 | '87. 7. 6 ~ 7. 13 | 60 m ² | 吉川文男 |
| 平城京左京四条二坊訪問路 | 奈良市四条大路1丁目736-4 | '87. 7. 13 ~ 7. 24 | 100 m ² | 杉田正雄 |
| 平城京左京八条二坊一坪 | 奈良市杏町391-2 | '87. 7. 20 ~ 9. 3 | 363 m ² | 辰市保育園 |
| 平城京左京六条一坊十四坪 | 奈良市柏木町481-1 | '87. 7. 22 ~ 8. 5 | 70 m ² | 谷口和代 |
| 平城京左京四条二坊十六坪 | 奈良市四条大路1丁目702-1-4-5 | '87. 8. 3 ~ 9. 17 | 480 m ² | 豊田博 |
| 平城京左京三条二坊六坪 | 奈良市三条大路1丁目627-1 | '87. 8. 31 ~ 9. 11 | 80 m ² | 中辻晃 |
| 平城京左京六条三坊十一坪 | 奈良市大安寺町60-1-4 | '87. 10. 5 ~ 10. 19 | 80 m ² | 大西庄司 |
| 平城京左京六条一坊十・十五坪 浮塚小路 | 奈良市柏木町カイタリ484-1他 | '87. 11. 9 ~ 11. 18 | 110 m ² | 加納ケイ |
| 平城京左京一条四坊四坪 | 奈良市法蓮町559-1 | '87. 11. 24 ~ 12. 1 | 150 m ² | 井田藤治郎 |
| 平城京左京六条三坊十一坪 (東側面) | 奈良市大安寺町66 | '87. 12. 7 ~ 12. 15 | 60 m ² | 武野昭和 |
| 平城京左京三条四坊五坪 | 奈良市大宮町3丁目180-4 | '87. 12. 15 ~ 12. 26 | 130 m ² | 岩井俊治 |
| 平城京左京三条一坊二坪 | 奈良市二条大路南3丁目215-1 | '88. 1. 5 ~ 1. 8 | 39 m ² | 市道西田・明田線 |
| 平城京左京(外京)四条五坊 +二坪 | 奈良市杉ヶ町25-1-2 26-1-2 | '88. 1. 11 ~ 2. 4 | 260 m ² | 日宝土地建物株式会社 |
| 平城京東四坊大路 | 奈良市北之庄町18-4 | '88. 1. 11 ~ 1. 20 | 50 m ² | 桐山忠凱 |
| 平城京右京三条一坊八坪 | 奈良市二条大路南4丁目261-30 | '88. 2. 15 ~ 2. 26 | 56 m ² | 飼朱雀化学工業 |
| 平城京右京一条北辺一坊六坪 | 奈良市西大寺東町1丁目25 | '88. 2. 22 ~ 2. 26 | 39 m ² | 竹村忠富 |
| 平城京左京八条三坊六坪 (東市推定地第8次) | 奈良市杏町581-1、586 | '87. 10. 21 ~ 12. 25 | 290 m ² | 重要遺跡昭西猪俣 調査 |
| 大安寺旧境内 | 奈良市大安寺町字ヒラキ1237-3 | '87. 5. 6 ~ 5. 19 | 45 m ² | 森口初恵 |
| 大安寺旧境内 | 奈良市大安寺町1303-4 | '87. 9. 14 ~ 10. 3 | 150 m ² | 大安寺本堂 |
| 大安寺旧境内 | 奈良市大安寺町1002 | '87. 12. 21 ~ 12. 22 | 6 m ² | 楠本義正 |
| 元興寺旧境内 | 奈良市中院町3-1他 | '87. 5. 9 ~ 5. 20 | 50 m ² | 野田善亮 |
| 元興寺旧境内 | 奈良市今御門町29 | '87. 7. 27 ~ 8. 1 | 10 m ² | 児玉秀夫 |
| 元興寺旧境内 | 奈良市西新屋町19-1-20-1-21-1 | '87. 9. 10 ~ 9. 26 | 50 m ² | 島悟 |
| 元興寺旧境内 | 奈良市中院町1 | '87. 11. 9 ~ 12. 10 | 110 m ² | 杉ヶ町高畑線 |
| 法華寺旧境内 | 奈良市法華寺町地内 | '88. 1. 29 ~ 2. 15 | 24 m ² | 奈良市下水道 |
| 薬師寺旧境内 | 奈良市六条町字金池1275 | '88. 3. 14 ~ 3. 19 | 12.5 m ² | 奥村捨雄 |



平城京跡発掘調査地位置図

I. 平城山丘陵の調査

1. 長谷遺跡の調査

I はじめに

本調査は、奈良市佐紀町1517—4他、歌姫町1918—5他、奈良阪町831他の3町にまたがる13.3haに及ぶ敷地で奈良市が実施することになった奈良北地区土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査である。事業地区には、整備、公園化される史跡歌姫瓦窯跡以外に遺跡の存在が知られていなかったが、事業面積が広大であるため、昭和61年度の9月20日から11月1日にかけて試掘調査を行なった。その結果、古墳時代中期の竪穴式住居跡1棟を検出し、付近にはさらに数棟の竪穴式住居跡の存在が予測された。このため、一旦遺構を埋め戻し本調査に備えることとした。本調査は、昭和62年4月14日から5月27日にかけて行なった。また、発見した遺跡を字名をとって長谷遺跡と命名した。

II 試掘調査

試掘調査は事業地内の6箇所に発掘区を設定して行なった。ここでは便宜上、発掘区を北からA・B・C・D・E・F・G区として記述する。E区は本調査時に設定したものであり、後述する。試掘調査は工事と並行して進めたため、工事部分についてはその都度立会調査を行なった。

A区 史跡歌姫瓦窯跡東側に設定したが、顯著な遺構はなく、出土遺物もほとんどない。

B区 水田耕作に伴う溝、暗渠を検出したにすぎず、出土遺物もほとんどない。

C区 竪穴式住居跡の一部を検出、発掘区を周囲に拡張した。これがSB01である。他の遺構の存在が推定される地点が數箇所みられたが、SB01のみを完掘して他は検出せず、埋め戻し本調査に備えた。SB01の詳細は、本調査分と合わせて後述する。

D区 遺構は検出できず、遺物もほとんど出土しなかった。

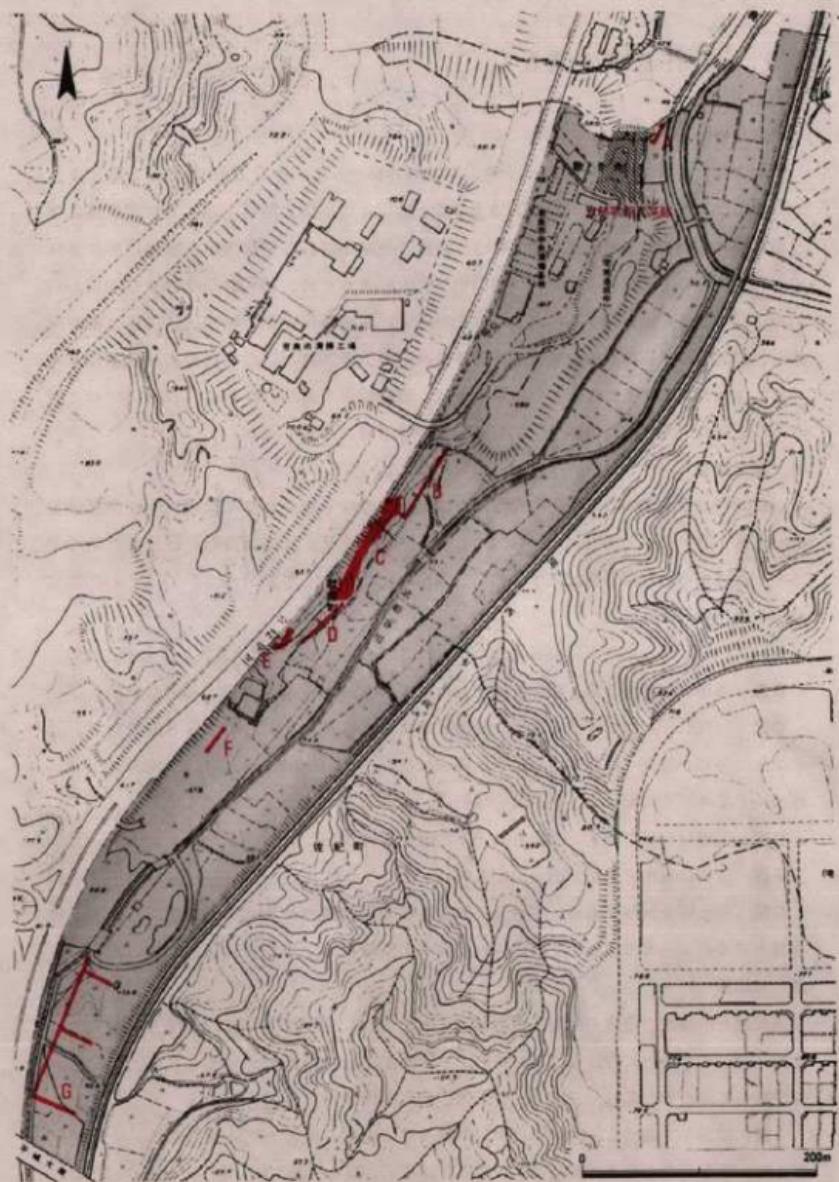
F区 遺構は検出できず、出土遺物もない。

G区 砂と粘土が厚く堆積しており、歌姫谷川の旧流路内にあたる。地表下3mで灰色粗砂となるが、一部で暗褐色土が見られ奈良～平安時代の土器を少量包含していた。

III 本調査

試掘調査の結果、遺跡の存在を確認したC区について、昭和62年度に本調査を実施した。また、遺構が丘陵上に位置していたため、C区南側の丘陵斜面についても発掘区（E区）を設定して調査を行なった。以下、発掘区ごとに検出遺構の概要を記す。

C区 検出した遺構は、古墳時代中期の竪穴式住居跡5棟と土塹、溝である。土層は尾根上で、黒色腐食土の下に黄褐色土、黄灰色砂質土と続き灰黄色砂の地山となる。遺構は、地山を掘り込んで構築されていた。

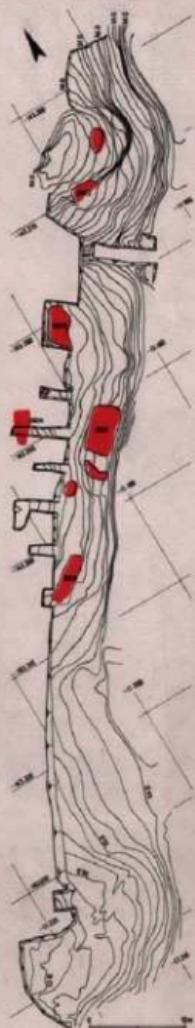


奈良北地区土地区画整理事業地内開掘区位置図（1/5000）

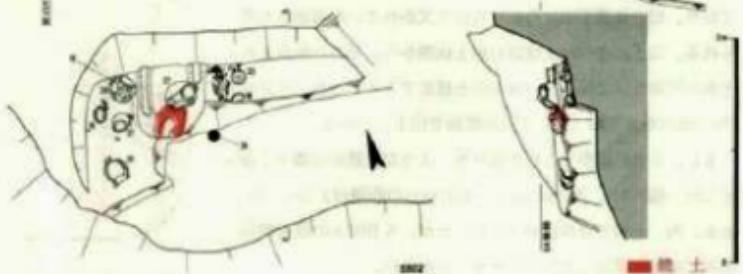
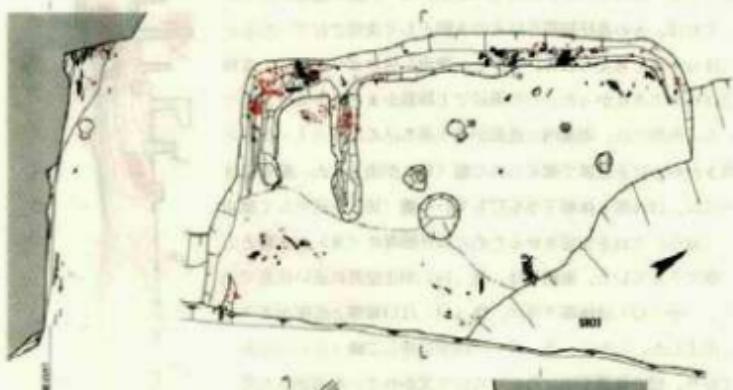
S B01 試掘調査によって最初に確認した平面方形の竪穴式住居跡。南北5.1m、東西は現存で3.0m。内壁にそって幅12~20cm、深さ5cmの周溝がめぐるが、北壁中央部ではとぎれている。柱穴は住居跡内の四隅に位置していたものと見られ、そのうちの2柱穴を検出した。北側柱穴は径17cm、深さ12cm、南側柱穴は径22cm、深さ12cm。住居跡中央付近で、こぶし大の礫の集積を検出した。礫はほとんど重なり合うことなく面的に広がり、これを除去すると深さ10cm程の浅い落ち込みが見られた。そして、床面直上には薄く一面に炭、灰の混在した灰色砂が広がり、一部に建築部材と思われる炭が遺存していた。また、住居跡内北壁から10cm程離れた径54cmの範囲で焼土、黒褐色土（炭多く混在）の堆積を検出した。焼土はこの範囲内に5cm程の厚さでひろがり、土圧によって押し潰されたような状態であった。この焼土の上からは甕（15）が正位置で出土し、焼土中からは2次焼成を受けた高杯脚部片（8）が出土した。検出した焼土がカマド跡の崩壊したものとすれば、8の高杯脚部片はその支脚として使用されていたものではないかと考えられる。しかし、煙出し等のカマドに関する施設は検出できなかった。この周辺で土師器がまとめて出土している。西側では、周溝内に底部が若干落ち込んだ甕（1・2）と置き台の上に正位置で据えられた甕（11）が出土した。甕の置き台には、口縁部と体部下半を打ち欠いた甕（10）を逆にして使用しており、それを安定させるために高杯脚部片（9）を支脚として横にそえていた。東側では、甕（14）が正位置に近い状態で出土し、甕（12）は体部下半が、甕（13）は口縁部と底部が欠失して出土した。しかし、甕（12）の内面に接して鉢（5）が位置しており、12の体部下半は当初から打ち欠かれていた可能性も考えられる。以上に述べた土師器の出土状態から、それが廃棄されたときの状態をほぼ保っているものと推定できる。なお、S B01北側1.2mの地点で鉢（4）1点が単独で出土している。

また、S B01南側でこれを取り巻くような位置から溝を1条検出した。幅0.9m、深さ0.2m、S B01からの距離は1.2~1.7mである。西、北側では検出できなかったが、S B01との位置関係からみて雨落ち溝ではないかと考えておきたい。

S B02 平面方形の竪穴式住居跡で、北壁で2.2m、西壁で



C区平面図 (1/600)



S B01・S B02・S B03平面图・立面图 (1/50)

1.0mまでが遺存していた。しかし、壁面にそってめぐる周溝や柱穴の検出はできなかった。床面直上で炭を検出したが、それは一部の範囲に集中する傾向がみられる。北壁から南へ0.4m程離れたところに焼土を検出した。焼土の範囲は東西25cm、南北28cmの南へひらくU字形を呈す。U字形の弯曲部分には焼土が7cm程立ち上がっており、いわば焼土壁のような状態が観察された。この焼土はTL年代測定法により分析した。また、北壁から焼土にとりつくように地山を削り残した部分を検出した。これは北にひらくU字形を呈する。したがって、焼土部分をカマドとしてそれにとりつく煙出し等の施設になるのではないかと思われる。

土器は床面から出土しており、すべて土師器である。カマドの上から壺(27)が正位置で出土し、その東側で高杯脚部(23)と碗(18)が、西側では壺(21・25・26)、鉢(19)、碗(16)が出土した。このうち、出土状態で注意をひいたのは26と19である。床面に19を伏せ、その上におおいかぶさるように26を伏せてあった。また、SB02埋土に乱れた痕跡がなく、23は廃棄された時点から杯部を欠いていたものと思われる。壺(24)はカマドの東側に位置していた。

SB03 平面方形の竪穴式住居跡で、南北4.03m、東西は2.3mまでが遺存。周溝は幅10~20cm、深さ5~10cm程で、南側では平行して3条検出された。最も南側の壁にそった周溝は幅が狭い。このことから、住居の建て替えに際してその居住空間を南へ拡張したことが知れる。周溝内から多くの炭が検出され、西壁では、これにそって周溝幅で垂直に立ち上がり、炭化した板壁材の痕跡かと思われる炭層が観察された。焼土を西南隅部分で多く検出したが、小さな塊が散在したにすぎない。床面には一面に灰色砂が広がり、一部に建築部材と思われる炭が遺存していた。

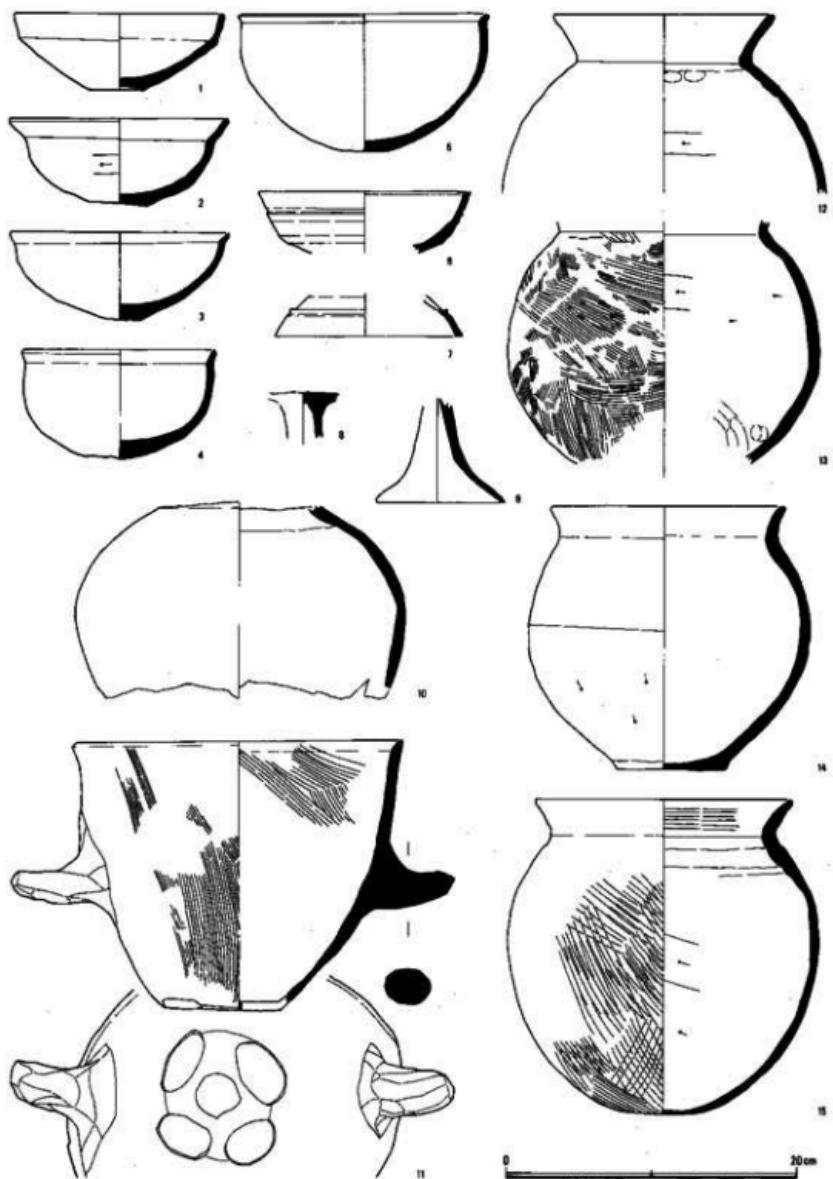
出土した土器はすべて土師器である。碗(17)は周溝内に若干落ち込んだ状態で出土した。壺(20)は床面から10cm程上位にあり、埋土内出土である。

SB04 平面方形の竪穴式住居跡と思われる。その存在を確認するにとどめたため、全体の規模等は不明。調査した範囲内で床一面に建築部材と思われる炭と一部に焼土が散在していた。これに接して壺口縁部片(22)が出土。周溝、柱穴は検出できなかった。

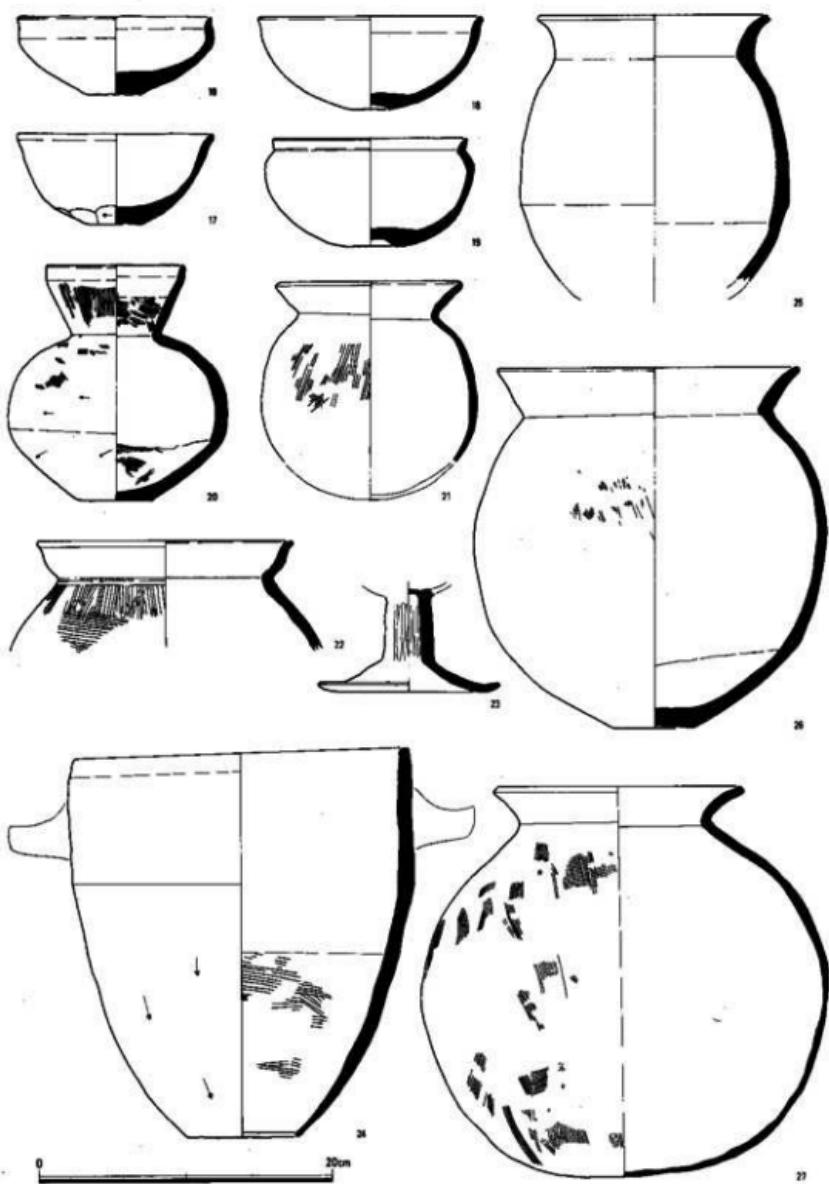
SB05 平面方形の竪穴式住居跡と考えられる。東西5.1m、南北は現存で1.3m、流失がはげしく、壁面の立ち上がりが5cm程度で、床面がかろうじて残存している状況であった。周溝、柱穴は検出できなかった。出土した土器は土師器のみで、壺・鉢・碗・杯・高杯が確認できる。

各住居跡ともに張床は認められない。また、床面から多くの炭の出土があり、集落全体が火災により廃絶した可能性が高い。

E区 丘陵東斜面で等高線にはほぼ平行して構築された炭窯1基を検出した。窯体の長さ



S B01出土土器 (1/4)



S B02・S B03・S B04出土土器 (1/4)

10.4m、幅0.6mで断面矩形を呈する。天井部は遺存しない。窯体東側の長辺には8つの炭焼き出し口が設けられている。焼き出し口の幅は0.8~0.5mで、窯体近くは浅くへこんでいる。焼き出し口は窯体から1.2mほどびて終わり、その先端側が0.4mの段差をもつて下がる。ここが側底部にあたり、若干の平坦面を形成している。出土遺物は土師器片1点のみで、炭窯の構築時期を判断し得ない。そのため、炭窯の焼土でTL年代測定法による分析を行なった。その結果は、付論に詳しいが、おおむね平安時代の構築と判断される。炭窯は製鉄、铸造遺構に伴って検出される場合が多いが、そのような遺構認められなかった。

IV 出土遺物

C区出土の遺物について記す。その大半が古墳時代中期に属する土器類である。

A 古墳時代中期の遺物 S B01埋土出土の須恵器（6・7）以外はすべて土師器である。

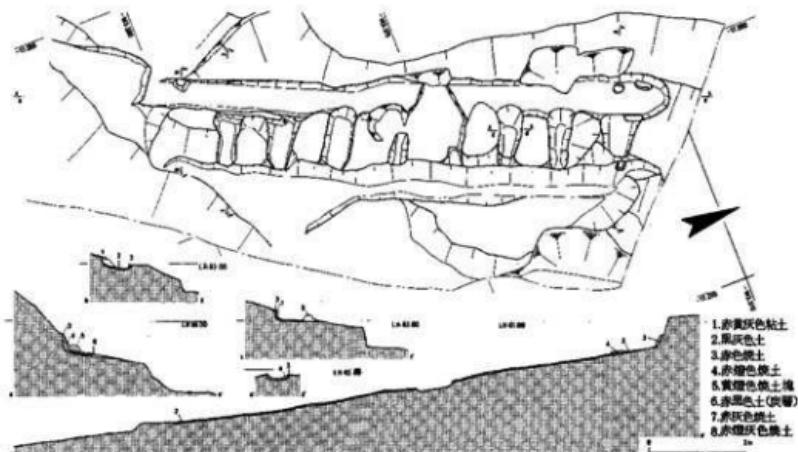
土師器 壺・瓶・高杯・鉢・碗・杯・壺がある。

壺 体部が球形で丸底のもの（13・15・27）と体部がやや長胴で平底のもの（10・14・25・26）がある。スヌの付着が前者ではなく、後者の体部 $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ 上半から口縁部にかけて認められる。これは煮沸方法の相違によるものであろう。21は小型の壺で、底部は丸底、スヌの付着は認められない。他に台付壺の脚台部片がある。

瓶 器高が低いもの（11）と高いもの（24）がある。後者は把手と底部を欠失する。

高杯 杯部まで確認できるものがなく、また、図示し得なかつたが8の掘部になると思われる破片があり、径0.8cmの円形透孔が2つ確認できる。他に透孔を有するものはない。

鉢 大型品（5）と小型品（4・19）がある。



E区 炭窯平面図 (1/120)

椀 口縁部が大きく外傾するもの（2）、短かく外反するもの（3・17・18）、一度大きく内彎した体部から短かく外傾するもの（16）、直立してのびるもの（1）がある。底部は平底で凹面となるものが多い。

杯 SB05から1点出土している。器高3.5cm（推定）に比べて口径が17.2cmと大きい。丸底ぎみの底部と外傾する口縁部からなる。底部と口縁部の境には稜をなす。

壺 大きな体部から屈曲して口縁部が大きく外反するもの（12）と体部が扁球形を呈し、底部が平底のもの（20）とがある。

須恵器 高杯杯部片（6）と脚部片（7）がある。7には方形透孔の痕跡がみられる。

B その他の遺物

土器類 丘陵斜面の包含層から奈良時代の須恵器壺A、壺A蓋、壺底部片が出土。また、南側谷地形の包含層からは12世紀頃の土師器皿が出土した。これには、口縁部が「て」の字状のものと平坦な底部から短く上方へ折り返すものとがある。口径は前者が9.0cm、後者が9.8cm。

石器 凹基式石鎌（全長2.1cm）1点と剝片1点がある。サヌカイト製。SB01埋土から出土した。

鉄製品 南側谷地形の包含層から刀子1点が出土している。

V まとめ

今回の調査で古墳時代中期の堅穴式住居跡5棟を検出した。いずれも丘陵の先端部に位置しており、丘陵斜面の堆積土中には多くの土師器片がなお包含されていたことから、居住範囲はさらに広がっていたものと推察される。国道24号線建設前の旧地形をみると、C区の北西側75m程にわたって緩傾斜地が続いており、大きな集落跡となる可能性も考えられる。そして、C区南側の尾根上では住居跡等の遺構を検出しなかったことから、集落跡の南限はC区南側の谷地形により区切られていたとも考えられる。

そこで、当該遺跡の性格について考えてみたい。そうすると、その立地条件の特殊性が注意される。長谷という字名の如き細長い谷間をのぞむ丘陵上に住居跡群が位置しており、生産基盤を周辺に求めるることは困難である。しかし、地理的にみれば、谷間を流れる歌姫谷川は木津川に通じ、大和と山城を結ぶ重要な交通路として谷が機能していたと考えられる。古くから「コナベ越え」と称された古道に通じ、大和盆地への進入口にはウワナベ古墳や平塚1号、2号墳等の築造もみられる。反対に集落跡は山城盆地への出入口にあたり、交通の要所を占めるところに立地している。集落造営はこのような条件のもとに行なわれたのではないかと考えられる。また、この交通路は後に整備されて平安時代にまで機能していたことが知られる。E区検出の炭窯で生産された炭も、この交通路にのって運ばれたのであろう。

（鍾方正樹）

付論 奈良市歌姫町長谷遺跡の焼土のTL年代測定

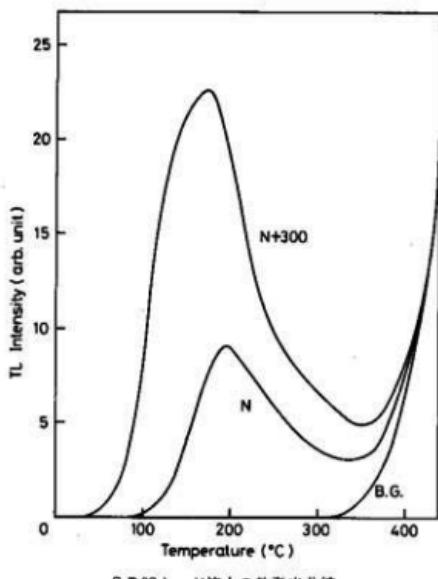
奈良教育大学 市川米太

今回、奈良市の長谷遺跡に關係した焼土について、熱ルミネッセンス法（TL法）によって年代測定を行なった。ここにその測定結果を報告する。測定に使用した焼土資料は、炭窯についてはその側壁から採取した3箇所の焼土と上部崩壊土からの2箇所の焼土であり、堅穴式住居跡の焼土についてはSB02カマド採取の焼土とSB04床面直上の焼土である。TL年代測定法は測定試料が500°C以上の温度に焼成された時を時間の零として、それからの年代を測定するものである。したがって、試料の中に焼成されていないものが混入している場合には測定が困難になる。土器試料の場合は、土器の表面を剥離することによって混入物を排除して年代を正確に測定することができる。しかし、焼土試料の場合にはかなり注意深く試料採取しても完全に焼成されたものだけを含む試料を得ることが困難な場合がある。焼土の周囲の土が混入していてこれを取り除くことができないことが多い。このことは広島県大矢たたら炉跡の焼土のTL年代測定の報告（『考古学と自然科学』第11号 1978）で述べられている。このため今回の試料採取にあたって、充分焼成されていると見られる塊の部分を選別して注意深く採取して貰った。

TL年代測定法は、試料が焼成されてから現在まで受けた放射線量（蓄積線量）を熱発光強度を測定することによって求め、これを試料が1年間当り受ける放射線量（年間線量）で割ることによって年代を求めること。

$$TL\text{年代} = \frac{\text{蓄積線量}}{\text{年間線量}}$$

蓄積線量の測定には、焼土中から100~200 メッシュの粒度の石英粒子を抽出し、これを加熱して熱発光させ、そのときの熱発光強度を温度の関数として記録する熱発光曲線から求める。図には熱発光曲線の例として、SB02カマド焼土からの曲線が示されている。図中のNの曲線は



試料をそのまま加熱したときの熱発光曲線であり、N+300は試料に人工的にゴルト60のガンマ線を300レントゲン照射したときの曲線である。B.G.は熱放射によるバック・グラウンドである。これらの熱発光曲線から等価線量を算出し、これにスーパー・リニアリティ補正を行って蓄積線量を求める。スーパー・リニアリティ補正是熱発光強度が、試料が受けた放射線量に比例していない場合になされるものである。

試料が1年間あたりに受けた年間線量は、焼土中の放射性元素からのベータ(β)線量の成分と焼土中のガンマ(γ)線量の成分とを別々に測定し、これらを加えることによって求めた。両者の線量測定にはいずれも、 $\text{CaSO}_4 : \text{Tm}$ の熱ルミネッセンス線量計が使用された。 β 線量の成分は、焼土中に熱ルミネッセンス線量計を34日間入れて放置した後、これを取り出して測定した。 γ 線量の成分は遺跡が残っていなかったため、近傍の歌姫瓦窯跡と周辺の丘陵部に各2箇所の合計4箇所に線量計を埋めて、180日間放置した後取り出してそれぞれ測定し、その平均値をとった。

このようにして、炭窯焼土5点、堅穴式住居跡焼土2点について測定を行なったのであるが、殆どの試料について周囲の焼けていない土の混入がみられたため測定ができなかつたが、炭窯の上部崩壊土の焼土1点とSB02カマド焼土がようやく年代を求めることができた。これらの年代測定の結果が表に示されている。表中のSの記号は前述したスーパー・リニアリティ補正值を示している。測定誤差は周囲の土の混入を完全に取り除くことができないため土器などに比較して大きくなる。

| 試料 | 等価線量 (ラド) | S (ラド) | 蓄積線量 (ラド) | β 線量 (ラド) | γ 線量 (ラド) | 年間線量 (ラド) | T.L.年代 (B.P.) |
|-------------|--------------|-----------|--------------|--------------------|---------------------|--------------|------------------|
| 炭窯上部 | 320 | 15 | 335 | 0.19 | 0.12 | 0.31 | 1080 ± 150 |
| SB02 カマド | 495 | 20 | 515 | 0.21 | 0.12 | 0.33 | 1560 ± 140 |

長谷遺跡の燒土のT.L.年代

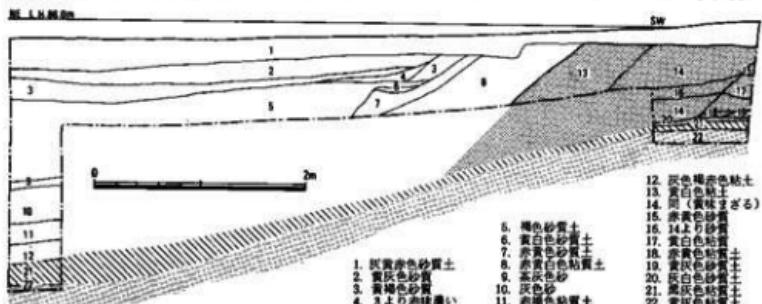
2. 日葉酢媛陵古墳外堤の調査

この調査は、奈良市山陵町御陵前350番地の2において阪本茂氏届出の住宅建築にかかる事前の発掘調査として行なった。届出地は古墳の北東、後円部をめぐる外堤に、幅4mほどの道路を隔てて隣接している。現状では、木造住宅が取り壊された後、整地されており、地表に古墳に関する痕跡を見ることはできない。敷地は231m²、その中央に幅2.5m、長さ9mの発掘区を、長軸を後円部頂に向けて設定した。調査日は昭和63年3月9日である。

まず、整地土を取り除いたところ、発掘区の北東半には黄灰色砂質土層、南西半には赤白色粘土層が広がっていた。両者が発掘区中央で明瞭に区別できることと、赤白色粘土層が南西に向って斜めに堆積していることから、後者は古墳にかかる盛り土、前者はその後の堆積土である可能性があると考え、発掘区両端を断ち割り、以下の層序を追求した。そうしたところ、発掘区北東端では地表下2.3mに、南西端では0.84mに旧地形の表土かと考えられる黒灰色粘質土が堆積していた。そして、その上層に薄い灰色砂質土を置き、さらに赤白色粘質土が斜めに堆積している。下図8はその崩壊土である。遺物はほとんど出土せず、わずかに褐色砂質土層から時期不明の土師器片1点が出土したのみである。以上のことから、墳丘に向って高まって行く旧地形に下図13～20の土を盛り、外堤を構築していたものと考えられる。よって、今回の調査地点での外堤の基底幅は少なくとも現状より10.5mは広がることになる。（西崎卓哉）



発掘区位置図 (1/5000)



発掘区南東壁土層図

II. 平城京の調査

1. 平城京左京八条二坊一坪の調査 第134次

I はじめに

本調査は、奈良市杏町391-2において実施した、奈良市立長市保育園運動場建設工事に伴う事前の発掘調査である。調査地の北側では、昭和60年度に当教育委員会が調査を実施しており、奈良時代の建物や柱列、弥生時代の流路などを検出している。今回の調査地は、平城京条坊復元図では、平城京左京八条二坊一坪・二坪に相当する。したがって、調査は一・二坪の坪境小路の検出を主目的として、東西33m、南北11m（面積363m²）の発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和62年7月20日～同年9月3日である。

II 検出遺構

発掘区内の基本層位は、耕土の下、暗灰色土、明茶灰色土、暗茶灰色土（部分的に暗褐色土）と続き、標高54.1m付近で淡黄色土の地山に至る。しかし、発掘区内の大部分には暗褐色土、黒色粘土を埋土とする流路および落ち込みがあり（網目表示）、そこから大量の弥生時代前期の土器、石器、古墳時代後期の土師器、須恵器が出土した。したがって、古墳時代後期以降に埋もれたものと考えられる。

検出した主な遺構は奈良時代の遺構と弥生時代前期～中期の遺構であり、奈良時代の遺構は淡黄色土と暗褐色土上面で、弥生時代の遺構は淡黄色土上面で検出した。なお、暗茶灰色土上面で、主に東西にのびる多条の素掘り溝を検出した。

A 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は土塙8基である。

S K01 発掘区中央西寄りで検出した円形土塙。直径1.4m、深さ1.0m。

S K02 発掘区中央西寄りで検出した不整形土塙。最大径2.7m、深さ0.2m。

S K03 発掘区中央で検出した不整形土塙。最大径3.4m以上、深さ0.2m。

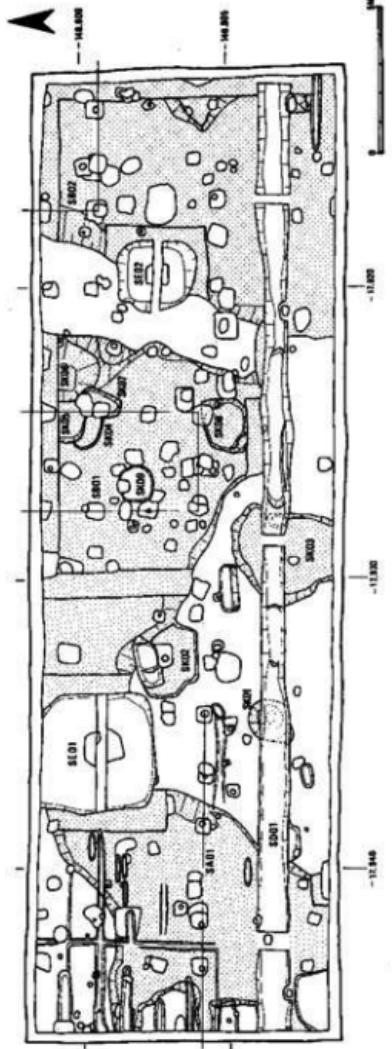
S K04～07 発掘区中央東寄りで検出した土塙群。いずれも梢円形を呈する。S K04は



1. 耕土 2. 暗灰色土 3. 明茶灰色土 4. 暗茶灰色土 5. 茶色土
6. 灰色土 7. 暗褐色土 8. 暗灰色土 9. 暗褐色土（混灰黄色土） 10. 黒色粘土

北壁土層図 (1/50)

長径1.3m以上、深さ0.1m。SK05は長径1.4m以上、深さ0.3m。SK06は長径2.2m以上、深さ0.7m。SK07は長径1.5m、深さ0.3m。重複関係からSK04→05→06→07の順に掘削されたことがわかる。



発掘区平面図 (1/200)

SK08 発掘区中央東寄りで検出した不整形土塁。最大径1.8m、深さ0.6m。

B 奈良時代の遺構

奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物2棟、掘立柱列1条、溝1条、井戸2基、土塁である。

SB01 発掘区ほぼ中央で検出した、桁行3間(5.7m)以上、梁行2間(3.4m)の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行が1.9m等間、梁行が1.7m等間である。

SB02 発掘区の北東隅で検出した、南北1間(1.9m)以上、東西2間(3.4m)以上の掘立柱建物。柱間は南北1.9m、東西1.7m等間である。

SA01 発掘区の西半で検出した東西4間(8.8m)以上の掘立柱列。柱間は等間隔ではなく、東から2.1m-1.7m-3.5m-1.5mをはかる。

SD01 発掘区の南端で検出した東西溝。幅0.7~1.2m、深さ約0.3m。検出した位置から考えて、一・二坪の坪境小路北側溝の可能性が高い。溝心を国土座標で示すと、X=-148,806.05、Y=-17,945.00となる。埋土から奈良時代の土師器、須恵器、土馬、銅鏡(神功開宝)が出土している。

SE01 SB01の西側で検出した、縦板組みの井戸。掘形は一辺約4.0mの隅丸方形で、摺鉢状に掘り込んだ後、段を設けて、さらに掘り込む。検出面からの深

さは 1.6m。井戸枠はくずれているため、原形を保っていないが、一辺 0.6~0.7m の方形平面と考えられる。縦板は各辺それぞれ数枚を 2~3 重に重ねて用いる。枠内から土師器、須恵器、土馬が出土した。

S E02 S B01 と S B02 との中間で検出した井戸。掘形は一辺約 2.0m の不整方形で、逆台形に掘り込む。検出面からの深さは 2.59m。枠の構造は上部と下部とでは異なる。下部では長さ 1.7m、直径 0.8m の丸太を刺り抜き、縦に四等分して据える。なお、四箇所の合わせ目には、それぞれ外側から縦板があてられている。また、枠材の下端近くには各一箇ずつ竪穴が穿たれている。上部は各辺に縦板 2 枚を方形に組み、横棟で保持する。一辺約 0.8m。なお、枠底には拳大の河原石を敷きつめる。枠内から土師器、須恵器、曲物、ヒヨウタンが出土した。

S K09 S B01 と重複して検出した方形土塼。一辺 1.2m、深さ 0.3m。埋土から、須恵器、土師器、銅鏡（和同開珎）が出土した。

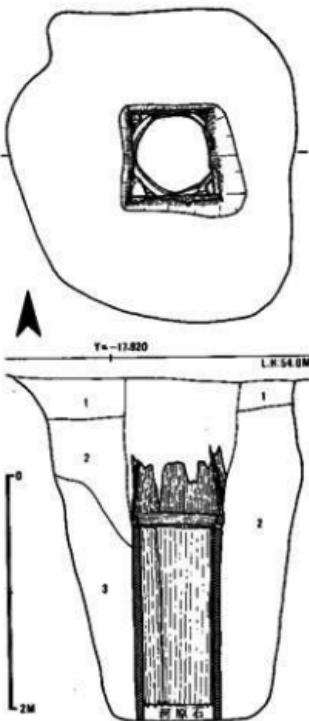
III 出土遺物

出土遺物には、弥生時代、古墳時代、奈良時代のものがある。以下、主なものをとりあげて述べる。

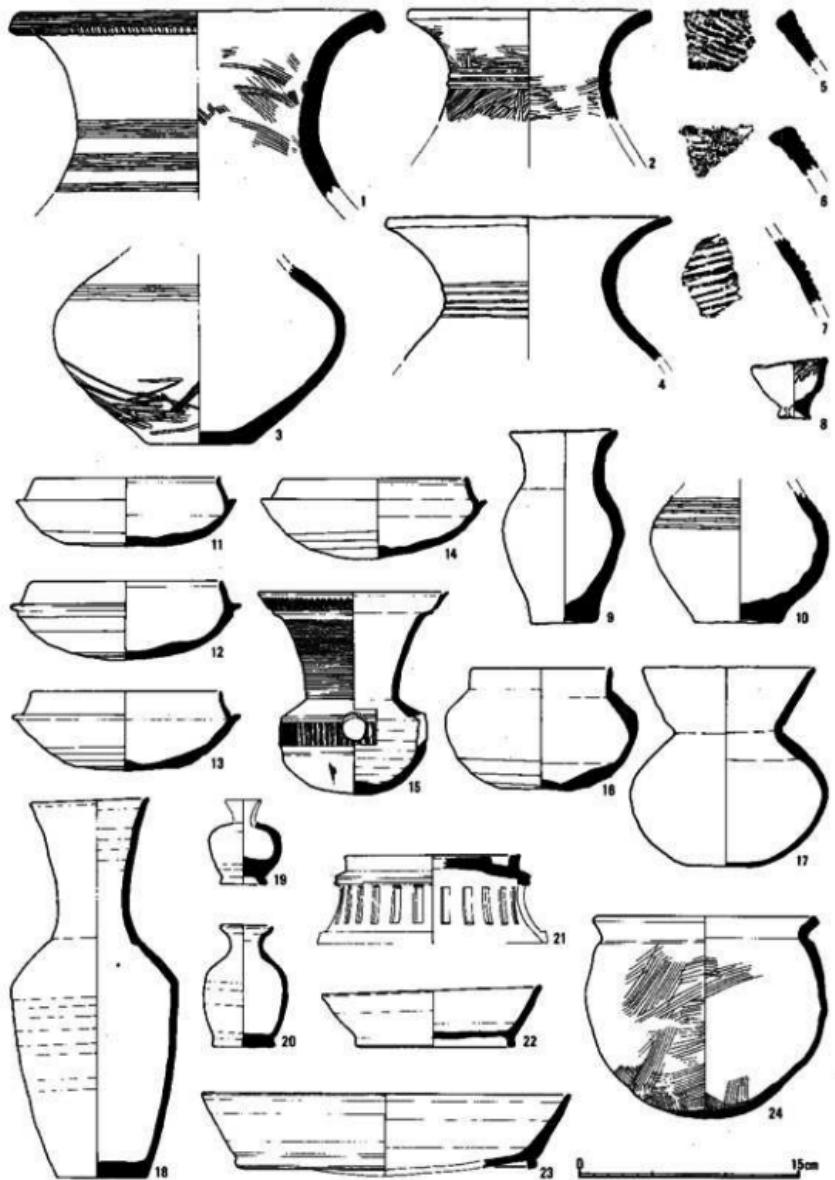
A 弥生時代の遺物（1~10）

弥生時代の遺物には、土器（壺、甕、甕蓋・ミニチュア土器）と石器・石製品（鐵・槍先・石包丁・砥石）及びサヌカイト剥片がある。時期はすべて前期～中期に属する。1 は S K01、3 は S K08、10 は S K06、2・4~7・9 は暗褐色土から出土した。

壺（1~4・9~10） 1~4 は中形壺。1 は口径 24.2cm。口縁部は端面をもち、わずかに垂下する。端面には櫛描直線紋、その下端には刻み目を施す。頸部外面には 3 条の櫛描直線紋、内面には粗いハケを施す。2~4 はともに口縁部に端面を持つ。口径は、2 が 16.0cm、4 が 19.0cm。ともに口頸部界にヘラ描沈線を施す。2 は 2 条で、その下を削って段をつくる。4 は 5 条。3 は扁球形の胴部片。胴部径 20.0cm。頸胴部界に 5 条の沈線を施す。9~10 は小形壺。9 は口径 7.1cm、胴部径 8.4cm、器高 13.0cm。10 は胴部径 12.0cm。



1. 暗褐色土 2. 暗灰色土 3. 黒色粘土
S E02 平面図・立面図 (1/50)



出土遺物(1/4)

頸部に5条のヘラ描沈線を施す。

ミニチュア土器(8) 口径5.1cm、器高3.8cmの手づくね土器。内面にハケを施した後、内面下半部をなであげ、口縁端部をなでる。脚部に指頭圧痕が残る。

撇入土器(5~7) 東海系の条痕紋土器。5・6は「内傾口縁土器」の口縁部片。

B 古墳時代の遺物(11~17)

古墳時代の遺物には須恵器(杯・高杯・短頸壺・甕)、土師器(壺)がある。時期は後期前半に属する。暗褐色土より出土した。

須恵器杯(11~14) 口径12.5~12.9cm、器高4.8~5.5cm。底部はやや扁平で、たちあがりはやや内傾する。端面は内傾し、浅くくぼむものもある。回転ケズリは底部の約1/4から底部のはば全面におよぶ。

須恵器壺(15) 口径12.9cm、器高13.7cm。体部は扁球形。頸部はやや外上方にのび、段を成して口縁部に至る。端部は内傾し、浅くくぼむ。口縁部には櫛描波状文、頸部にはカキ目調整後、上半のみ櫛描波状紋を施す。体部では肩部の下に櫛描波状紋を施した後、その上下を強くナデる。

須恵器短頸壺(16) 口径9.5cm、器高8.2cm。底部には回転ケズリ。

土師器壺(17) 口径11.4cm、器高13.5cm。扁球形の体部。口縁部は外上方にやや長くのびる。

C 奈良時代の遺物(18~24)

奈良時代の遺物には、須恵器(杯・皿・壺・甕・高杯)、土師器(碗・甕・杯・高杯)、瓦(丸瓦・平瓦・軒丸瓦6319A型式)、陶硯、土馬、銅錢がある。時期は奈良時代後半~末である。18・21~24はSE02、20はSE01から出土した。

須恵器壺(18~20) 壺G(18)と壺M(19・20)とがある。19には高台がつく。18・19の底部には糸切り痕が残る。

須恵器杯・皿(22~23) 杯B(22)と皿D(23)がある。ともに高台がつく。

土師器壺(24) 壺Aである。内外面ともにハケを施す。外面には煤が付着している。

陶硯(21) 圓脚円面硯である。硯部のみであるが、脚の痕跡から幅6mmの長方形透かしを復元できる。硯部は海と陸が明瞭に区別できる。突帯はほぼ垂直に突出し、端部は内傾する。陸部は摩滅している。

IV まとめ

今回の調査では、平城京跡以外に、弥生時代の遺跡を確認した。遺構は土塙に限られるが、土塙のほか、流路や落ち込みから多量の土器、石器が出土した。北和では、弥生時代前期の遺跡はこれまで未発見であり、今後、出土資料の詳細な検討や付近の調査によって、その様相を明らかにしていく必要があろう。

(森下浩行)

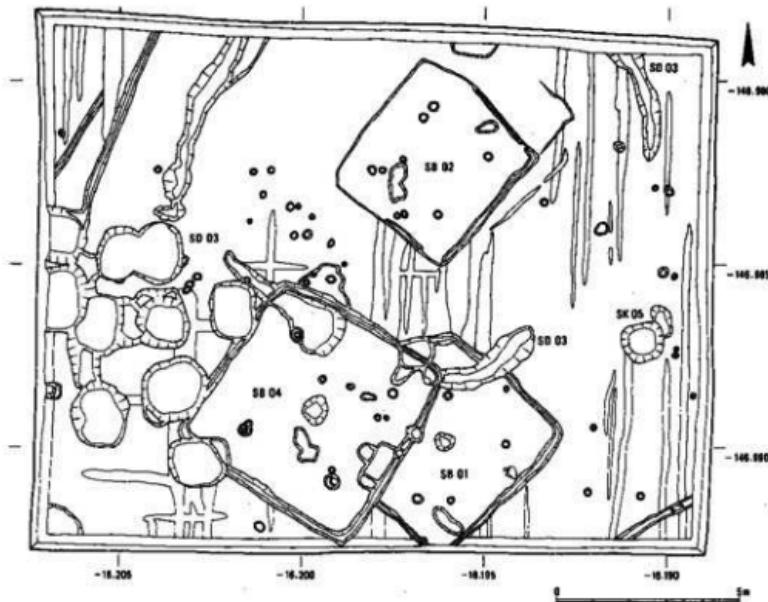
2. 平城京左京(外京)四条五坊十二坪の調査 第144次

I はじめに

本調査は、奈良市杉ヶ町25番地1・2、同26番地1・2において、日宝土地建物株式会社届出の共同住宅建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は面積約900m²の既造成地で、平城京の条坊復元では左京(外京)四条五坊十二坪の西半ほぼ中央部にある。調査目的が京内宅地の様相解明であったことは言うまでもないが、実際にはこの時期の遺構を何ら検出することができず、かわりに弥生時代集落の一部を掘りあてる予想外の結果となった。調査期間は昭和63年1月11日から2月4日までで、発掘面積225m²である。

II 検出遺構

発掘区内の土層は、地表下0.6~0.7mまでが造成盛土、以下に旧耕土・床土と灰褐色土の堆積0.4mがあり、黄褐色粘土の地山に達する。遺構検出面は地山上面で、標高66.3~66.4mである。主な検出遺構は、弥生時代後期の竪穴式住居3棟と土塙1で、ほかには中世の土取り穴いくつかがある。



発掘区平面図 (1/160)

S B01 後述 S B04の構築で全体の1/4ほどを欠くが、一辺約5.0mの平面隅丸方形の堅穴式住居に復元できる。地山面を床面とし、幅0.1~0.3m、深さ0.1mの周溝がめぐる。四隅に柱を配したいわゆる四本柱の構造で、一辺の柱間は2.0~2.1mである。床中央に炉が残存する。重複関係から S B02・04よりも古いことがわかる。床面と周溝から畿内第五様式の土器少量が出土した。

S B02付 S D03 長軸4.5m、短軸4.2mの平面隅丸方形の堅穴式住居。地山面を床面とし、西北辺を除き幅0.1~0.2m、深さ0.05~0.1mの周溝が断続的にめぐる。いわゆる四本柱構造で、一辺の柱間は2.0~2.2mである。炉は検出できなかったが、当初から無かったのか、あるいは削平されて残存していないのかは判然としない。さらに住居本体の外周には、2.5~3.5mの間隔をおいて、これを囲んで一重の素掘り溝 S D03がめぐる。幅0.4~0.9m、深さ0.1~0.3mで、住居東南の一辺で長さ5.6mにわたって明確に途切れた部分がある。入口であろう。S D03に重複関係があるので、本住居は S B04よりも古く、S B01よりは新しいものと理解し得る。S D03から畿内第五様式の土器が出土した。

S B04 一辺約5.7mの平面隅丸方形の堅穴式住居。地山面を床面とし、幅0.15~0.3m、深さ0.1mの周溝がめぐる。いわゆる四本柱構造で、一辺の柱間は2.8~3.0mである。床中央に炉が残存する。また、床面の東南辺には周溝に接して長辺1.3m、短辺0.6mの平面矩形で深さ0.1mの掘り込み部分があり、灰色バラスが入れてある。いかなる性格のものかは不明である。重複関係から S B01・02よりは新しいことがわかる。床面と周溝から畿内第五様式の土器少量が出土した。

S K05 東西1.15m、南北1.1mの平面不整形の土塙で、深さ1.2m。埋土は暗灰色粘土で、畿内第五様式の土器が比較的まとまった数量出土したほか、植物種子数点も出土した。

III 出土遺物

出土遺物の大半が弥生土器（畿内第五様式）である。ここでは S K05下層（暗灰色粘土）出土土器について記す。器種には、壺・甕・鉢・高杯・器台がある。

壺 大型品（1~5）と小型品（15・17・18）がある。1は口縁部端面に円形浮紋を2個以上つける。2は体部と頸部の境に刻み目凸帯を有す。3は底部片で、タタキの後ヘラミガキを施す。4は口縁拡張部と口縁部内面に波状紋をつける。5は体部と頸部の境に方向を違えた刻み目を有す凸帯をはりつけ、その直下に直線紋と波状紋をつける。17は体部と頸部の境に直線紋、その直下に連続刻突紋を施す。

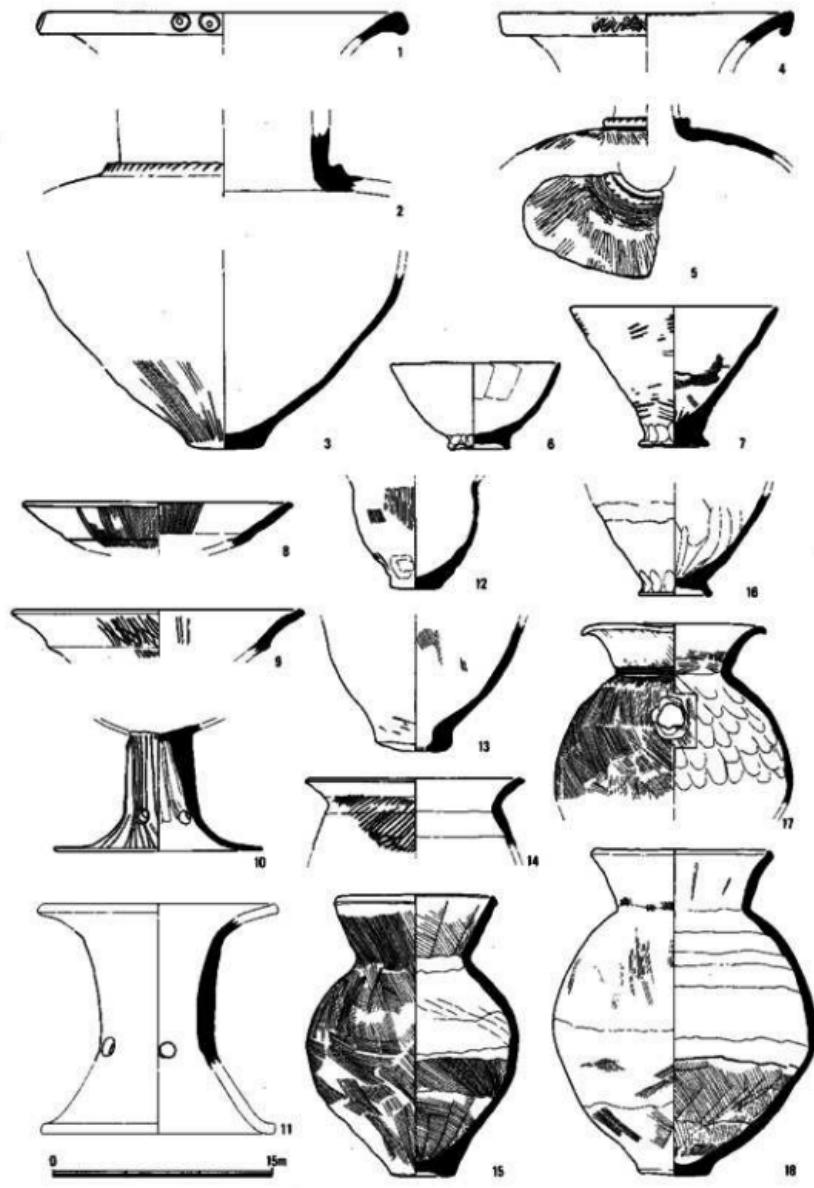
甕 14は口縁部を叩き出す。13のように底部に穿孔があるものがいくつか見られる。

鉢 外面にタタキ目が残るもの（7）とナデ調整がみられるもの（6）がある。

高杯 8は杯部外面を密にヘラミガキする。10には3方向に円孔が穿たれている。

器台 11の器体には3方向に円孔が穿たれている。

（中井 公・鐘方正樹）



S K05下層出土土器 (1 / 4)

3. 平城京左京七条一坊九坪の調査 第128次

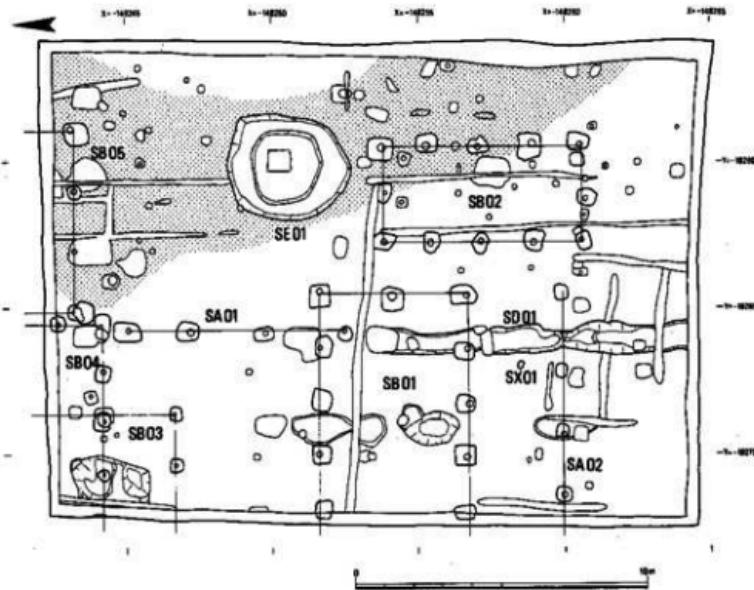
I はじめに

本調査は、奈良市八条町字三道寺473-1番地において実施した㈱タカ食品工業届出の配送センター建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、佐保川北岸の沖積地で、平城京条坊復元によると左京七条一坊九坪の南西隅の部分に相当する。調査地周辺では、弥生時代の流路や土塙なども検出されている。調査は、九坪内の様相を把握することを目的として、東西19m、南北25m（面積475m²）の発掘区を設定し行なった。調査期間は、昭和62年5月8日から同年6月29日までである。

II 検出遺構

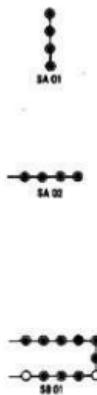
発掘区内の土層は、約1.7mの造成土の下、旧耕土、床土、灰色砂と続き、地表下約2.1mで黄褐色土の地山にいたる。遺構検出面は地山上面で、標高は54.5m前後である。

検出した奈良時代の遺構には、掘立柱建物5棟、掘立柱塀2条、井戸1基、南北方向の素掘り溝1条、土塙などがある。この他、奈良時代以前の自然流路を確認した。



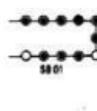
発掘区平面図 (1/200)

S D01 発掘区南西部で検出した南北方向の素掘り溝で長さ10mまでを確認した。南端は発掘区外へ延びるため全長は不明である。溝の東西幅は約1.0m、深さは検出面から約0.5mを測る。東西方向に延びる掘立柱塀S A02と交差する部分だけが幅0.5mと狭くなる。また、深さも0.1mと浅い。溝内からの出土遺物はない。坪を分割するための施設であろうか。溝の主軸は、国土方眼方位と一致している。



S A01 S D01の北側で検出した全長3間(7.5m)の南北塀。柱間寸法は、北から2.2-2.6-2.7mと不揃いである。主軸は国土方眼方位と一致する。

S A02 発掘区南西部で検出した3間(6.9m)以上の東西塀。柱間寸法は、東から2.6-2.2-2.1mを測る。柱筋がS B01の桁行柱列と平行する位置にあることや南端の柱穴がS B01の東妻柱と揃っていることなどからみてS B01に伴う施設と考えることができる。主軸は、国土方眼方位と一致している。



S B01 発掘区中央部でS D01と重複して検出した桁行5間(9.5m)以上、梁行2間(5.0m)の東西棟建物。柱間寸法は、桁行1.9m等間、梁行2.5m等間である。2柱穴には柱根が残存していた。重複関係からS D01よりも新しいことがわかる。主軸は、国土方眼方位と一致する。



S B02 S B01の東側で検出した桁行4間(6.8m)、梁行2間(北3.2m、南3.3m)の南北棟建物。柱間寸法は、桁行1.7m等間、梁行は北妻柱列で1.6m等間、南妻柱列で東から1.9-1.4mである。主軸は、国土方眼方位と一致する。



S B03 発掘区の北西隅で検出した東西1間(1.8m)以上、南北1間(2.5m)以上の建物。主軸は、国土方眼方位と一致する。



S B04 S B03と重複して検出した桁行4間(6.9m)以上、梁行1間(1.6m)以上の東西棟建物。柱間寸法は、桁行が東から1.7-1.7-1.8-1.7mを測る。重複関係からS B03よりも新しいことがわかる。主軸は、国土方眼方位と一致する。

※建物構造図凡例

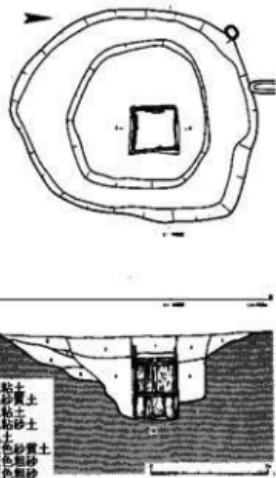
●柱根残存 ◎柱痕跡を確認 ○掘形のみ確認(図の上が北)

S E01 発掘区中央部で検出した井戸。掘形は、東西3.6m、南北4.1mの平面梢円形を呈し、検出面からの深さ1.5mを測る。掘形内北寄りに、内法一辺0.7mの方形縦板組井戸枠が据えられていた。四隅にたてた角柱に横桟を柄留めして縦板を保持している。縦板は幅18~22cmのものが各辺に6~8枚使われている。各片両端の縦板は角柱に彫られた溝にはめこみ固定されている。横桟は下から2段目までを確認した。西面の上段横桟の上には幅2cm、長さ71cmの横板があげがわれていた。井戸枠内からは奈良時代の土器類や木製品、金属製品などが出土。

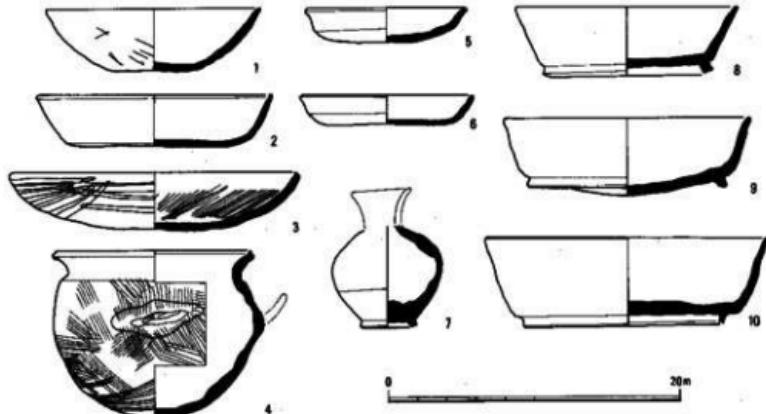
S X01 発掘区南半部にあるS D01の西肩部で検出した南北0.17m、東西0.12mの平面円形の小土塙。検出面からの深さ約0.1mを測る。須恵器杯Bが納められていた。

III 出土遺物

遺物包含層及び井戸、土塙、柱樋形から瓦類、土器類、木製品、金属製品、漆紙文書が出土した。出土遺物の全体量は遺物整理箱20箱と少ないが、S E01から出土したものは時期的にまとまりがあり、遺存状態の良好なものが比較的多い。以下、S E01から出土した遺物について概要を記す。



S E01平面図・立面図 (1/100)



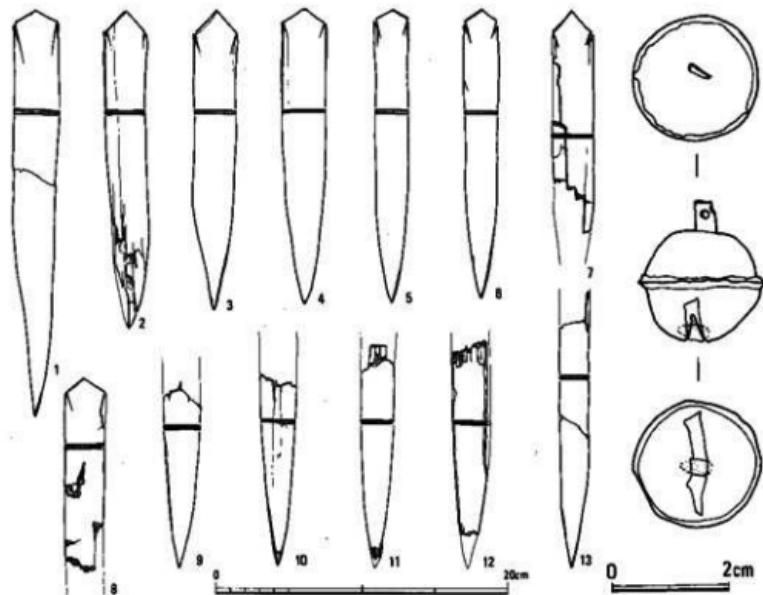
S E01出土土器 (1/4)

土器類 奈良時代中頃の特徴をもつ土師器、須恵器が主体をなすが、一部に後半期のもののが混ざる。

土師器 杯A、杯B、杯B蓋、皿A、皿C、碗A、壺A、甕がある。杯Aは、底部から口縁部にかけて横なでしたのちに外面全体をへら磨きする a_3 手法のものと底部外面だけをへら削りし口縁部は横なで調整をする b_0 手法のもの（2）、底部外面から口縁部外面をへら削りする c_0 手法のものがある。 a_3 手法のものには、平城宮土器IIの特徴とされている一段の斜放射状暗文+連弧状暗文を施すものがある。皿Aには、底部から口縁部にかけて横なでをする a_0 手法のものと底部外面をへら削りし、口縁部を横なでしたのちへら磨きを施す b_2 手法のものがある（3）。3は平城宮土器IIIの特徴とされている一段の斜放射状暗文を施している。皿C（5・6）は、 a_0 手法で調整されている。碗Aは、外面全体をへら削りしたのち口縁部外面に磨きを施している。

須恵器 杯B、杯B蓋、鉢A、平瓶、壺M、壺A蓋、甕がある。杯B（7～9）はいずれもロクロナデで調整されている。9は、口縁部内面下半から底部内面にかけて漆が付着している。壺M（10）は、体部外面下半部をロクロ削りで調整している。

木製品 SE01の枠内から簾串、曲物側板、板片、棒状木製品、種子などが出土した。



SE01出土木製品（1/4）・金属製品（1/1）

1～14は斎串である。1～6は完形の斎串で、細長い板材の上端を圭頭状に、下端をV字状にしたもので、両側面は縦方向に丁寧に削られ側縁の上端には1条の切込みをもつものである。1は長さ27.4cm、幅3cm、厚さ0.4cmある。2は下端の一側縁の一部を欠く。長さ21.5cm、幅3cm、厚さ0.5cmある。3～6は1・2より小型の長さ20cm前後のもので、幅が3cmのもの3・4と2.2cmのもの5・6がある。7・8は上半が残るもので、幅は7が2.9cm、8が2.7cmある。9～13は下半が残るもので、幅は2.0～2.7cmある。

金属製品 銅鈴が1点ある。14はSE01枠内から出土した完形の銅鈴である。銅鈴は厚さ約0.1cmの銅板を半球状にたたきだしたものと上下に合わせ、下半の周縁で上半の周縁を挟み込んで球状にしたもので、頂部には中央を穿孔した長方形の紐が付き、下面には一文字の切口をもつものである。鈴内に0.5cm大の小石を入れ、音を出す。色調は赤銅色で径2.2cm、高さ2.5cmある。これまでに平城京内で銅鈴が井戸内から出土した例としては当教委が実施した第102次調査SE20出土のもの1点があり、14とはほぼ同型である。この井戸内からは木製の祭祀具は出土していない。今回のSE01枠内から出土した斎串、銅鈴は井戸祭祀を考える上で貴重な一資料となろう。

漆紙文書 漆紙文書の断片20片が出土した。断片には数枚の紙が固着している部分が認められるが、現状では紙数まで数えるに至っていない。このうち墨書が確認できるものは3片あり、その駄文を右に掲げた。以下、墨書が残る断片の特徴を記す。

(1) 長辺15cm、短辺7cmの断片で、L字形に折れ曲がっている。漆液表面に付着した紙が容器の内壁に沿って折れ曲がる箇所の一部であろう。2枚以上の紙が重なりあっており、漆液の表面に接していた面に20字あまりの墨書を確認した。

(2) 長辺11cm、短辺7cmの断片で、両面ともに漆液が厚く付着している。1と同じように2枚以上の紙が重なりあっており、片側の面に10字あまりの墨書を確認。

(3) 長辺4cm、短辺3cmの残片で、U字形に折れ曲がっている。漆液は両面ともに付着している。折れ曲がった内側にかうじて3文字分の墨書を確認できたが、判読することはできない。

| | |
|-------|-----------|
| (1) | |
| (馬) | □□跡跡戸主□ |
| | (少) |
| | 近江国神前郡□□ |
| | □ |
| | □□□ (人) |
| | 合併四□ (別紙) |
| (2)拾貳 | (3) |
| □ | □□□ |
| | 左京少□ |
| (馬) | □□□呂 (別紙) |

(三好美穂、篠原豊一)

| 調査位置 | 内容 | 出土遺構 | 調査位置 | 内容 | 出土遺構 |
|-----------|-------------|---------|----------|-----------|-------------|
| 左京三条一坊十六坪 | 計帳 | 宅地内土塙 | 左京八条三坊 | 不 明 | 九・十坪坪境小路南側溝 |
| 平城宮東南隅 | 不 明 | 南面大垣北側溝 | 左京八条一坊六坪 | 「小子小女歴名」穴 | 宅地内獨立柱建物柱抜取 |
| 左京二条二坊 | 出舊陶器 文書等 | 坊間大路西側溝 | 左京七条一坊九坪 | 不 明 | 井 戸 |

平城京出土漆紙文書一覧表

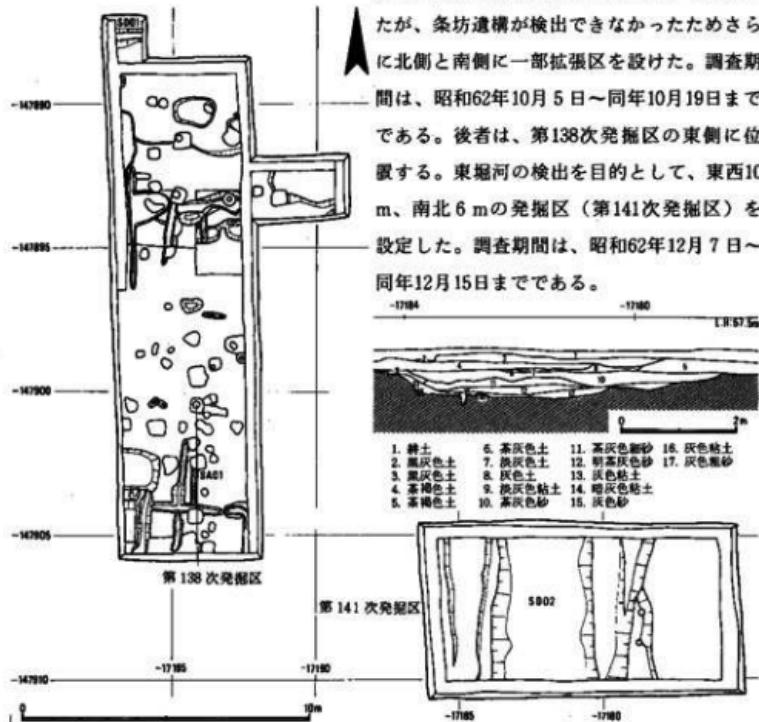
4. 平城京左京六条三坊十一坪・東堀河の調査

第138次・第141次

I はじめに

本調査は、奈良市大安寺町69-1、4番地における大西庄治氏届出の個人住宅建設及び同65番地における武野昭和氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地はたがいに隣接しているため、ここに一括して報告する。当該地は、平城京条坊復元によると左京六条三坊十一坪に相当し、坪の中央には南北に流れる東堀河が想定されている。昭和58年度に奈良市教育委員会が今回の調査地の北側を発掘しており、東堀河の東岸の検出や堀河埋土から奈良時代の土器が多量に出土するなど、大きな成果を得ている。前者は、六条間路及び東堀河に関する遺構を検出することを目的として、東西5m、南北17mの

発掘区（第138次発掘区）を設定して行なったが、条坊遺構が検出できなかつたためさらに北側と南側に一部拡張区を設けた。調査期間は、昭和62年10月5日～同年10月19日までである。後者は、第138次発掘区の東側に位置する。東堀河の検出を目的として、東西10m、南北6mの発掘区（第141次発掘区）を設定した。調査期間は、昭和62年12月7日～同年12月15日までである。



第138・141次発掘区平面図 (1/200)・第141次発掘区北壁土層図 (1/100)

II 検出遺構

発掘区内の基本的な層序は次のとおりである。第138次発掘区は、耕土の下、灰色土、淡灰色土と続き、地表面下約0.2mで、茶灰色あるいは茶色土の遺構面にいたる。第141次発掘区は、耕土・床土が約0.3mの厚さで堆積し、この下がすぐに奈良時代の遺物を包含する茶褐色土となる。以下、発掘区ごとに検出遺構の概要を記す。

第138次発掘区 検出した奈良時代の主な遺構には掘立柱列1条、素掘り溝1条がある。

S A01 発掘区中央南半部で検出した南北2間以上掘立柱列で、発掘区外にのびると考えられる。柱間寸法は2.0m等間である。

S D01 北拡張区で検出した素掘り構。南肩部を検出したのみであるが、六条条間路南側溝あるいは雨落ち溝になると考えられる。

第138次発掘区では東堀河に関する遺構を検出することはできなかった。

第141次発掘区 十一坪を縦断して流れる河道を検出した。

S D02 発掘区内全域に及ぶ河道で、東堀河と考えられる。東西両端は検出できなかつたため不明である。検出面から最深部底面まで0.7mで、標高は55.9mを測る。昭和58年度に実施した東堀河の調査では、東堀河の最深部の標高は56.4mで、今回検出した堀河との比高差は0.5mとなる。堆積土層は底部に約20cmの厚さで灰色粗砂があり、この上に茶褐色砂と粘土が互層となっている。埋土からは主に奈良時代の土師器、須恵器が出土した。

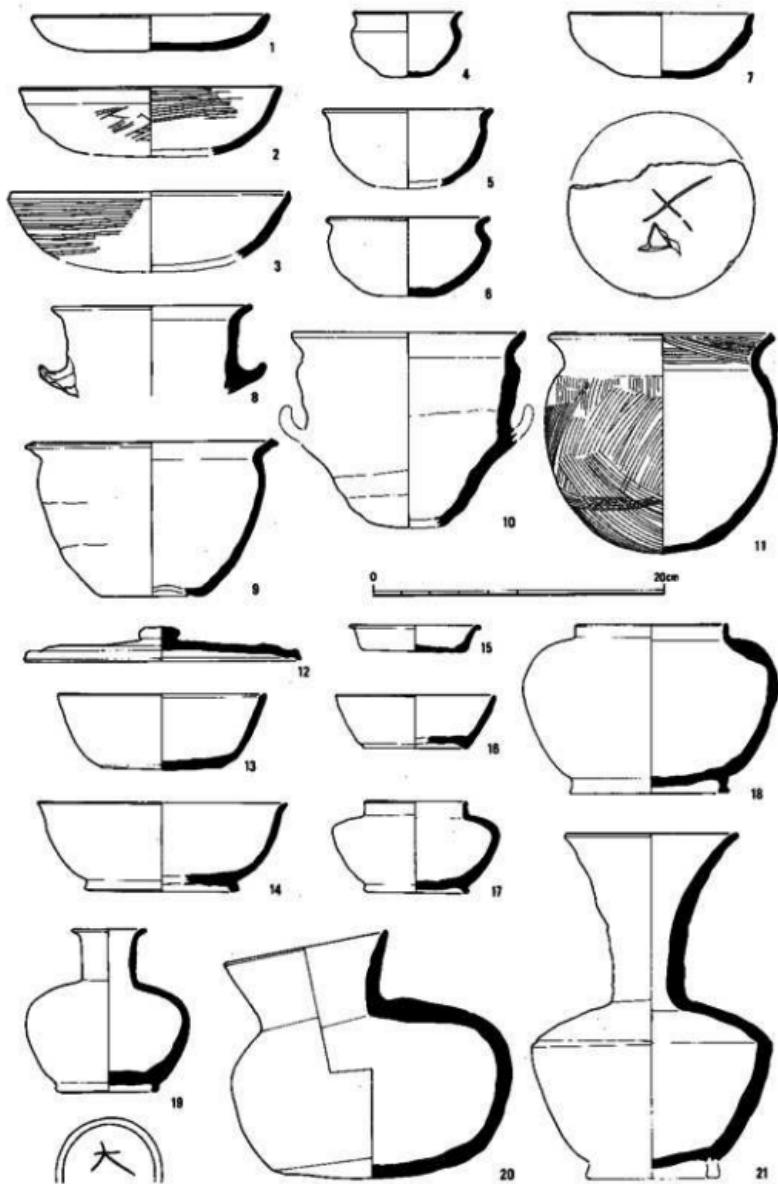
III 出土遺物

出土遺物の大半は第141次発掘区で検出した S D02からのもので、遺物整理箱で20箱分を数える。丸瓦・平瓦が数点あるだけで、ほとんどが土器類である。第138次発掘区からも奈良時代の土師器、須恵器、土馬などが出土しているが、遺構に伴うものは少ない。ここでは、S D02出土の土器類について説明する。

S D02出土土器 土師器、須恵器、黒色土器、墨書き土器、人面墨書き土器がある。

土師器 杯A・C、皿A・B・C、碗A・C、鉢B、高杯、壺A・B・C、壺、カマドがある。皿Aには口縁部内外面を横なでする *a* 手法、底部外面だけをへら削りする *b* 手法のものが多くみられる。皿Bには *b* 手法のちに内面に一段の斜放射状暗文を施すものがある。碗Aの調整は *a* 手法のものが多くみられる。3は、口縁部内外面にへら磨きを施す *as* 手法によるものである。碗C(9)は *a* 手法。底部外面には「×」の線刻がある。壺Bには把手のつくもの(10)とつかないもの(9)がある。10は、胴部内外面に不定方向の粗いなでを加えるだけなので、粘土紐の巻き上げ痕が残る。壺C(4~6)は口縁部内外面を強く横なで、それ以外は未調整のままである。壺A(11)の胴部外面及び口縁部内外面にはハケ目調整がみられる。

須恵器 杯A・B・C・L、皿A・B・C・D・E、碗C、鉢A・D・E・F、高杯、



S D02出土土器① (1 / 4)

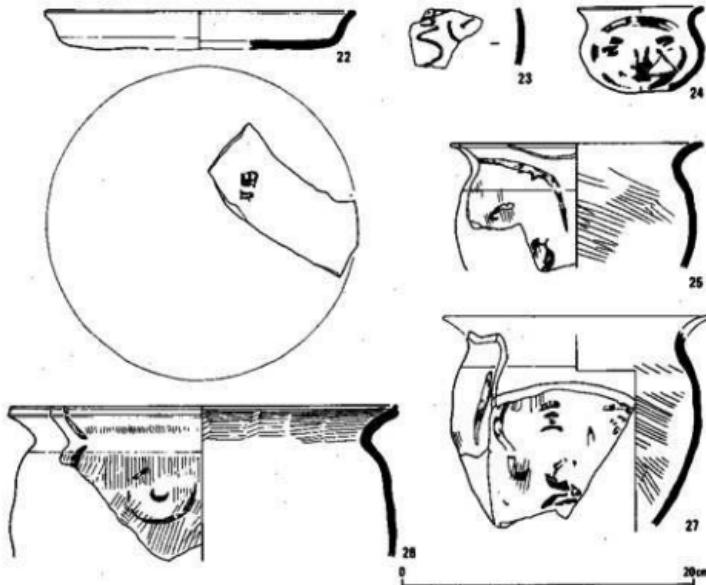
壺A・B・C・D・E・K・L、横瓶、平瓶、甕A・B・Cがある。杯類は器面全体がロクロナデ及びロクロ削りで調整されており、底部にヘラ切り痕が残るものはみられない。皿E(15)は平底と斜め上方に開く短い口縁部からなり、口縁端部が外方に薄く引き出されるのが特徴である。底部外面にはヘラ切り痕が残る。壺類には多種多様の器形がある。壺Lの底部外面には「大」の文字が線刻されている。平瓶(20)は把手を持たないタイプのもので、全体的に丸みをおびている。

黒色土器 杯A(2)がある。A類に属するものである。摩滅が著しく詳細な調整は不明。

墨書き土器 土師器皿A(22)の底部外面に「田口」と墨書きされている。23は、小破片のため器形はわからないが、外面に墨書きが残る。判読は不可能である。

人面墨書き土器 壺B・C及び甕Aの胴部外面に人面を描いた土器が5点出土した。壺B(25・27)は胴部外面にハケ目調整を施したのちになでを加えている。壺C(24)は口縁部内外面だけを強く横なで、それ以外は未調整のまま放置している。いずれも顔の輪郭、眉、目、鼻、口が表現されている。甕A(28)は胴部外面と口縁部内外面をハケ目調整している。胴部外面には顔の輪郭と丸い目が描かれている。破片のため、顔全体の様子は不明である。

(三好美穂、森下浩行)



S D02出土土器② (1/4)

5. 平城京左京(外京)二条七坊十四坪の調査 第126次

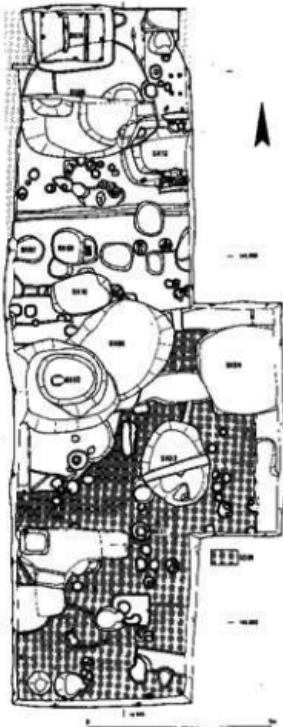
I はじめに

本調査は、奈良市北半田町1・2番地他において実施した下谷幸司氏届出の旅館新築に伴う事前の発掘調査である。調査地は条坊復元で左京(外京)二条七坊十四坪の北辺にあたり、十三・十四坪坪境小路が想定され、中近世になると奈良街道への出入口の町屋として栄えた。調査地は興福寺のある春日野丘陵の北斜面に位置しており、地表はゆるやかに北へ傾斜する。調査期間は昭和62年4月13日から同月24日までである。

II 検出遺構

発掘区の土層は、北半で厚さ0.2mの近世の包含層を除去すると黄褐色砂質土の地山となるが、南半は地山が南側へ落込み、その上層は淡黄灰色砂、淡黄褐色砂土、黄褐色土となる。遺構面の標高は概ね85.2mである。

S D01は発掘区南半にある自然流路で、ほぼ地山の落込みと一致し、南半最下層の淡黄灰色砂が埋土である。奈良時代の土器が若干出土した。この流路を黄褐色土、淡褐色砂土で埋め整地する。S K02は楕円形の浅い土塙で、11世紀末の土器が出土した。S E03は発掘区の中央にある井戸で、井戸枠は抜き取られており残存しない。掘形は径4.0m、深さ2.7mである。12世紀初頭の土器が出土した。S K04は方形の土塙で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。一辺は2.2m、深さ1.4mである。S K05は楕円形の土塙で、深さ0.8mである。共に13世紀初頭の土器が出土した。S E06は発掘区北辺にある円形の掘形もつ井戸で、径3.4m、深さ3.4mである。井戸枠は縦板組横棟どめで、検出面から深さ2.0mまでは抜き取られている。掘形埋土から13世紀後半の土器が出土した。S K07もこの時期である。S K08は円形の土塙で径0.7m、深さ0.2mである。S K10は長方形の土塙で東西1.8m、南北1.



発掘区平面図 (1/150)

2m、深さ0.4mである。共に14世紀後半の土器が出土した。SK11は径0.5m、深さ0.1mの円形土壇で中央に15世紀頃の瓦器大甕を据える。SX12は石組で発掘区外へのびる。石組は長方形の掘形の中に南北1.0m幅の石積みが1段分残り、西壁は攪乱で破壊される。掘形は東西1.7m以上、南北1.8m、深さ0.45mである。18世紀代の陶磁器が出土した。SK13もこの時期である。SX14は発掘区北辺で検出した隅柱横板どめの木枠が残る長方形の土壇である。掘形は東西2.1m、南北1.8m、深さ1.1m、木枠は東西1.8m、南北1.5mである。遺物は出土しなかったが、重複関係から見て近代のものであろう。

III 出土遺物

出土遺物には円筒埴輪片、須恵器片、土師器片、軒瓦、瓦片、綠釉陶器、瓦器、中国磁器、国産陶磁器、鉄製刀子・釘、滑石製鍋、砥石、土製人形など古墳時代以降の多種多様な遺物がある。このうちの瓦類と土器類について記す。

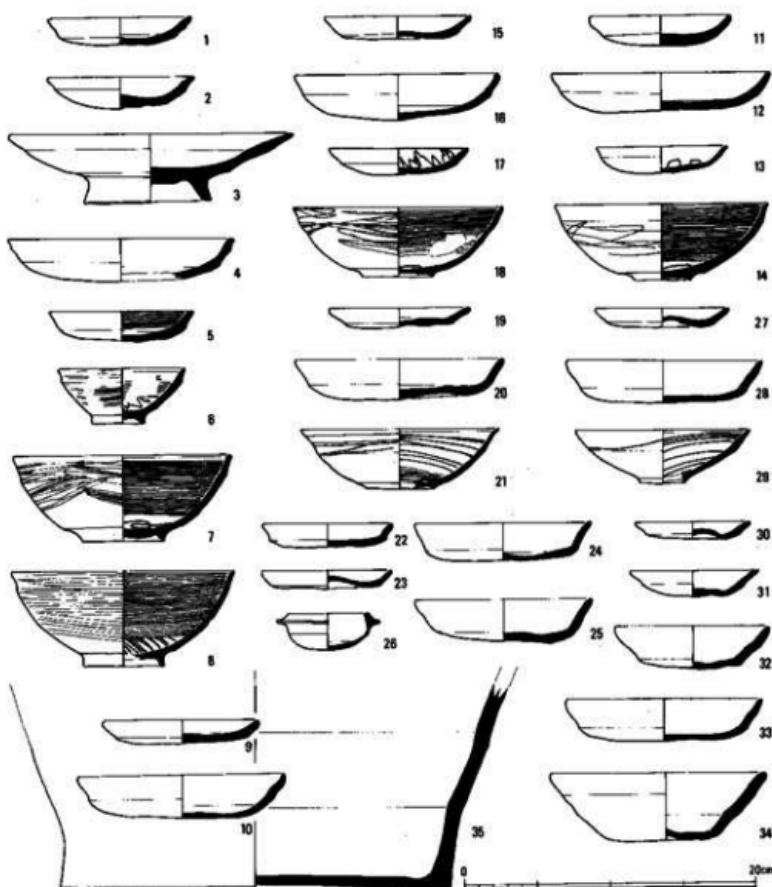
瓦類 軒丸瓦11、軒平瓦23、文字瓦1、平瓦、丸瓦がある。奈良時代の軒丸瓦3、軒平瓦5、文字瓦1について記す。軒丸瓦はSK02から6235M型式、SK13から6235型式、包含層から新型式の幾何学文軒丸瓦が出土した。軒平瓦はSK05から6671B型式、SK04から6732G型式、SE03から6732型式種別不明、包含層から6690Ab・6732S型式が出土した。文字瓦は平瓦の凹面に「東大口」銘の刻印がある。



幾何学文軒丸瓦
(1/4)

土器類 今回の調査では特に中世の遺構、遺物が多く、その時期を代表するSK02・04・05・06・08・10・11、SE03・06の土器について述べる。SK02出土土器には土師器皿(1~4)、瓦器碗(6~8)、瓦器皿(5)、白磁碗がある。土師器皿には、口径10cm前後の小皿と口径15~16cm前後の大皿があり、内面と口縁外面によこなでを施す。3は貼り付け高台の皿で、他に削り出し高台の皿もある。瓦器碗は内面と口縁外面をよこなで後、内面、外面にへら磨きを密に施す。見込みには、ジグザグ状・螺旋状のへら磨きを施す。11世紀末から12世紀初頭にかけての土器である。SE03出土土器には土師器皿(9・10)、須恵器甕、綠釉皿がある。SK04出土土器には土師器皿(15・16)・高杯・釜、瓦器碗(18)・皿(17)、須恵器鉢・甕、白磁碗がある。SK05出土土器には土師器皿(11・12)・釜、瓦器碗(14)・皿(13)、須恵器鉢などがある。土師器皿は平底で口縁部上半をよこなでする。瓦器皿は内面にジグザグ状のへら磨きを施す。瓦器碗は口縁部外面のへら磨きが粗くなり、高台は断面三角形となる。SK03~05は12世紀末から13世紀初頭のものであるが、SK05出土土器は古い様相を呈する。SE06出土土器には土師器皿(19・20)・釜、瓦器碗(21)・皿、須恵器鉢がある。土師器皿は口縁部が強いよこなでにより、底部との境に稜をもつ。瓦器碗のへら磨きは内面も粗く施す。13世紀後半の土器である。SK07出土土器には土師器皿(22~25)・ミニチュア釜(26)があり、土師器皿には底部がやや上げ底

のものがある。14世紀前半の土器である。SK08出土土器には土師器皿（27・28）、瓦器碗（29）などがある。SK10出土土器には土師器皿（31～34）・高杯・釜、須恵器鉢・壺などがある。土師器小皿は、底部が上げ底状となり、内面と口縁部外面上半によこなでを施す。大皿は平底のやや深い形態で、口縁部上半をよこなでし、口縁部下半・底部外面は成形時の凹凸を残す。瓦器碗は浅い形態となり、高台は痕跡を残すのみとなる。口縁部内面から見込みにかけて一条の粗い螺旋状のへら磨きを施す。SK08・10は14世紀後半の土器であろう。SK11出土の瓦器大壺（35）は15世紀頃のものであろう。（森原豊一）

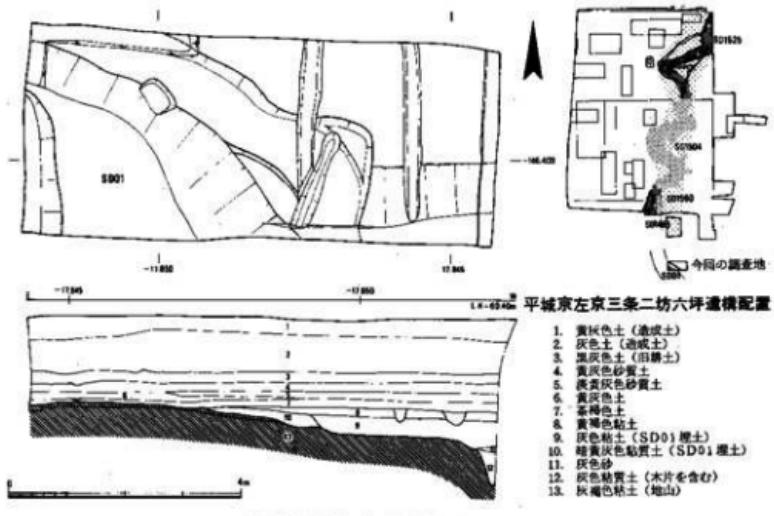


出土土器 (1/4)

6. 平城京左京三条二坊六坪の調査 第137次

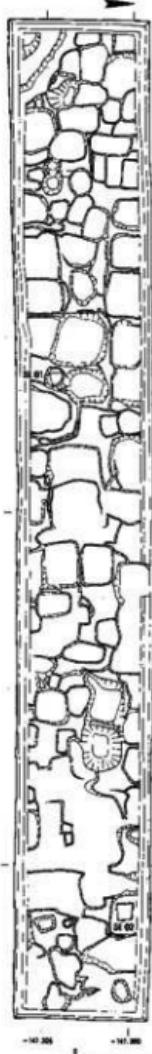
本調査は、奈良市三条大路一丁目627-1番地他において実施した中辻晃氏届出の住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は特別史跡平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園の南側にあたる六坪の南辺中央に想定され、昭和51年の調査で検出された園池 S G 1504から流れる排水路 S D1466が南流する位置に推定される。この溝の検出を目的として東西10m、南北4mの発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和62年8月31日から9月11日までである。発掘区の土層は地表下1mまで黄灰色土、灰色土の客土で、その下は黒灰色土の耕土、黄灰色砂質土、淡黄灰色砂質土、黄灰色土、茶褐色土となり、地表下1.5mで黄褐色粘土の地山に達する。遺構面の標高は概ね58.6mである。奈良時代の溝1条と中近世の素掘り溝を検出した。S D01は発掘区の南西隅で検出した南で東へやや斜行する南北溝で西岸は発掘区外である。東岸は浸蝕のためか稜線が乱れ、発掘区の西辺で深くなっている。埋土からは奈良時代の須恵器片、土師器片、瓦片が少量出土した。S D01は排水路 S D1466の可能性は少なく、園地 S G 1504を造る以前に流れていた旧河川 S D1560・1525のどちらかと考えられるが、今回の調査では明らかにすることはできなかった。 (藤原豊一)

註) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』 1986



発掘区平面図・南壁土層図 (1/100)

7. 平城京右京五条一坊十五坪の調査 第127次



発掘区平面図

I はじめに

本調査は、奈良市五条町204-1番地において、奈良市が計画する仮称都跡公民館建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。

調査地は、平城京の条坊復元では右京五条一坊十五坪の西南部にあたり、西接して西一坊大路が想定されている。当初は敷地2,800m²のうちの1,000m²を発掘する計画であったが、調査過程で中世の土取り穴が全面におよぶ状態が判明したため、約425m²を発掘するにとどめた。調査期間は昭和62年4月23日から6月10日までである。

II 検出遺構

発掘区の土層は、地表下1.5~1.6mまでが造成盛土、以下に旧耕土・床土と灰褐色土の堆積で0.6mがあり、黄褐色粘土の地山に達する。遺構検出面は地山上面で、標高60.5m前後である。奈良時代の遺構は、土取り穴の掘削によってほとんどが失なわれていると判断できるが、わずかに井戸2基が破壊をまぬがれて残存した。

S E01 東西1.2m、南北1.1mの幾分長円形の平面掘形をもつ井戸で、検出面からの深さ1.1mと浅い。井戸枠は、四隅柱と横棟とで各辺4~5枚の堅板を受ける構造の方形のもので、内法一辺65cmである。井戸底には径60cm 高さ18cm曲物一段を据え、水溜としている。枠内からは奈良時代中頃の土師器・須恵器をはじめ、軒平瓦6721G_b、斎串などの木製品が出土した。

S E02 東西2.3m、南北1.6m以上の平面隅丸方形の掘形をもつ井戸で、検出面からの深さ2.0m。井戸枠は方形横板組のもの上に堅板組のものを重ねた構造であるが、上部の堅板組はほとんど残存しない。下部の横板組は、四隅の角柱を三段の横棟でつなぎ、これで各辺6板の横板を受けている。横板の上下・左右には特に結合の細工はなされていない。内法一辺約1.0mである。枠内からは奈良時代末頃~平安時代初頭頃の土師器・須恵器、斎串・横櫛・曲物容器・ひょうたん容器などの木製品が出土した。

なお、前述の土取り穴のいくつかからは12世紀後半の瓦器が出土しており、これらの掘削時期を知る手がかりになる。

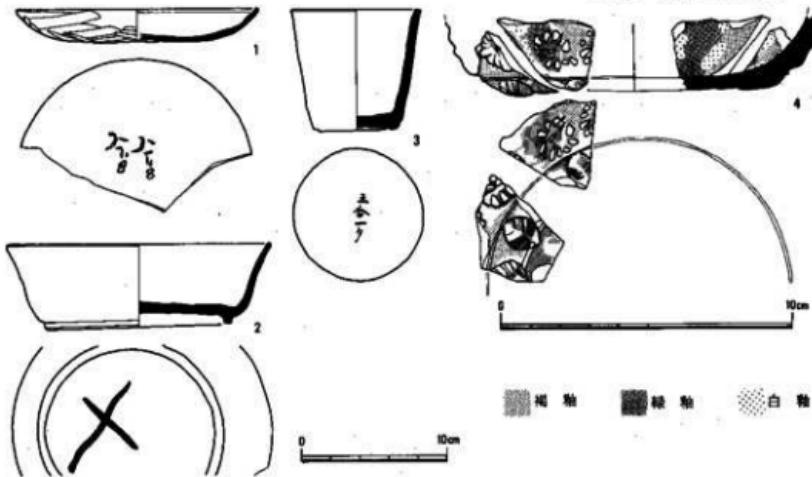
III 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大半は12~13世紀にかけての瓦器碗で、8世紀代の遺物は少ない。しかし、井戸、遺物包含層からは若干はあるが8世紀中~末にかけての土師器・須恵器及び唐三彩2点が出土している。ここでは、8世紀の土器のうち墨書きが残るものと唐三彩について触ることにする。

墨書き土器（1~3） 1は土師器皿Aの底部外面に墨書きされている。「人万呂 人万呂」と読める。2は須恵器皿Bの底部外面に「×」と墨書きされている。記号か。3は須恵器皿Aの底部外面に墨書きされている。「三合一タ」と読める。容量を指すものか。1はSE02から出土した。8世紀末頃の特徴をもつ土器である。2・3はSE01から出土した。8世紀中頃の特徴をもつ土器である。

唐三彩杯（4） 底部付近から口縁部にかけての破片（器厚0.4~0.8cm）が2点出土した。細片のため全体を復元するまでには至らないが、杯の一部と考えられる。口縁部外面には、11~12弁からなる花紋と一重の稜線がめぐっている。残存する2つの花紋の間隔から、口縁部外面の花紋の数は17に復元できる。底部外面には葉と一重にめぐると考えられる稜線が配される。杯全体の紋様構成は、稜線と稜線の間に花や葉などを置くことを基本としているようである。これらの紋様は型押しによる。花弁及び葉は緑釉、花紋と花紋の間は褐釉、底部内面は緑・褐・白釉をまだらにかけている。塗釉法、抜蠟法によるものであろう。胎土は硬質で乳白色を呈している。両破片とも遺物包含層から出土した。

(中井 公、三好美穂)



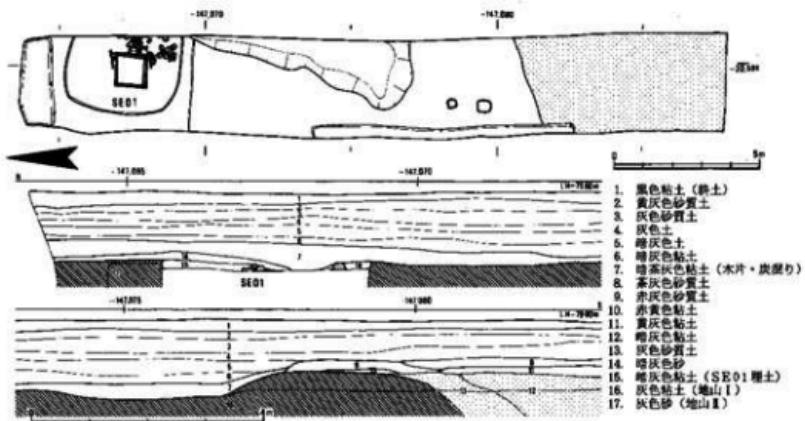
8. 平城京右京四条四坊十二・十三坪の調査 第129次

I はじめに

本調査は、奈良市平松町559番地他において実施した向川博之氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は西の京丘陵から発する南へ延びた谷部の水田にあたり、ほぼ平城京の西辺に位置する。条坊復元では右京四条四坊十二・十三坪の坪境南辺にあたり、四条大路と南北小路が交差する位置に想定される。また、北側丘陵上の十二坪には平松庵寺が推定されている。調査は四条大路北側溝の検出を目的とした東西4m、南北26mの発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和62年6月24日から7月1日までである。

II 検出遺構

発掘区土層は上層から黒灰色土の耕土、黄灰色砂質土、灰色砂質土、灰色土、暗灰色土、暗灰色粘土、暗茶灰色粘土、暗灰色砂となり、地表下1.2mで灰色砂、灰色粘土の地山に達する。地山面の灰色粘土は発掘区の南側で大きく落ち込んでおり、この落ちは旧地形の傾斜面と考えられる。地山面の標高は概ね78.7m～78.9mである。検出した遺構にはSE01がある。発掘区の北辺で検出した井戸で、掘形は発掘区外東へ延びる。掘形の平面は隅丸方形、大きさは南北3.9m、東西2.7m以上、深さ2.9mで、その中央に内法約1.0mの方形井戸枠をもつ。井戸枠は組合わせ方で上中下段に分れる。下段は井籠組で横板が八段分遺存している。横板は相欠き柄で組合わせる。中段は一辺15cmの角材を目違い柄で方形に組合わ



発掘区平面図(1/200)・東壁土層図(1/100)

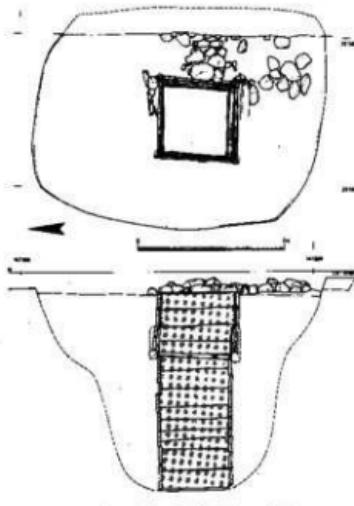
せた井桁の上に据える。横板組隅柱どめで、仕口は長さ35cm、径15cm前後の隅柱に縦方向の溝をほり、横板を二枚落とし込んだものである。この柱の上に上段の井戸枠を据える。上段は井籠組で二段分が遺存している。横板の両端は目違い柄で、上下は2箇所の雁巣で組合わせる。枠内から奈良時代からの平安時代初頭の土器が少量出土した。

II 出土遺物

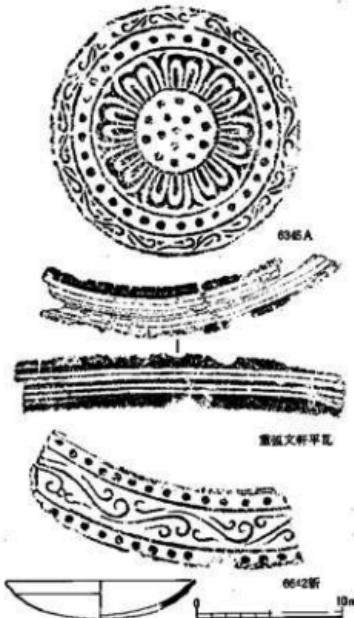
遺物には軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、須恵器、土師器、鉄釘、木製品などがあるがS E01から出土した軒瓦、土器について述べる。軒瓦は枠内から軒丸瓦63236A・6345A型式、軒平瓦6641E・6642新型式が、掘形から軒丸瓦6345A、軒平瓦6642新・重弧文軒平瓦が出土した。これらの軒瓦は平松庵寺所用のものであろう。土器は土師器杯A、須恵器壺Mがある。図示した杯は口縁部がての字状口縁で器壁は薄い。口縁部上半と内面をよこなでする。9世紀初頭の土器と考えられよう。

IVまとめ

S E01の条坊内に占める位置関係について考えて見ることにする。右京四条四坊五坪の当市教委が行なった?次調査では四条大路北側溝と五・十二坪坪境小路東側溝が検出されている。この資料をもとに調査地の四条大路北側溝と南北小路の位置を求めてくると発掘区南側の落込み下に北側溝が、S E01上に南北小路が位置することになる。落込みが溝とは考えられにくいことや、この水田と丘陵頂部の比高差が3m以上あり、丘陵裾は急斜面となることからこの谷部に道路が及んでいた可能性は低いと考えられよう。(篠原豊一)



S E01平面・立面図 (1/80)



S E01出土遺物 (1/4)

9. 平城京左京三条四坊十一坪の調査 第130次

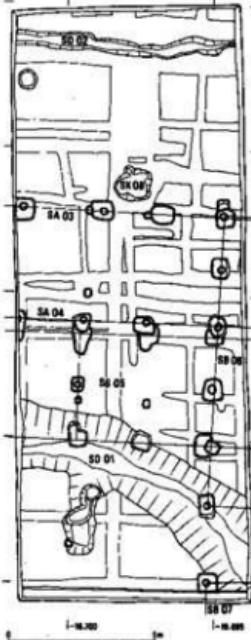
I はじめに

本調査は、奈良市大宮町二丁目153-13・14番地において、安田生命保険相互会社届出の社屋建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京三条四坊十一坪の北西隅にあたり、北接して三条条間路が、西接して東西坊間路が想定されている。調査期間は昭和62年6月26日から7月9日までの14日間で、発掘面積は敷地490m²のうちの160m²である。

II 検出遺構

発掘区内の土層は、地表下0.2mまでが表装の砂利敷、以下に旧耕土・床土と灰褐色土の堆積で0.4mがあり、黄褐色土の地山に達する。遺構検出面は地山の上面で、標高64.5m前後である。奈良時代の遺構には、掘立柱塀2条、掘立柱建物3棟、素掘り溝1条、土塁1

があり、このほかに弥生時代の流路1条がある。



発掘区平面図 (1/200)

S D01 発掘区南端近くを北西から南東方向に横切る流路で、幅1.8~2.7m、深さ0.5m。溝内埋土は灰色粗砂で、弥生時代中期の土器少量が出土した。

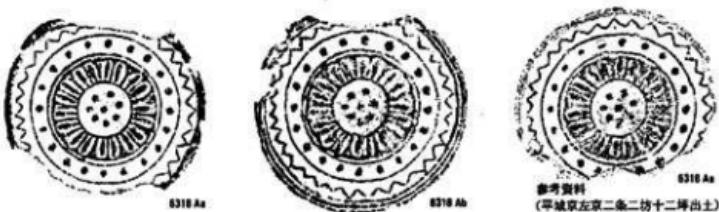
S D02 発掘区北端で検出した幅0.2~0.6m、深さ0.1mの東西方向の素掘り溝で、溝内からは三彩陶器片などが出土した。位置的に坪北辺を画す閉塞施設内側の雨落ち溝である可能性も考慮できるが、判然としない。

S A03 東西方向の掘立柱塀で3間分を検出したが、発掘区外東西に続く。柱間寸法は西から2.7-2.1-2.7m。重複関係からS B06よりも新しいことがわかる。

S A04 東西方向の掘立柱塀で3間分を検出したが、発掘区外東西に続く。柱間寸法は西から2.2-2.2-2.4m。重複関係からS B06よりも古いことがわかる。

S B05 衍行3間(6.6m)以上、渠行2間(3.6m)の掘立柱東西棟建物で、発掘区外東西に続く。衍行柱間は2.2m等間で、検出範囲内の西1間に仕切りの柱穴がある。重複関係からS A04・S B06よりも古いことがわかる。

S B06 南北5間(10.5m)の掘立柱列で、南北棟建



6318型式A種軒丸瓦（1／4）

物の西側柱列と考える。柱間は2.1m等間である。重複関係からS A03よりも古く、S A04・S B05よりは新しいことがわかる。

なお、上述S A03・04、S B05・06の方位は一様に、西でわずかに南に振れている。

S B07 発掘区南東隅で1柱穴を検出したが、建物の北西隅柱であると考えておく。

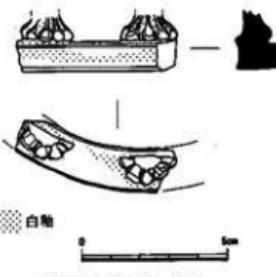
S K08 東西1.2m、南北1.2mの平面不整形の土塹で、深さ0.2m。埋土は灰褐色粗砂で、軒丸瓦（6318型式A種）2点が出土した。

III 出土遺物

6318型式A種軒丸瓦で複型に追刻が確認できた点と、遺物包含層から出土した唐白磁の円面鏡について報告しておく。

6318型式A種軒丸瓦 主文は間弁のない複弁9弁蓮華文で、中房に1+7の蓮子を置く。外区には内縁に珠文20と、外縁に線鋸齒文32がめぐる。外縁の鋸齒文数については、従来不明だったものが、今回の例でその欠落部分が補われ数が確定した。さらに、出土した2点のうち1点は複型に文様の影り加えがされている。すなわち、追刻前のAaは外縁頂部が無文で断面形状は丸味を帯びているが、Abは鋸齒文がめぐる斜縁の外側に新たに平坦面を設けて幅を広げ、その中央に明瞭な凸線一条を加える。面径にして約1cmの差が生じている。6318 Aは現在出土数の少ない瓦のひとつだが、出土地点は点々とあり、平城宮、法華寺、海龍王寺、左京二条2坊十二坪、左京三条2坊9坪などに同複品がみられるほか、京外北方の佐保山遺跡での出土も知られる。

唐白磁円面鏡 台部基底部の上に獸脚を配した唐白磁円面鏡の破片1点が遺物包含層から出土した。小破片のため全体を復元するまでは至らないが、基底部径は約15cm前後で、獸脚は全部で13脚に復元できる。胎土はきめ細かく乳白色を呈す。白釉は、基底部及び獸脚の裏側まで丁寧に塗られている。獸脚をもつ白磁円面鏡の類例として、東京国立博物館所蔵のものがあげられる。（中井 公、三好美穂）

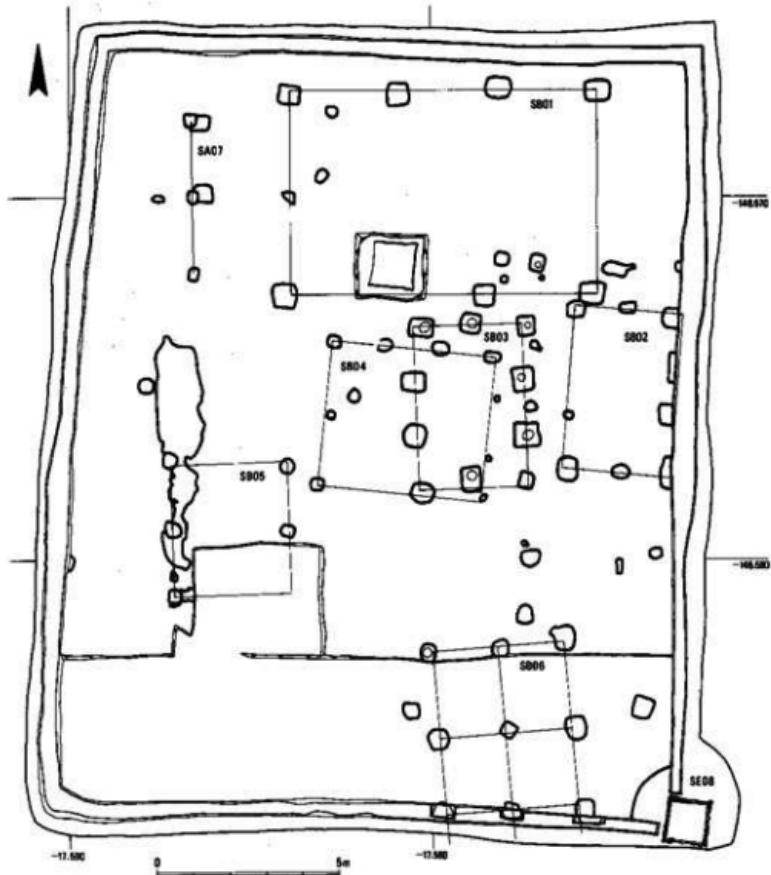


唐白磁円面鏡（1／4）

10. 平城京左京四条二坊十六坪の調査 第136次

本調査は、奈良市四条大路一丁目702-1、4、5番地において実施した豊田博氏届出のマンション建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は左京四条二坊十六坪の北辺で、田村第推定地の東北辺にあたる。調査は昭和62年8月3日から同年9月17日にかけて行なった。

発掘区の土層堆積をみると、1.6mに及ぶ造成盛土の下に旧耕作土、灰褐色砂土、淡茶灰



発掘区平面図 (1/160)

色砂土、灰色粗砂、黄灰色砂、灰褐色粘土、灰色粘土が厚さ0.1～0.2m程度ずつ堆積して淡青灰色粘土の地山に至る。遺構はこの地山上面で検出した。その標高は58.8m前後で、現地表面から約2.7mの深さがある。

検出した遺構は、掘立柱建物6棟、掘立柱列1条、井戸1基、土塁である。遺構の遺存状態は非常に悪く柱穴の深さも非常に浅い。発掘区中央北寄りのところには数10年程前に掘削された農業灌漑用の井戸が1基遺存していた。

S B01 桁行3間(8.4m)、梁行2間(5.6m)の東西棟建物。柱間は桁行、梁行ともに2.8mである。東南隅の柱穴の切り合い関係からS B02に先行して構築されたことがわかる。

S B02 桁行3間(4.5m)、梁行2間(3.0m)の南北棟建物。柱間は桁行、梁行ともに1.5m等間である。

S B03 桁行3間(4.5m)、梁行2間(3.0m)の南北棟建物。柱間は桁行、梁行ともに1.5m等間である。

S B04 桁行3間(4.5m)、梁行2間(4.0m)の東西棟建物。柱間は桁行が1.5m等間、梁行が2.0m等間である。

S B05 遺存はしていないが妻柱穴を想定して、桁行2間(3.6m)、梁行2間(3.2m)の南北棟建物と考えた。柱間は桁行が1.8m等間である。

S B06 南北2間(4.5m)以上、東西2間(3.6m)の総柱建物。柱間は桁行が北から2.4m、2.1m、梁行が1.8m等間である。

S A07 南北2間(4.2m)の掘立柱列。柱間は2.1m等間である。

S E08 横板組横棧留めの井戸で平面がほぼ正方形を呈す。内法は一辺が約112cmである。横棧は下から2段目までが遺存していた。検出面から深さ80cmまで掘削したが、危険なため完掘を断念し、横板がその下32cmで端部となることを確認するにとどまった。掘形は半径1.6mの円形もしくは隅丸方形を呈するものと思われる。奈良時代中頃を中心とする土器と軒丸瓦6282 Ba型式が出土した。

遺物はその多くが地山上面の灰色粘土層から出土している。内訳は、奈良時代の土器、瓦、鉄釘4点である。瓦には軒丸瓦6281 A型式1点、6275型式1点、新型式1点、軒平瓦6663H型式1点、型種不明2点が含まれる。新型式としたものは図に示したように、幾何学文を内区に配し、周縁に線鋸齒文をめぐらせる。通有の軒丸瓦に比べて小型である。同型式の軒丸瓦が発掘区北側の左京三条二坊十三坪内からも出土している。

註) 横原考古学研究所 『平城京左京三条二坊十三坪』 1975

(鎌方正樹)



幾何学文軒丸瓦
(1/4)

11. 平城京左京三条四坊五坪の調査 第142次

I はじめに

本調査は、奈良市大宮町三丁目180-4番地において、岩井俊治氏届出の店舗付共同住宅建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京三条四坊五坪の西辺北半部にあたり、敷地の西際には四・五坪を画す坪境小路の存在が予測された。このため条坊遺構の確認を目的に敷地西側に発掘区を設定することとし、昭和62年12月15日から12月26日までの12日間をかけて調査を実施した。発掘面積は、敷地497m²のうちの130m²である。

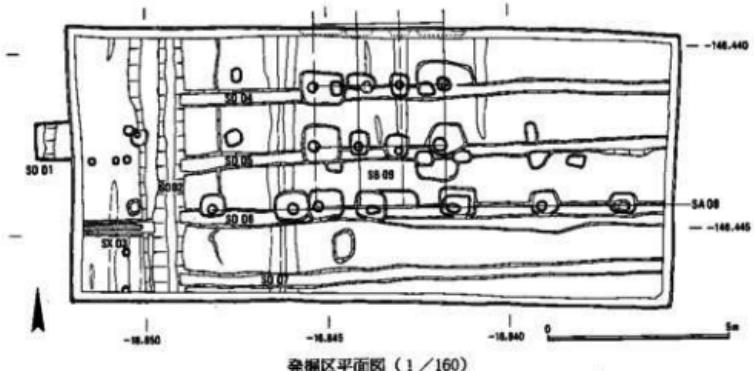
II 検出遺構

発掘区内の土層は、地表下0.2~0.4mまでが造成盛土、以下に旧耕土と床土の堆積が0.3mあり、ただちに黄灰色土の地山があらわれる。遺構を検出したのはこの地山上面で、標高は63.3~63.4mである。主な検出遺構は、四・五坪坪境小路東側溝のほか、素掘り溝4条、掘立柱塀1条、掘立柱建物1棟、木樋暗渠1などである。

S D01 発掘区西端で検出した南北方向の素掘り溝で、四・五坪を画す坪境小路の東側溝に相当する。西岸が未検出のため全幅は不明だが、東岸から幅0.5m、深さ0.2mまでを確認している。溝内埋土は灰褐色粘土で、瓦片・土器片少量が出土した。

S D02 東側溝S D01の東側でこれに平行する南北方向の素掘り溝。両溝の間には後述の木樋暗渠S X03が存在するので、この間に築地塀を想定し、これの東雨落溝と考える。幅0.7~0.9m、深さ0.2~0.3mで、溝内には灰褐色砂土が堆積し、少量の瓦片・土器片が出土。

S X03 上述のS D01とS D02との両溝を東西方向につなぐ木樋。幅0.4m、深さ0.2mの



箱掘り掘形内に、丸太材一本削貫のものをほぼ水平に据えている。西端が未検出で全長は不明だが、長さ1.9mまでを確認、内法幅は15cmで、高さ7cmまでが残存した。底面には蓋材の一部が落ち込んでおり、暗渠構造であったことがわかる。

ところで、木橋暗渠の存在によって、これの上部には築地塀を想定することが可能である。もとより盛土本体を検出したわけではないが、両溝間に点々と存在する小柱穴は添柱痕である公算が大きかろう。なお、東側溝S D01東岸からS D02西岸までの間隔は2.9m内外である。

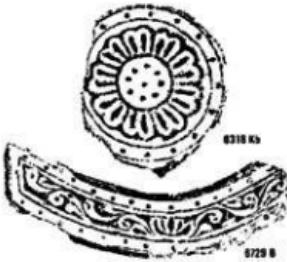
S D04・05・06・07 いずれも幅0.4~0.5m、深さ0.2~0.3mの箱掘り掘形をもつ東西方向の素掘り溝で、発掘区内では、心々では1.7mずつの間隔をおいて平行する4条を検出した。すべては西端で南北溝S D02と接続しており、掘削の前後関係は判からぬものの、ともにこれと同時期に埋立てられたとみられ、併存したと理解し得る。埋土は灰褐色砂土で、瓦片少量が出土したにすぎない（S D07からは軒丸瓦6316 Kb が出土）。溝自体の形状と配置とにおいて注意せられるが、いかなる性格のものかは不明である。

S A08 S D02東岸から東にのびる掘立柱塀で、5間分を検出し、さらに発掘区外東へ続く。柱間寸法は2.2m等間である。東端柱穴の柱抜取り穴から軒丸瓦6316 Kb が出土した。重複関係からS D06よりも古く、S B09よりも新しいことがわかる。

S B09 衍行3間（5.1m）以上、梁行3間（3.6m）の総柱の南北棟建物。あるいは3×3間規模で完結する建物かも知れないが、外周の柱穴が大きく、内部の柱穴が小さく掘られた特徴を考慮して、さらに発掘区外北に続くと考えておく。柱間寸法は衍行2.7m等間、梁行1.2m等間である。東側柱の1柱穴に礎板が残存した。重複関係からS D04・05・06およびS A08よりも古いことがわかる。

III 出土遺物

わずかな量の瓦片、土師器、須恵器片があるだけだが、なかに新型式の軒平瓦（6729B）1点が含まれる。これは外区に珠文がめぐる4回反転の均整唐草文瓦であるが、特異なことに内区主文のみが陰刻で表現されている。すなわち、
範型でみると、文様部分を残してその周囲を彫り落
めてある。類は緩やかな曲線類で、凹凸両面ともケ
ズリとナデとで丁寧に仕上げている。同巧の文様表
現法を探るものとしては唯一軒平瓦6710Dが知られ、
これには軒丸瓦6316Mとの組合せが想定されている。
今回の調査ではこの新型式軒平瓦（6729B）の
ほかに軒丸瓦6316 Kb が2点出土しており、前述の
組合せとの類似性が注意される。（中井 公）



出土軒瓦（1／5）

12. 平城京左京六条一坊十四坪の調査 第135次

本調査は、奈良市柏木町418-1番地において実施した谷口和代氏届出の店舗新築に伴う事前の発掘調査である。平城京の条坊復元では左京六条一坊十四坪のほぼ中央に推定される。調査は建物予定地に東西20m、南北14mの発掘区を設定して行なったが、調査地は既に宅地造成されていたため、実際に遺構検出ができたのは72㎡であった。調査の期間は、昭和62年7月22日から8月6日までである。

発掘区の土層は、地表から2.2mまで宅地造成時の客土（黄灰色砂土）である。その下層は黒灰色土の旧耕土、灰褐色砂質土となり、地表下2.7mで暗茶褐色粘質土の地山に達する。遺構はこの上面で検出した。遺構面の標高は概ね55.0mである。

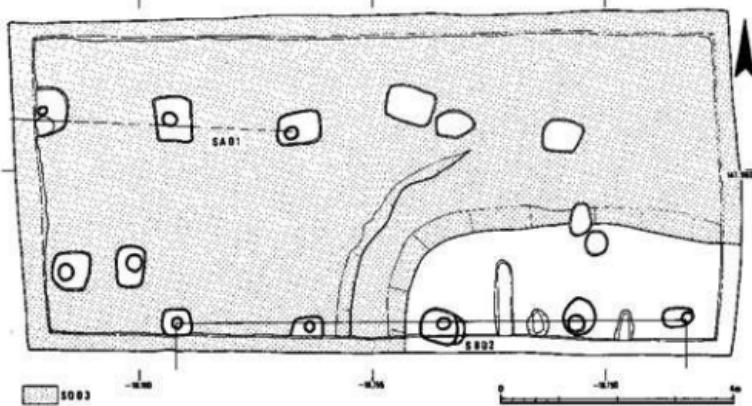
検出した遺構には、掘立柱列1条、掘立柱建物1棟、自然流路1条がある。

S A01 発掘区の北辺で検出した東西2間以上の柱列である。発掘区の北へ延びる建物の可能性もある。柱間寸法は2.1m等間である。主軸は、国土方眼方位で西に対して北へやや振れている。

S B02 発掘区の南辺で検出した東西4間の柱列である。柱間寸法は西から3間分が2.3m等間で、のこり1間分が1.8mである。南北棟建物の北側柱列と考えられよう。主軸は、国土方眼方位と一致している。

S D03 発掘区のほぼ全域を流れる自然流路と考えられる。埋土は黄灰色粘質土で中世の土師器皿片、瓦器片などが出土した。この流路は中世にこの地を流れた洪水の氾濫原である可能性が考えられよう。

(篠原豊一)



発掘区平面図 (1/100)

13. 平城京左京三条一坊二坪の調査 第143次

本調査は、奈良市二条大路南二丁目215-1番地他において実施した市道西田明田線道路改良工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京左京三条一坊二坪の西辺中央に想定され、朱雀大路に面した位置にある。道路予定地内に南北4m、東西15mの発掘区を設定した。調査期間は昭和63年1月5日から1月13日までである。

発掘区の土層は、上層から黒灰色土の耕土、黄褐色砂土、黄灰色砂質土、黄褐色砂質土、黄灰色土、淡黄褐色土となり、地表下0.4mで茶褐色粘土の地山に達する。地山面の標高は概ね63.6mである。遺構は淡黄褐色土と地山の上面で検出した。検出した遺構には古墳時代の土塙2、奈良時代の土塙1、柱穴1、礎石据付痕跡2がある。

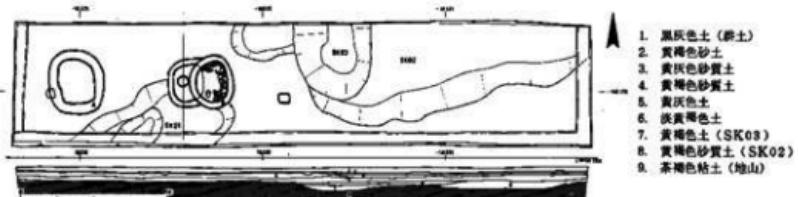
古墳時代の遺構 S K01・02は地山面で検出した深さ0.1~0.15mの浅い土塙で6世紀前半の須恵器杯片などが出土した。市教委が行った史跡朱雀大路の調査の際にも6世紀前半の掘立柱建物が検出されており、この遺跡の範囲がここまで及んでいたことがわかる。

奈良時代の遺構 S K03は地山面で検出した梢円形の土塙である。埋土は黄褐色土で、奈良時代の遺物が若干出土した。柱穴は地山面で検出した。これに対応する柱穴は検出されなかったが、南北に延びる柱列の可能性がある。柱穴は一辺0.8mの隅丸方形で、その中央には径0.3mの柱痕跡がある。礎石据付痕跡は淡黄褐色土上面で検出した浅い梢円形の土塙である。Aの埋土からは平瓦が少量出土し、Bの埋土からは平瓦片と共に、10~20cm大的自然石が敷つめたように出土した。この石は礎石の根石とも考えられることから、共に礎石据付け痕跡の可能性がある。土塙の東西心心距離は3.6mである。大きさはAが東西1.0m、南北1.2m、Bが東西0.9m、南北1.1mで深さは共に0.2mである。

今回の調査は、発掘面積が狭いために建物規模などは明らかにできなかったが、良好に遺構が存在していることがわかった。

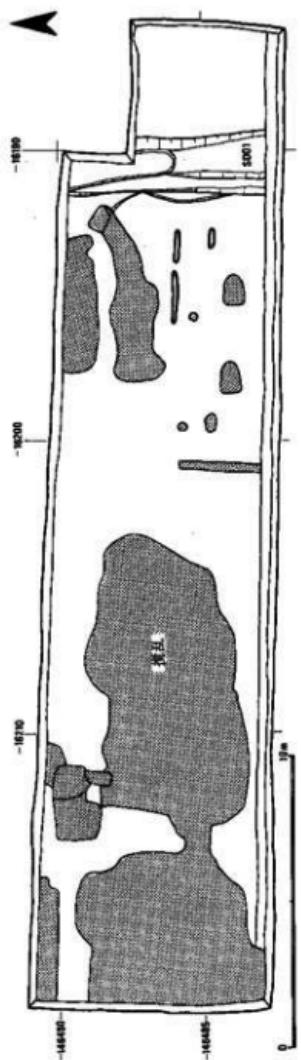
(篠原豊一)

注) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和61年度



発掘区平面図・北壁土層図 (1/150)

14. 平城京左京三条五坊五坪の調査 第125次



遺構平面図 (1/200)

本調査は、奈良市大宮町一丁目26-1番地において実施した、商業ビル建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元図によると、平城京左京三条五坊五坪に相当する。調査地の東側には五・十二坪の坪境小路が想定されているため、東西34m、南北8m（面積260m²）の東西に長い発掘区を設定した。調査期間は、昭和62年4月10日～同年4月22日までである。

発掘区内の堆積土層状態は、盛土、耕土、床土、灰茶色土とつづき、標高66.3m付近で奈良時代の土器を包含する茶灰色粗砂となる。遺構はこの上面で検出した。なお、茶灰色粗砂の下には黒色粘土、青灰色粘土がつづく。黒色粘土層（厚さ0.2m）には弥生時代後期の土器を包含している。

遺構は後世の擾乱が多く、かつ遺構面が粗砂層上面であるため流失したのか、残存状態はよくない。検出した遺構は南北溝 S D01である。

S D01 発掘区東辺で検出した南北溝。幅約2.0m、検出面からの深さ約0.3m。埋土は灰色土（上層）と灰色粗砂（下層）とに分かれ。下層からは奈良時代の須恵器横瓶が出土した。溝心の国土地標値はX = -146,483.257m、Y = -16,190.224mである。

S D01心は、朱雀門心から東へ2396.096mの位置にあり、これを条坊方位の振れ 0° 15' 41" で修正すると2393.835mとなる。朱雀門心から五・十二坪の東側溝までの造営計画尺8110尺をこの東西距離で除すと0.29517mとなり、従来の成果から考えてS D01は東側溝とみることができる。しかし、調査地内で検出されるはずの西側溝を検出できなかったことにより速断は避けたいと考える。（森下浩行）

15. 平城京左京五条四坊十四坪の調査 第131次

I はじめに

本調査は、奈良市大安寺町782-6番地において実施した安本重一氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元によると、左京五条四坊十四坪の南東部に相当し、東四坊大路西側溝の存在が予想される位置にある。調査は、東四坊大路西側溝の検出を目的として、まず調査地の北端に東西10m、南北4m（面積40m²）の北発掘区を設定し行なった。調査の結果、東四坊大路（S F01）、及び同西側溝（S D02）を検出した。さらに、S F01とS D02の追認を目的として調査地南端に東西7m、南北3mの南発掘区を設定した。調査は、昭和62年7月2日から同年7月9日まで行なった。

II 検出遺構

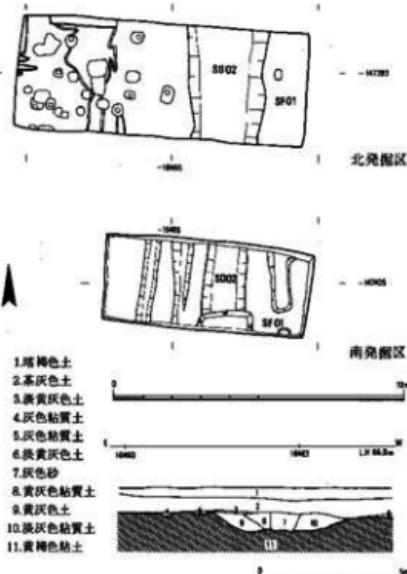
堆積土層 北発掘区内の土層は耕土・床土の下、茶灰色土、土師器片を包含した淡黄灰色土が0.2~0.3mの厚さで堆積し地表から0.4~0.5mで黄褐色土の地山に至る。南発掘区内の土層は、基本的に北発掘区と同じで耕土・床土の下、茶灰色が0.2m堆積し、耕土から0.3mで黄褐色土の地山に至る。遺構は地山上面で検出した。検出遺構には道路、素掘り溝、柱穴、土塁がある。

S F01 発掘区東端で検出した南北道路。東四坊大路に相当する。検出範囲がわずかで路面の状況は不明。

S D02 発掘区中央部で検出した南北溝。東四坊大路西側溝に相当する。検出面における東西幅は、北発掘区で2.2~2.8m、南発掘区で1.4~1.6m、深さは北発掘区で0.3m、南発掘区で0.7mを測る。溝内には茶灰色土及び淡黄色土が堆積する。奈良時代の土器類が少量出土。

（三好美穂）

| | X 座標 | Y 座標 |
|--------|---------------|--------------|
| S D01心 | - 147,393.000 | - 16,462.250 |
| S D02心 | - 147,405.000 | - 16,482.250 |



発掘区平面図（1/200）・北発掘区南壁土層図（1/100）

16. 平城京左京四条二坊々間路の調査・第133次

本調査は、奈良市四条大路一丁目736-4において実施した杉田正雄氏届出の住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、左京四条二坊内で東二坊坊間路と九・十坪の坪境小路との交差点部分にある。調査は昭和62年7月13日から7月24日にかけて実施した。

発掘区の土層堆積は、暗灰色粘土の水田耕作土の下に黄灰色土があり、その下が茶褐色

粘土の地山で造構面となっている。耕作土から造構面までの深さは約0.4mで、標高は58.3mである。

検出した造構は、東二坊坊間路とその両側溝、坪境小路の北側溝、掘立柱列1条、暗渠1条等である。

S D01 九・十坪の坪境小路北側溝。溝幅が2.1m、深さが0.3mである。溝北壁にそって0.6~0.4m間隔に並ぶ杭列を検出した。杭列は発掘区外東へと続いている。溝の護岸を目的としたものと思われる。

S D02 東二坊坊間路の東側溝。北側で幅2.16m、深さ0.3m、南側で幅1.4m、深さ0.4mをはかる。

S D03 東二坊坊間路の西側溝。東側部分のみ検出した。深さは約0.3mである。

S F04 東二坊坊間路にあたる。路肩間の幅は北で7m、南で8.8mである。

S A05 南北方向の掘立柱列で、S D02内西肩部にそって構築されている。柱間は北から2.1m-1.8mである。

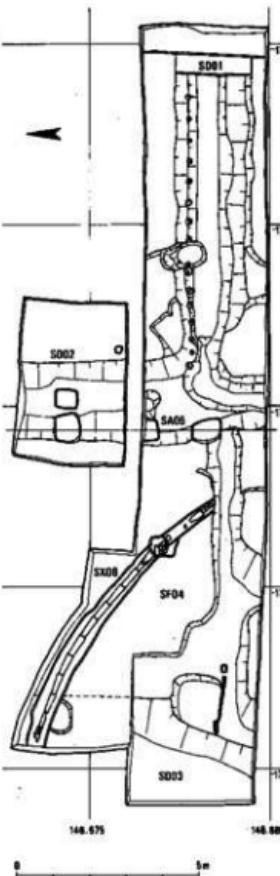
S X06 瓦製土管をつないだ暗渠である。掘形は幅0.6~0.5m。土管の長さは67cmで、広端部の外径16cm、内径13cm、狭端部の外径10.5cm、内径8cmをはかる。溝底は西に向かって若干下がっている。S D03の埋土を切り込んで構築されていた。

出土遺物は、軒丸瓦6282D型式1点、軒平瓦6663J型式1点を含む奈良時代を中心としたものである。

S D01心 X = -146,678.420 Y = -17,771.000

S D02心 X = -146,675.000 Y = -17,779.850

(鏡方正樹)



発掘区平面図 (1 / 160)

17. 平城京左京六条一坊十・

十五坪坪境小路の調査 第139次

本調査は、奈良市柏木町字カイタヲリ484-1、485-1、486-1において実施した、加納ケイ氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の遺存地割に推定されている水田にあたり、その検出を目的として調査を行なった。調査期間は昭和62年11月9日から同年11月18日である。

発掘区内の土層堆積状態は、耕土、床土の下に灰色砂質土、紫灰色砂質土（もしくはこの層を侵食した黄灰色砂）があり、その下が黄灰色粘土の地山となる。遺構はこの地山上面で検出した。現地表面から地山上面までの深さは約0.4mで、その標高は56.0m前後である。以下に検出した遺構の概要を記す。

S F01 左京六条一坊の十坪と十五坪とを画す坪境小路である。路幅は両側溝の心々で約6.5mをはかる。

S D02 小路の西側溝にあたる。溝幅は1.3m前後、深さは北側で0.65m、南側で0.44m

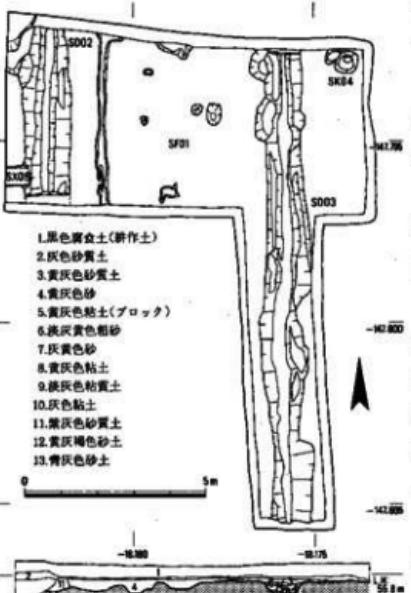
をはかり、北側の方へ向かって深くなっている。

S D03 小路の東側溝にあたる。溝幅は1~1.2m、深さは南北ともに約0.35mをはかり、ほぼ水平となっている。

S K04 発掘区北東隅で検出した土塙。庄内式の壘が1個体横転した状態で出土した。

S X05 発掘区南西隅で検出した幅0.5m、深さ0.2mの断面矩形の溝。地山上面から構築されており、S D02に向かって東へ下降している。十坪内から西側溝へ排水するための暗渠ではなかったかと思われる。

最後に、今回検出した坪境小路の両側溝心座標値を示す。（鐘方正樹）



発掘区平面図、北壁土層図 (1/160)

| | | |
|--------|------------------|-----------------|
| S F01心 | X = -147,795.000 | Y = -18,179.110 |
| S D02心 | X = -147,795.000 | Y = -18,182.350 |
| S D03心 | X = -147,795.000 | Y = -18,175.880 |

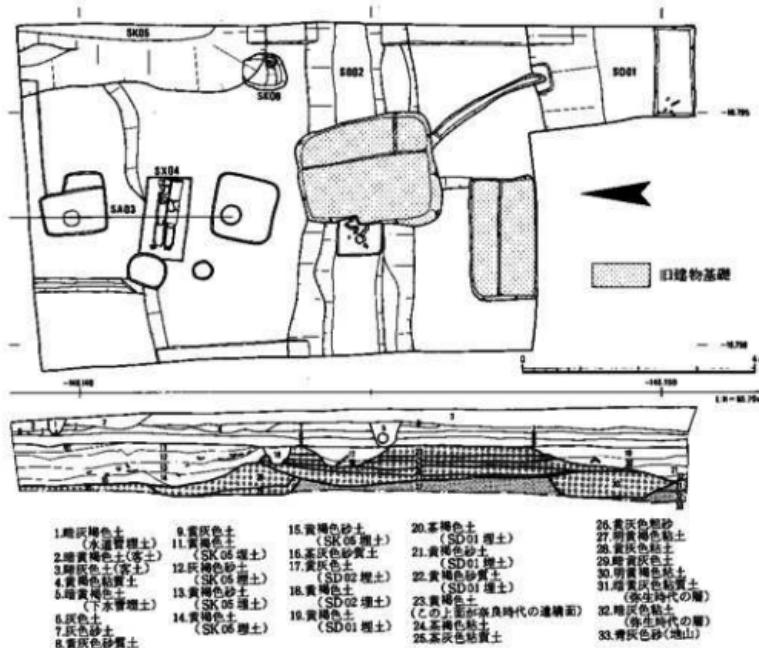
18. 平城京右京三条一坊八坪の調査 第146次

I はじめに

本調査は、奈良市二条大路南四丁目281-30番地他において実施した㈱朱雀化学工業代表取締役島岡健氏届出の工場新築に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城宮跡の若犬養門の南面にあたり、西一坊間大路と右京三条一坊七・八坪の坪境小路が交差する位置に想定される。発掘調査は建築工事と並行して行なったために、調査の面積及び期間に制約を受けた。調査は南北小路北側溝の検出を目的とした発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和63年2月15日から同月26日までである。

II 検出遺構

発掘調査の結果、弥生時代から奈良時代の遺構を検出した。発掘区土層は上層から暗灰色土の客土、灰色土の耕土、灰色砂土、黄灰色砂質土、黄灰色土となり、地表下0.6mで黄褐色土の奈良時代遺構面に達する。遺構面の一部は茶褐色土によって整地されている。遺



発掘区平面図・東壁土層図 (1/100)

構面の標高は概ね64.7mである。この下層は0.4~0.6mの厚さで茶褐色粘質土、茶灰色粘質土、黄灰色粗砂、明黄褐色粘土が複雑に堆積し、地表下1.3mで弥生時代遺物包含層の暗黄灰色粘質土、暗灰色粘土となり、地表下1.6mで青灰色砂の地山に至る。

奈良時代以前の遺構 下層の遺構については調査日程の関係で東壁と攪乱部分に試掘溝をいれ、断面観察を行なった。調査の結果、発掘区全域で時期の違う自然流路の堆積を確認した。この堆積層は大きく二層に分れる。下層は暗黄灰色粘質土、暗灰色粘土で、弥生時代後期の土器が出土した。上層は黄灰色の砂と粘土が複雑に堆積する層で、古墳時代の須恵器が出土した。このことからみて弥生時代後期から古墳時代にかけて発掘区内を何条かの自然流路が流れていることがわかった。

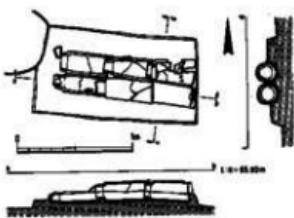
奈良時代の遺構 溝2条、柱列1条、土塁2などがある。

S D01 発掘区南端にある東西の素掘り溝で、南岸は発掘区外である。埋土は上層から黄褐色土、茶褐色土、黄褐色砂土、黄褐色砂質土で茶褐色砂土からは多量の瓦片が出土した。大きさは幅3.1m以上、深さ0.7mある。この溝は東西小路北側溝と考えられる。

S D02 発掘区中央で検出した素掘り溝で、中央部は近代の攪乱によって破壊されている。埋土は上層から黄灰色土、黄褐色土で黄灰色土からは少量の瓦片が出土した。大きさは幅1.5m、深さ0.4mある。溝はS D01と並行する位置にあり、この溝を雨落ち溝と考えるとS D01間に築堤跡を想定できる。推定築堤幅は2m前後となる。

S A03 発掘区中央で検出した1間以上の南北柱列である。柱間寸法は2.8mある。発掘区外へ延びる建物とも考えられるがその規模は不明である。柱穴の大きさは一辺0.8~1.1m、深さ0.4~0.5mあり、径0.3mの柱痕跡がある。主軸は国土方眼方位とはほぼ一致する。

S X04 S A03の柱穴間で検出した東西方向の瓦列。二枚の丸瓦を上下に合わせ土膏状にしたものを作り組合せ、二列に並べる。玉縁部を西にして据え、底は西へ向かって低くなる。奈良時代整地層の茶褐色土上面で検出したが、これを据えるための掘形はなく、瓦列は整地土内に埋まっていた。暗渠とも考えたが導水路、排水路は検出されなかった。大きさは東西1.2m、南北0.33m、内径0.12mある。



S X 04 平面図 (1 / 50)

S K05 発掘区北東隅で検出した土塁で発掘区外へ広がる。埋土は上層から黄褐色土、灰褐色砂土、茶褐色土、黄灰色砂土、黄褐色土、黄褐色砂土で、茶褐色土、黄灰色砂土から多量の瓦片が出土した。大きさは東西1.3m以上、南北4.4m以上、深さ0.7mある。

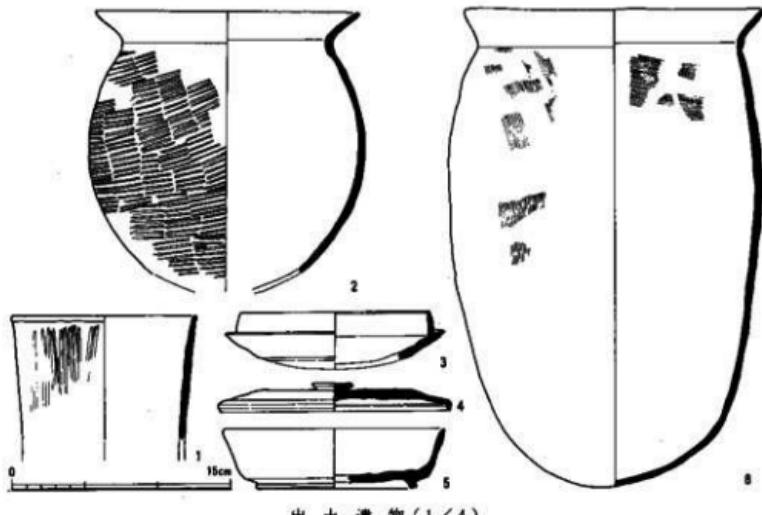
S K06 S K05の南辺で検出した浅い円形の土塁である。掘形東辺に土師器壺Cを据える。重複関係からS K05より古いことがわかる。

II 出土遺物

出土遺物には、弥生土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器などがある。弥生土器は下層の黄灰色粘土、暗灰色粘土から出土したものでほとんどが細片である。1は頸部と口縁部が残る長頸壺で、口縁部から頸部外面にかけて縱方向のミガキを密に施す。2は体部がやや胴長の壺で、体部外面上半は斜めタタキ、下部は平行タタキを施す。これらは畿内第五様式の様相を呈する。3は6世紀中頃の須恵器杯身である。自然流路上層出土。奈良時代の遺物のほとんどは瓦類で土器類は少量である。瓦類には軒丸瓦1点、軒平瓦6点、丸瓦、平瓦などがある。軒丸瓦は破片で型式は不明である。軒平瓦は型式不明1点を除き2型式3種に分類できる。SK05から6685E型式2点、SD01から6710A型式1点、包含層から6710B型式1点、6685E型式1点が出土した。土器類には土師器皿・杯・高杯・壺(6)、須恵器杯A・杯B(5)・杯蓋(4)・壺などがあり、ほとんどが整地層の茶褐色土から出土した。6は丸底で胴長の体部をもつ壺Cで、体部外面上に縱方向のはけ調整を施す。色調は黄褐色で胎土中に白色砂粒を含む。SK06出土。

IVまとめ

今回検出したSD01・02の平城京内の位置関係について考察してみることにする。この小路の延長上の数ヶ所で道路及び側溝が検出されており、この資料をもとに調査地での小路側溝の位置を求めてくるとSD01が北側溝に相当する。SD02はSD01と並行する溝でやや浅く、SD01間に築地塀を想定すると雨落ち溝と考えられる。
(藤原豊一)



出土遺物(1/4)

19. 平城京左京三条一坊七・八坪の調査 第132次

本調査は、奈良市二条大路南二丁目217-1番地他において実施した吉川文男氏届出の住宅建設に伴う事前の発掘調査である。条坊復元では、調査地中央は平城京左京三条一坊七・八坪の坪境小路に、東辺は東一坊坊間路西側溝に想定される。建物予定地に、南北2カ所の発掘区を設定した。調査は建設工事と並行して行なったため調査面積に制約をうけた。調査期間は、昭和62年7月6日から8月1日までである。

南発掘区 小路北側溝推定地に13m²の発掘区を設定した。土層は地表から耕土、黄灰色土、黄灰色砂、茶褐色土となり、地表下0.7mで黄灰色粘質土の地山に達する。遺構面の標高は概ね62.7mである。SK01は発掘区の北東隅で検出した土塗である。埋土は茶褐色土で、奈良時代の須恵器鉢Bなどが出土地した。SK02は発掘区西辺で検出した円形の土塗で、径1.4m、深さ0.8mある。埋土から近世の陶磁器片、木製品などが出土した。

北発掘区 坊間路西側溝推定地に6m²の発掘区を設定した。土層は地表下0.3mまでは造成土、その下0.6mまでは厚さ5cm程の固くしまった砂層が何層も重なり、地表下0.7mで茶灰色粘土に達する。この固い層は旧建物の土間の地形であろう。遺構面の標高は概ね62.9mである。幅1mの東西素掘り溝1条と柱穴を検出したのみである。 (篠原豊一)

20. 平城京左京一条四坊四坪の調査 第140次

本調査は、奈良市法蓮町559-1番地において、井田藤治郎氏届出の店舗付共同住宅建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京一条四坊四坪の南東部にあたり、南接して一条大路が、東接して四・五坪坪境小路が想定されている。調査期間は昭和62年11月24日から12月1日までの8日間で、995m²の敷地に東西・南北2本の発掘区(計150m²)を設定した。

発掘区内の土層は、耕作土と床土(0.4m)の下、灰色系の粘土の堆積3層(0.7m)、黄灰色砂土(0.2m)、灰白色粘土(0.1m)と続き、地表下1.4mで灰褐色粘土の地山に達する。地山上面の標高は64.6m前後で、遺構検出を試みたのはこの面においてであるが、調査地東半には自然流路内の堆積とみられる灰色砂が全面に広がり、これの上面には何ら遺構がなく、一方西半では後世の土取り穴掘削のために奈良時代の遺構は既に失われていると判断された。両者の重複関係から、流路は土取り穴掘削時までには埋没していたことがわかるが、湧水著しく十分な掘り下げを行ない得なかったために、双方の年代を決するまでには至らなかった。

(中井 公)

21. 平城京東四坊大路の調査 第145次

本調査は奈良市北之庄町18-4において実施した、桐山忠凱氏届出の個人住宅建築に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の東南隅にあたり東四坊大路に関する遺構の存在が想定され、越田池にも比定されている地点である。調査は南北5m、東西10m（面積50m²）の発掘区を設けて行なった。調査期間は昭和63年1月11日～同年1月20日である。

土層堆積状態は、耕土下、約0.6mで黒色粘土の遺構面に達し、その上に、灰色粘土、灰色砂の遺物包含層が堆積している。包含層からは古墳時代と考えられる須恵器甕、土師器小片が出土したが、いずれも微量である。検出した遺構は土塙1基のみである。不整円形の土塙で、大きさは径約3.3m、深さ0.5mをはかる。埋土は3層に分かれる。出土遺物は皆無であったが、上層の包含層出土の土器から古墳時代以前の遺構と考えられる。

平城京の条坊遺構、および越田池に関する遺構は検出できなかったが、古墳時代以前の遺構が確認できた。付近の調査でも古墳時代の遺構が確認されており、また弥生土器も採集されているため、それらの時代の遺跡が存在するのであろうが、調査範囲が限られているため、遺跡の内容については今後の調査に期待したい。
（森下浩行）

22. 平城京右京一条北辺二坊六坪の調査 第147次

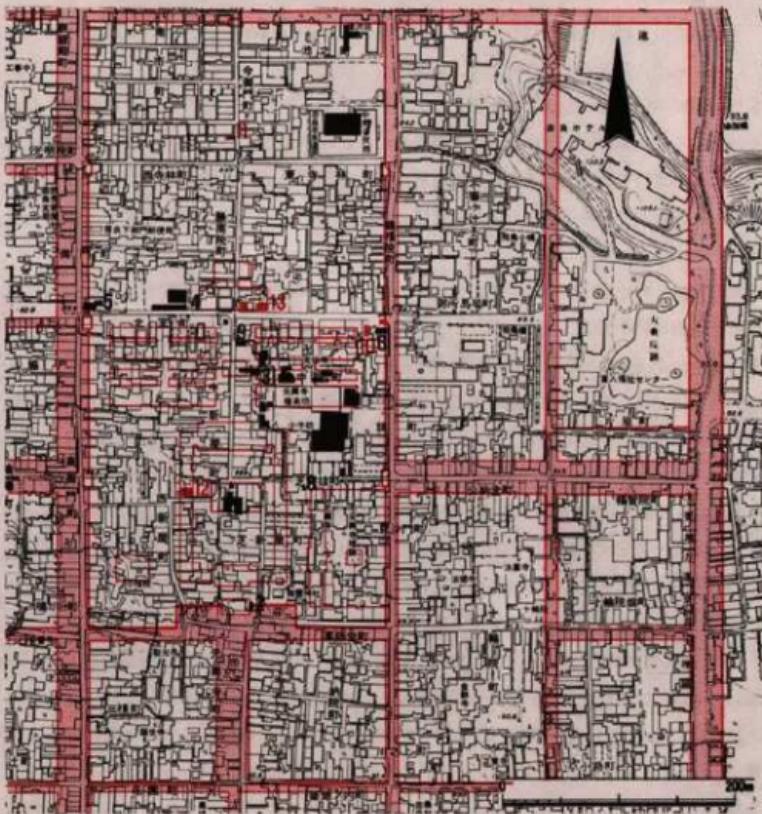
この調査は竹村忠富氏届出の住宅新築工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は奈良市西大寺東町一丁目25番地、平城京の条坊では右京一条北辺二坊六坪に相当すると思われ、かつ一条北大路にかかる可能性があった。調査期間は昭和63年2月22日から同年2月26日まで、発掘面積は約40m²である。

当該地はこれまで駐車場として利用されていたので、調査はアスファルトと造成土の除去から始めた。造成土は約1.1mの厚さがある。以下、1.06mにわたって黒色粘土（旧耕土）、暗灰色粘土、暗灰色砂質土と続き、この地が長らく湿地あるいは湿田であったことがわかる。さらに下層には灰白色砂まじりの緑灰色粘土、灰白色砂、緑灰色粘土、暗灰色砂が0.54m以上続く。これらの土層中には若干の奈良時代瓦片が含まれており、奈良時代以降一時流路となっていたことが窺える。流路中の堆積土は全体に西に厚く堆積しており、流路の中心は調査地のさらに西になろう。出土遺物には、瓦片の他に暗灰色粘土層から出土した墨痕のある小木片がある。形態から木簡片かと思われるが、小片であるため文字の判読是不可能で、時期など詳細も不明である。以上のように現地表面下約2.7mまで掘り下げたが、奈良時代の遺構は検出できず、旧流路を確認したにとどまった。
（西崎卓哉）

III. 寺院の調査

1. 元興寺旧境内の調査 第10～13次

今年度、元興寺旧境内では4件の発掘調査を実施した。第10次調査は奈良市中院町3-1番地他で行なった野田義蒿氏届出の個人住宅建設に伴う発掘調査で、僧房の東室北小子坊推定地にあたる。第11次調査は奈良市今御門町29番地で行なった児玉秀夫氏届出の店舗付住宅建設に伴う発掘調査で、旧境内北方にあたる。第12次調査は奈良市西新屋町19-1番地他で行なった島悟氏届出の個人住宅建設に伴う発掘調査で、西廻廊推定地にあたる。第13次調査は都市計画街路工事に伴う発掘調査で食堂推定地及び東面築地廻推定地にあたる。



発掘区位置図（数字は次数番号を表わす）

第13次の調査 一食堂及び東面築地壠推定地の調査一

I はじめに

本調査は、奈良市中院町及び鶴町内において実施した都市計画街路杉ヶ町高畠線工事に伴う事前の発掘調査である。この調査は昭和55年度から継続して行なわれており、今回は食堂推定地の南辺二ヶ所と東面築地壠推定地の中央一ヶ所に発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和62年11月9日から12月10日までである。

II 食堂推定地の調査

食堂推定地の南辺2ヶ所に東・西発掘区を設定して行なった。

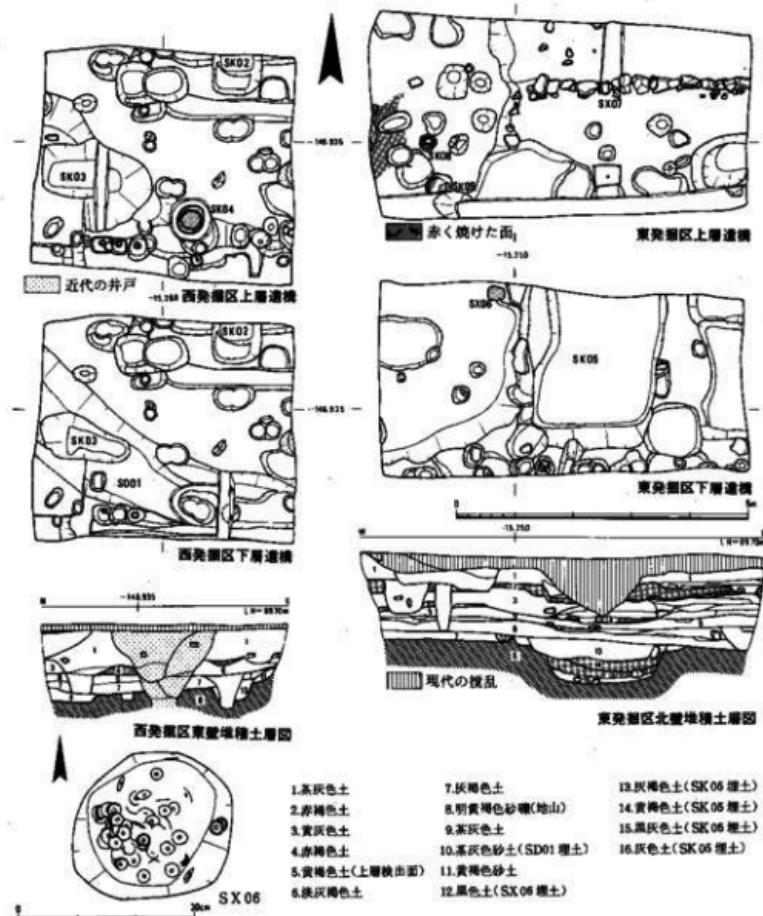
A 検出遺構

発掘区内の土層は複雑に乱れているため、その基本的な層序を述べる。地表から茶灰色土、赤褐色土、黄灰色土、赤褐色土、黄褐色土、淡灰褐色土、灰褐色土となり地表下1.2m前後で明黄褐色砂礫の地山に達する。このうちの赤褐色土は火災による炭火物混じりの焼土層である。火災の度ごとに客土され整地したことがうかがえる。地山上層の灰褐色土は14世紀代の遺物包含層で、これらの堆積層はこの時期以降のものである。地山面は北側へ緩やかに傾斜しており、地山面の標高は概ね88.1~88.7mである。遺構は主に淡灰褐色土上面と地山上面で検出した。

西発掘区 食堂推定地南辺中央に東西4.6m、南北3.8mの発掘区を設定して行なった。検出した遺構には小柱穴、土塙、溝などがある。遺構は淡灰褐色土上面では少なく、その大部分は地山上面で検出した。この発掘区で検出された遺構は14世紀以降のものである。S D01は南辺で検出した素掘り溝である。埋土から少量の土器片が出土した。S K02は発掘区北辺で検出した土塙である。埋土から14世紀前半の土器が出土した。S K03はS D01と同位置で検出した土塙である。平面形は梢円形で、埋土から15世紀の土器が出土した。S K04は径0.5mの土塙内に瓦器大甕を据えるものである。発掘区南辺及び東辺には径0.3m前後の小柱穴が複雑に重複しており、これらの中にはほぼ等間隔に並ぶものもある。このことから南面の道路に沿って建物あるいは柵があったと考えられるが、調査面積が狭いためその規模などについては明らかにできなかった。

東発掘区 食堂推定地の南東隅に東西6.5m、南北3.5mの発掘区を設定して行なった。検出した遺構には小柱穴、土塙、備蓄罐遺構などがある。発掘区の基本的な土層は西発掘区とほぼ同じであるが、淡灰褐色土上面の遺構が良く残存していた。S K05は発掘区中央で検出した土塙である。平面形は南北に長い長方形で深さ0.8mある。埋土は上層が灰褐色土、下層が黄褐色土・黒灰色土、灰色土である。下層の埋土は焼土、炭化物混じりで多量の自然石が埋められていた。火災の廃棄物を捨てた穴であろう。埋土から15世紀初頭の土器が

出土した。発掘区南辺で径0.3m大の小柱穴を重複して検出した。西発掘区と同じように東西に並ぶ。これらの柱穴から道路に面して建物があったと考えられる。S X06は灰褐色土上面で検出した径0.25mの土塙で、掘形内から多量の銅錢が出土した。土塙底部に布の痕跡が見られることから布製の袋に入れて埋めたものであろう。造構は奈良国立文化財研究所の協力を得て取上げ保存した。現在、保存処理中のため錢の総数は不明であるが、発掘調査で83枚を確認した。S X07は淡灰褐色土上面で検出した東西方向の石列で、石の面を



食堂推定地発掘区平面図・堆積土層図 (1/100)、S X06平面図 (1/10)

北に掘えて二段積みしたものである。SK08・09は径0.2~0.3m、深さ0.1mの半球状の小土塗である。埋土は炭化物混じりの黒灰色土で、堀形内面は赤く焼け固くしまっている。この土塗は赤褐色土(下層)の下にある黄褐色土上面で検出した。この層は踏み固められたためか堅くしまり、検出面の一部には赤く焼けた所もみられる。赤褐色土からは鉄滓片、銅滓片、ふいごの羽口などが出土していることから、SK08・09は鍛冶か鑄物に関連した遺構と考えられよう。

B 出土遺物

出土遺物には軒瓦、平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、鉄釘、鉄滓、銅滓、ふいごの羽口、銅錢などがある。奈良時代の遺物は少量ではほとんどが14世紀以降の土器類である。遺物量が多く大部分が未整理のため概要のみを簡単に記す。

西発掘区 遺物は概ね14世紀前半以降の土器である。南辺のSK02から14世紀前半の瓦器碗、土師器皿が出土した。これ以外の遺構からは14・15世紀の土師器皿・釜、須恵器鉢、瓦器大甕・鉢・擂鉢、陶磁器などが出土した。

東発掘区 遺物のほとんどは瓦器碗・皿を含まない14世紀後半以降の土器で、15世紀のものが大半を占める。遺物には土師器皿・釜、須恵器鉢、瓦器大甕・鉢・擂鉢、輸入陶磁器、国産陶磁器、鉄釘、鉄滓、銅滓、ふいごの羽口、銅錢などがあるが未整理のため、SX06出土銅錢について述べる。遺構を保存処理したため銅錢総数は不明であるが、取り上げた銅錢29枚は下記の表の通りである。全て輸入銭である。銅錢の上限が開元通寶で下限が永樂通寶であることから15世紀後半以降に埋められたことがわかる。この中には私鑄銭などの悪銭は含まれていないことからみて備蓄に際し撰銭が行なわれた可能性もある。

III 東面築地塀推定地の調査

調査地は東面築地塀推定地のはば中央に位置しており、当教委が行なった元興寺第6次調査地の北隣である。6次調査では東七坊間路西側溝と東面築地塀の痕跡を検出している。今回の調査もこの築地塀の検出を目的として行なった。

A 検出遺構

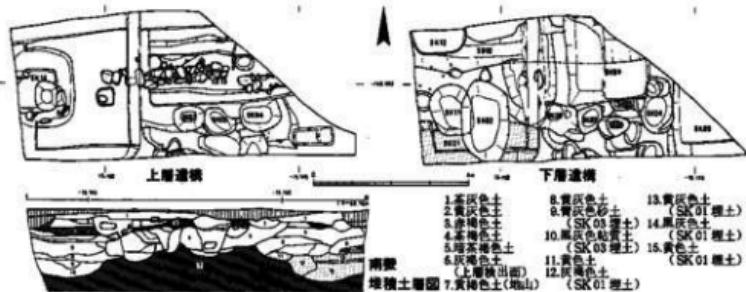
| 番 | 銅種 | 枚数 | 初銭年代(西暦) | 国名 | 備考 | 番 | 銅種 | 枚数 | 初銭年代(西暦) | 国名 | 備考 |
|---|------|----|--------------|----|------|----|------|----|--------------|--------------------|----|
| 1 | 開元通寶 | 1 | 武德4年(621) | 唐 | 少欠損 | 9 | 元豐通寶 | 3 | 元 | 聖元年(1078) | 北宋 |
| 2 | 咸平元寶 | 2 | 咸平2年(999) | 北宋 | | 10 | 元祐通寶 | 2 | 元 | 祐8年(1093) | * |
| 3 | 祥符元寶 | 1 | 大中祥符2年(1009) | | 一部欠損 | 11 | 紹聖元寶 | 1 | 紹聖元年(1094) | | * |
| 4 | 祥符通寶 | 1 | 大中祥符3年(1010) | | | 12 | 元祐通寶 | 1 | 元 | 符元年(1098) | * |
| 5 | 天聖元寶 | 2 | 天聖元年(1023) | | | 13 | 聖宋通寶 | 1 | 建中靖國元年(1101) | | * |
| 6 | 景祐元寶 | 1 | 景祐元年(1034) | | | 14 | 政和通寶 | 1 | 政和元年(1111) | | * |
| 7 | 皇宋通寶 | 5 | 聖元2年(1039) | | | 15 | 永樂通寶 | 4 | 永 | 樂6年(1408) | 明 |
| 8 | 熙寧元寶 | 3 | 熙寧元年(1068) | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 計29枚 | (唐銭1枚、北宋銭24枚、明銭4枚) | |

SX06出土銅錢一覧表(一部)

発掘区の基本的な土層を述べる。地表から茶灰色土、黄灰色土、赤褐色土、茶褐色土、暗茶褐色土、灰褐色土となり地表下0.8mで黄褐色粘土の地山に達する。遺構は灰褐色土と地山の上面で検出した。地山面の標高は概ね87.9mである。検出した遺構には柱穴、土塙、溝があり13世紀末以降のものである。SK01は南西隅にある土塙である。出土遺物はなく時期は不明である。SK02は平面が橢円形の土塙で、南北2.1m、東西1.2m、深さ0.7mある。重複関係からSK01より新しい。SK03は東端にある土塙で、西肩部分を検出した。土塙は平底で、深さ0.5mある。SK02・03の埋土からは13世紀末～14世紀初頭の土器が出土した。SK04～08は東西に並ぶ小土塙である。平面は不整形な円形で径0.6～0.7m、深さ0.4mある。埋土から14世紀中頃の土師器皿が多量に出土した。SK09は東辺で検出した平面が方形の土塙で、発掘区北へ延びる。大きさは東西2.1m、南北2.3m以上、深さ0.7mある。SD10は発掘区北辺で検出した東西方向の素掘り溝である。溝幅1.0m、深さ0.4mある。重複関係からSK09より新しい。SK11・12は径1.4m前後の円形土塙で、埋土から15世紀頃の土器が出土した。これらは地山面で検出した。SX13は発掘区の中央で検出した東西方向の石組である。石組は北に面を合わせ、人頭大の自然石を二段積重ねたものである。SK14は発掘区西端で検出した方形の浅い土塙で、一辺が2.0m、深さ0.3mある。埋土から16世紀頃の土器が出土した。共に灰褐色土上面で検出した。

B 出土遺物

出土遺物には奈良時代の瓦片、須恵器片なども若干含まれるが、そのほとんどは13世紀末頃から16世紀にかけての土器類である。この時期の遺物には軒瓦、丸瓦、平瓦、土師器皿・釜、須恵器鉢、瓦器鉢・鉢・大甕・火合、輸入陶磁器、国産陶磁器、ふいごの羽口、鉄滓、鋳型、砥石、銅錢などがある。ほとんどが未整理であるためSK04～08出土土器について簡単に記す。土師器皿・釜、須恵器鉢などがある。土師器皿には白色系のものと赤褐色系のものがある。共に底部は上げ底状となり、内面から口縁部上半までよこなで調整



東面築地堀推定地発掘区平面図・堆積土層図 (1/150)

する。大きさから口径8cm前後の小皿と口径11cm前後の大皿に分れる。須恵器鉢は東播系の片口鉢である。これらの土器は14世紀後半頃のものと考えられる。

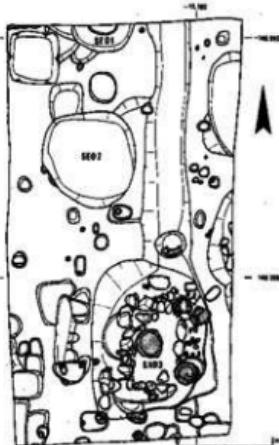
IV まとめ

今回の調査では食堂及び東面築地塀の痕跡は検出されず、遺構、遺物のほとんどは13世紀末以降のものであった。これらの遺構、遺物は中世奈良町の成立を考える上で貴重な資料である。江戸時代に書かれた『奈良坊目拙解』によると中院町は宝徳三年（1452年）十月廿日元興寺極楽坊禅定院の火災の後に寺域から町屋になったとされており、出土遺物もこの時期のものが大半を占める。遺構で特に注目されるものにS X06がある。これは備蓄銭と呼ばれる地中に錢を蓄えた遺構である。このような備蓄銭は貨幣経済が確立された13世紀末から15世紀にかけて盛んに行なわれている。これまでに発見されている備蓄銭をみると1000枚以上出土したものがほとんどである。今回のような少量の備蓄銭が出土した例は少なく、中世奈良町の生活を知るうえで貴重な発見である。（篠原豊一・松田光広）

第10次の調査 一東室北小子坊推定地の調査一

調査地は極楽坊の北東約50mの所に位置し、敷地の南西隅には小子坊の存在が想定されているところである。調査は南北にのびる敷地の南半に東西5m、南北10m（面積50m²）の発掘区を設定し行なった。調査期間は昭和62年5月10日から5月20日までである。

発掘区の基本的な土層は、表土の下、暗褐色土が約0.4mの厚さで堆積し、表土から約0.5m~0.6mで黄褐色粘質土の地山に至る。遺構は地山上面で検出した。検出遺構には、柱穴、井戸、土塗、索掘り溝がある。柱穴の掘形は径0.2m~0.3m程度の小さいものが多い。発掘区が狭いためか、建物としてまとまるものは検出できなかった。発掘区北半で井戸SE01・02を検出した。いずれも井戸枠は残存していなかった。埋土から16世紀の土器類が出土した。発掘区南端では平面長方形の掘形を呈する土塗SX03を検出した。掘形内部には内法が東西約0.9m、南北約1.2mの石組をもつ。検出面からの深さ約0.8mを測る。埋土からは12世紀の土器類が出土した。SX13と重複して埋甕3基を検出した。いずれも16世紀代の瓦器大甕が埋えられていた。奈良時代の遺構は検出できなかったが、遺物包含層からは奈良三彩杯と考えられる破片が出土した。（三好美穂）

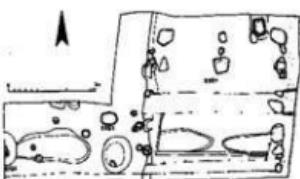


発掘区平面図（1/120）

第12次の調査　—西廻廊推定地の調査—

本調査は西廻廊の検出を目的として東西10m、南北6mの発掘区を設定して行なった。調査期間は昭和62年9月10日から9月20日までである。土層は、表土から約0.3~0.4mまでは黒灰色土層があり、その下には近世遺物を包含した赤褐色焼土層が約0.3mの厚さで堆積していた。発掘区東端部の焼土層下には約0.3mの厚さで黒色粘土と黄褐色砂が互層となつて固くしまった層（図中の網目表示）がある。この層の下には16世紀代の遺物を包含する明茶色土、暗褐色土、明褐色土と続き、地表から約1.4mで黄褐色粘土の地山となる。地山面の標高は概ね88.0mである。検出した遺構には礎石建物1棟、井戸1基、土塙がある。S B01は東西2間（4.0m）、南北3間（3.4m）以上の南北方向の礎石建物である。礎石には、人頭大の自然石が使われている。S B01は固くしまった層の上面で検出した。S E02は発掘区西端で検出した近世の円形の石組井戸である。S K03は発掘区中央で検出した方形土塙で、埋土から五輪塔の火輪が1点出土した。今回の調査では奈良時代の遺構及び遺物は検出されなかつたが、発掘区西半の地山が南北に一段高くなつており、この高まりが西廻廊基壇とも考えられる。しかし、今回調査では確認できなかつた。

（三好美穂）



発掘区平面図（1/200）

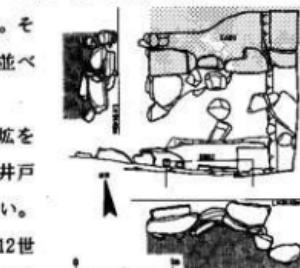
第11次の調査

調査地は旧境内北方の中央部分にある。調査は東西5.6m、南北1.5mの発掘区を設定して行なった。調査は昭和62年7月27日から8月1日にかけて実施した。

現地表から約0.3m下から近世の宅地を限る堀跡S A01と、それに取付く門跡S B02と思われる遺構を検出した。S A01は幅1.6m以上で、下段の石組の上に土塙が構築されていたのであろう。S B02は北側の1間分（0.9m）を検出。その東側礎石が切石で、ここから西側礎石へ直に瓦が並べられていた。西側礎石上では寛永通寶が数枚出土。

下層の地山面（標高84.8~85.0m）で井戸1基と土塙を検出した。井戸の掘形は直径1.65mの円形を呈する。井戸は16世紀頃に廃棄されたものである。完掘はしていない。

出土遺物については、包含層出土のものを含めても12世紀以降のものがほとんどである。元興寺に関する調査成果は遺構、遺物からは共に得られなかつた。



SA01、SB02平面図。
SA01立面図（1/60）

2. 史跡大安寺旧境内の調査 第29~31次

史跡大安寺旧境内では、住宅建築及び大安寺本堂・東門の増改築の現状変更申請に対応して3件の発掘調査を実施した。苑院推定地での第29次調査では、検出遺構のうち発掘区南辺で検出された東西溝から8世紀末に属する遺物の良好な一括資料が出土した。第30次調査は昨年度実施した第28次調査を補足するもので、礎石建物S B02の南端が確定した。また、この建物は瓦積み基壇による外装化粧が行なわれていたことが判明した。今後、大安寺伽藍の配置・変遷を究明する上での大きな課題が残った。第31次調査はझ院推定地内で九・十坪坪境小路南側溝の検出を目的として実施したが、奈良時代の遺構は検出できなかった。

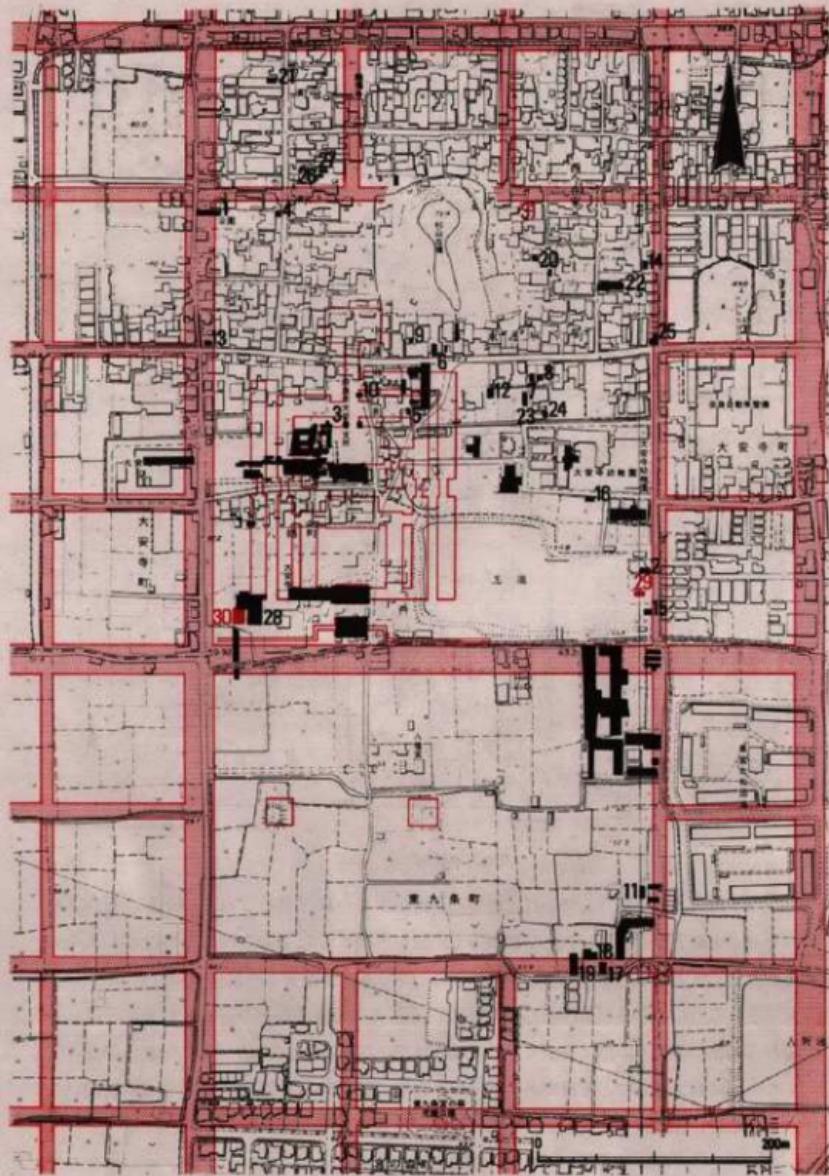
第30次の調査

I はじめに

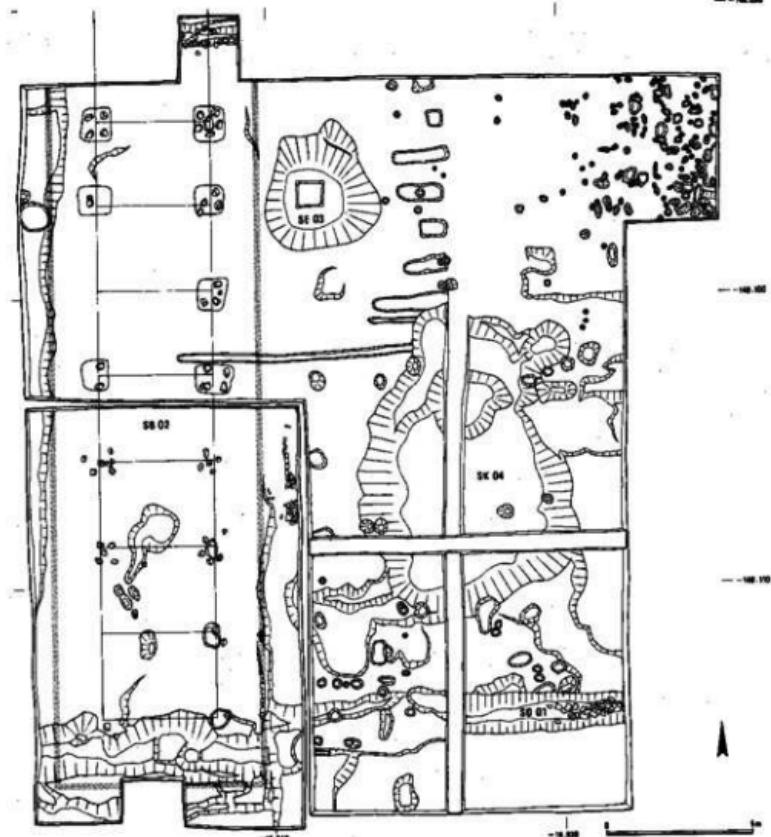
本調査は、奈良市大安寺町1303-4番地において、大安寺貫主・河野清晃氏提出の現状変更申請（大安寺本堂および東門の増改築）に対応すべく実施した発掘調査で、昨年度の第28次調査を補うものである。すなわち、調査地は、従来の伽藍復元研究では伽藍外周の築地塀と僧房との間の空間地で、主要建物は存在しないとみられていた寺域の南西隅であったが、第28次調査では予想に反し礎石建の南北棟建物を検出するに至った。ただ、その折には南北3間分を確認するにとどまり、これの南北に未発掘部分が残ったので、建物の性格付けなどをめぐって課題が多く残る結果となった。そこで今年度は、建物の南端がどの部分でどのようにまとまるのかを見極める目的で、建物南側の未発掘部分150m²を補足調査することとした。調査期間は昭和62年9月14日から10月3日までである。

II 検出遺構

調査の結果、礎石建物S B02は、さらに南側に4間分のびて完結する南北棟建物であることが判明した。第28次調査で検出した3間分とあわせると、桁行は7間（20.3m）以上となり、さらに北側に続く。先の調査の場合と同じく、礎石は残存しておらず、確認できたのは礎石を支える根石と、根石の抜取り穴であった。妻柱については、当初から無かったのか、あるいは後世の掘削で失われたのか判然としないが、基壇土を盛る際にわずかに掘り込まれた地形の掘形南端を確認している。したがって、建物の南端が新たに検出した4間分で完結することは確実である。ちなみに、柱間寸法は前回の所見同様、桁行10尺（2.9m）等間、梁行13尺（3.9m）に復元できる。また、今回の調査では新たに、建物の基壇外装が瓦積みであったことを確認した。瓦積みは、基壇東側の南端近くで長さ約1.6m、



発掘区位置図（数字は次番号を表す）



発掘区平面図（1/200）

下から3段分までが残存した。瓦は地覆石を置かずじかに平積みされているが、使用瓦には平瓦と丸瓦とが混在し、平瓦の積み方も側面を外面にしたものと端面を外面にしたものとが混じるなど雑然としている。建物東側柱心から基壇東面までの出は5尺(1.5m)に復元でき、これにより基壇東西の幅を23尺(6.9m)に復元することが可能となる。一方、南妻から南側への基壇の出は不明だが、前述の地形の掘形南端までは2.4mであり、少なくともこの幅に収まるものと推察できる。なお、建物の建立時期が8世紀末頃から9世紀代であろうことは先の調査で明らかにしているが、この点に変わりはない。

ところで、今回の調査によって建物南端部分の様相が判明したわけだが、これの伽藍全体に占める位置や性格がかねてからの課題であった。寺域内での立地と、建物自体の平面

形態からみると、僧房（小子房）の一部にあてるのが最も妥当ではある。ただ、従来ある伽藍復元の中に本建物を組み入れて考えることは難しい。というのは、建物の南端が中門にとりつく回廊から著しく南側に張り出す結果になるからである。大安寺伽藍が創建以降いくたびかの変遷を重ねている事実は、これまでの発掘結果からも断片的に知られているが、かかる変遷の復元作業が事後の最重要課題となる。

III 出土遺物

瓦類 出土遺物の大多数は瓦類で、整理箱120箱が出土した。ほとんどが丸瓦・平瓦であるが、軒瓦168点がある。奈良時代のもの149点、平安時代以降のもの19点で、奈良時代のものは細片のため型式の同定が困難な17点を除いて、5型式8種51点の軒丸瓦と、9型式12種81点の軒平瓦とに分類できる。型種と点数の内訳は下記のとおりである。これらのなかで軒丸瓦6716Eは從来中心飾りの部分が知られるのみであったが、今回左半の唐草文を補う資料が出土したので合成拓本を掲載した。

| | | | | |
|-----|-------------|---------------|-------------|---------------|
| 軒丸瓦 | 6091A (1点) | 6137A (9点) | 6138C (7点) | 6138E (10点) |
| | 6138J (10点) | 6231A (1点) | 6231C (2点) | 6231種別不明 (3点) |
| | 6304D (8点) | | | |
| 軒平瓦 | 重弧文 (2点) | 6661A (1点) | 6661B (10点) | 6664A (10点) |
| | 6690A (3点) | 6702種別不明 (1点) | 6712A (32点) | 6716C (9点) |
| | 6716D (1点) | 6716E (3点) | 6717A (8点) | 6721Hb (1点) |

なお、遺構との関係で出土したのは、礎石建物S B02の根石裏込めに混入していた軒丸瓦6304Dと軒平瓦6661Bの各1点だけである。

土器類 土器類には、土師器、須恵器、施釉陶器、磁器、陶器がある。全体の量は遺物整理箱18箱ほどで、大半のものが遺物包含層から出土した。ここでは、遺物包含層から出土したものと概述する。

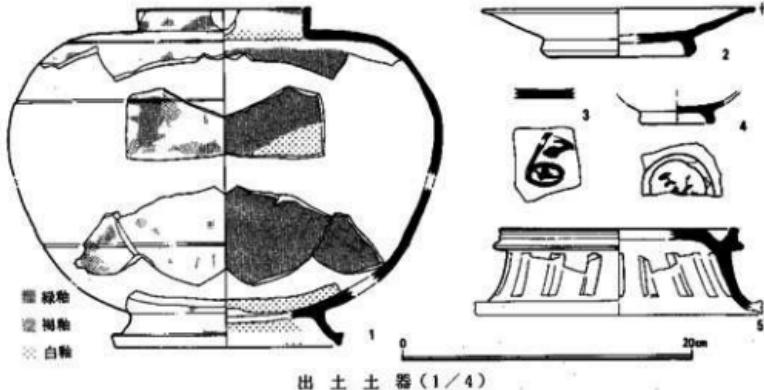
土師器 杯A、皿A、皿C、高杯、壺片がある。出土した皿Cのほとんどが底部内面から口縁部先端にかけてススが付着していたり、火を受けた痕跡が見られる。灯明皿として使っていたものと考えられる。

須恵器 杯A、杯B、杯B蓋、水瓶、淨瓶、壺A蓋、壺片がある。杯又は皿の底部と思われる破片(3)に墨書きが残っているが判読できない。

施釉陶器 三彩壺(1)と三彩碗、杯又は皿の破片13点がある。1は残存する破片から復元したものである。口径



6716型式E種軒平瓦 (1/4)



12cm、器高23cm前後に復元できる。軸は内面にまでも丁寧にかけられている。

灰釉陶器 皿(2)、椀(4)がある。2は斜め上方に開き端部付近で外反する口縁部で、底部には三日月型高台を有する。4は底部外面に墨書が残る。判読は不可能である。

陶 琺 圈脚円面観(5)1点がある。外提部下端に1条の突帯を付け、脚部には長方形の透しを配している。陸部と外提部の高さはほぼ同じである。残存する破片から、硯部径16.4cm、脚部の透しは19に復元できる。

(中井 公、三好美穂)

第31次の調査

本調査は奈良市大安寺町1002番地において実施した楠木義正氏申請の住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は史跡大安寺旧境内の北東隅にあったとされる院院に推定されており、建物予定地はこの中を東西に通る九・十坪の坪境小路の位置にあたる。調査はこの坪境小路の南側溝に推定される畠地に東西3m、南北2mの発掘区を設定して行なった。調査期間は、昭和62年12月21・22日の2日間である。

発掘区の土層は、地表から黒灰色土の耕土、黄灰色砂土となり、地表下0.3~0.6mで明黄褐色粘土の地山となる。遺構はこの地山面で検出した。遺構面の標高は概ね63.5mである。検出した遺構は近世、近代の土塙である。いずれの土塙も発掘区外に統くためその全容はわからないが、平面形が方形のものと円形のものがある。大きさは円形のもので径が0.7~0.8m、深さ0.3~0.4mである。埋土は茶褐色土か暗灰色土で、近世・近代の陶磁器片、瓦片などが出土した。また、包含層の中からは奈良時代の瓦片、須恵器片も少量出土した。

調査では小路南側溝は検出されなかった。今回は、発掘面積が狭いため充分な調査が行なわれなかつたため、寺域内の様相はよくわからなかつた。

第29次の調査

I はじめに

本調査は奈良市大安寺町字ヒラキ1237-3番地において実施した森口初恵氏申請の住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は史跡大安寺旧境内の東辺中央にあたり、苑院に想定されている。調査地周辺でこれまでに二ヶ所（2次、15次）の発掘調査を行ない、奈良時代の掘立柱建物、柵などを検出しており、西側にある芝池が現在よりも大きく調査地西端まで達していたこともわかっている。調査は東西10m、南北4.5m、調査面積45m²の発掘区を設定して行なった。調査期間は、昭和62年5月6日から5月19日までである。

II 検出遺構

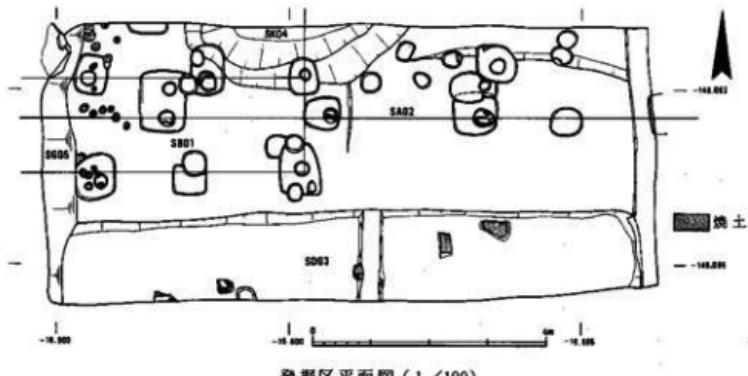
発掘区の土層は、地表から1.0mまでは黄褐色土で厚く客土され、その下層は黒灰色土の耕土、暗黄灰色砂土、暗灰色砂土となり、地表下1.6mで黄褐色砂礫の地山となる。遺構は地山面で検出した。遺構面の標高は概ね63.0mである。

遺構には掘立柱建物2棟、土塙1、溝1条、池がある。

S B01 発掘区西側で検出した東西2間、南北1間以上の掘立柱建物である。南廂をもつ東西棟建物と考えられる。柱間寸法は東西が約1.8m、前北が1.65mである。

S A02 発掘区中央で検出した東西3間以上の柱列で、東西棟建物の南側柱列の可能性がある。柱間寸法は2.7mである。

S D03 発掘区南辺で検出した東西溝。南岸は発掘区外で、溝は発掘区の東辺でとぎれる。溝底はほぼ水平となる。全長9.9m、南北1.8m以上、深さ0.2mである。埋土は茶褐色土で、大量の8世紀末の遺物と焼土が出土した。



S K04 発掘区北辺で検出した楕円形の土塹で、北へ延びる。東西3.8m、南北1.0m以上、深さ0.45mである。埋土は茶褐色土、灰色粗砂で11世紀代の土器が出土した。

S G05 芝池の旧東岸である。堤に沿って護岸の木杭痕跡が南北に残る。

III 出土遺物

遺物の大部分はS D03出土のもので軒瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、黒色土器、綠釉陶器等があり、奈良時代末の良好な一括資料である。この軒瓦、土器類について記す。

軒瓦 軒瓦は5点ある。軒丸瓦には6137A型式が、軒平瓦には6661A・6664A・6712A・6716C型式があり、各1点が出土した。

土器類 土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器が遺物整理箱で15箱分出土した。このうち、土師器が全体の7割以上を占めている。これらの土器の時期は8世紀末の長岡京期並行のものと考えられる。

土師器 杯A、皿A、皿B、碗A、壺E、壺がある。杯A(11~16)は、表面の摩滅が著しく、全体の調整までわかるものは少ないが、器面全体をへら削りするc手法のものが

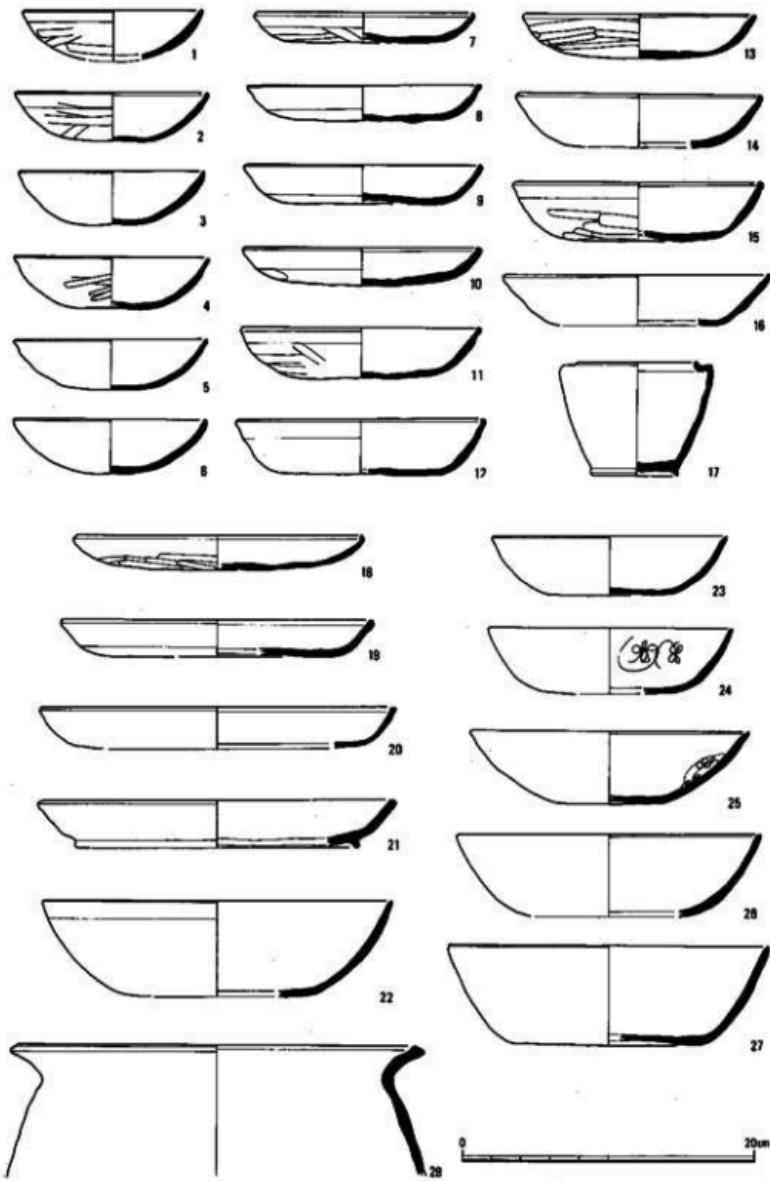
多くみられる。皿A(7~10、18~20)は、c手法のもの(7、10、18)とe手法のもの(8、9、19、20)とがある。皿B(20)は、e手法で調整されている。碗A(1~6)は、杯A同様、c手法のものが多い。壺E(17)は、摩滅が著しく調整は不明。

黒色土器 杯A(22~27)がある。全てA類に属す。24・25は口縁部内面にラセン状暗文及びヘラ磨きが施されている。その他のものは口縁部内面にわずかに磨きがみられるが摩滅が著しく詳細な調整についてはあきらかではない。

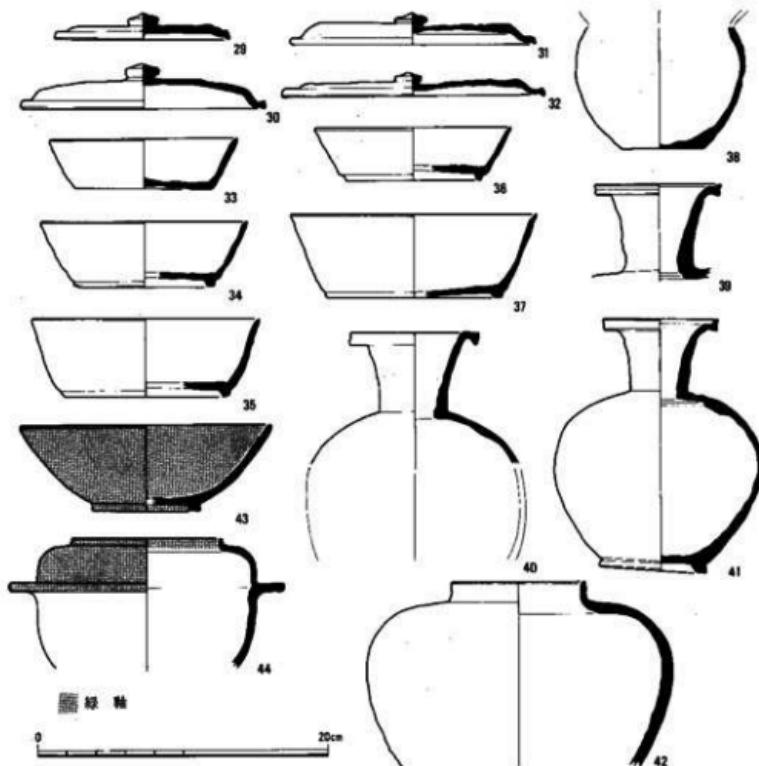
須恵器 杯A、杯B、皿、壺A、壺K、壺L、壺Mがある。杯A(33)は、口縁部内外面をロクロナデ調整し、底部外面はヘラ切りのまま放置している。杯B(34~37)は、口縁部内外面をロクロナデで調整。高台はいずれも低短である。杯B蓋(29~30)は、B形態に属するもので、ロクロナデで調整されている。壺L(39~41)は、ロクロナデ調整でしあげている。底部外面には回転系切り痕跡が残るもの(41)がある。壺A(42)は、壺J同様ロクロナデ調整でしあげられている。肩部には、灰緑色の自然釉が付着する。

S D03出土土器種構成表

| 土師器 | | 個体数 | 比率(%) |
|------|----|-----|-------|
| 杯 | A | 19 | 67.0 |
| | 皿 | 33 | |
| | B | 1 | |
| 碗 | A | 6 | |
| | E | 1 | |
| 壺 | E | 5 | 5.7 |
| | 壺 | 4 | |
| 小計 | | 64 | 72.7 |
| 黑色土器 | | 個体数 | 比率 |
| 碗 | A | 8 | 9.1 |
| | 小計 | 8 | |
| 須恵器 | | 個体数 | 比率 |
| 杯 | A | 1 | 9.1 |
| | B | 5 | |
| | 皿 | 2 | |
| 壺 | A | 1 | 6.8 |
| | K | 1 | |
| | L | 3 | |
| | M | 1 | |
| 小計 | | 14 | 16.0 |
| 施釉陶器 | | 個体数 | 比率 |
| 綠釉 | 碗 | 1 | 1.1 |
| “羽釜” | 1 | 1 | 1.1 |
| 小計 | 2 | 2 | 2.2 |
| 総計 | | 88 | 100 |



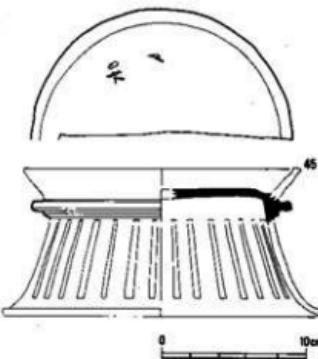
S D03出土土器 (1 / 4)



S D03出土土器 (1 / 4)

施釉陶器 緑釉陶器碗・羽釜がある。碗（43）は、ロクロナデで調整したち黄色味の強い淡緑色の釉を器面全体にかけている。断面が灰白色を呈する軟陶緑釉である。羽釜（44）は、口縁部内外面から鉗にかけて淡緑色の釉がかかっている。胴部外面にはススが付着している。

陶 碗 圓脚圓面硯 (45) が1点ある。残存する破片から、硯部径約12.4cm、脚部の透しを29もつて復元できる。陸の部分には文字らしきものがみられるが、定かではない。

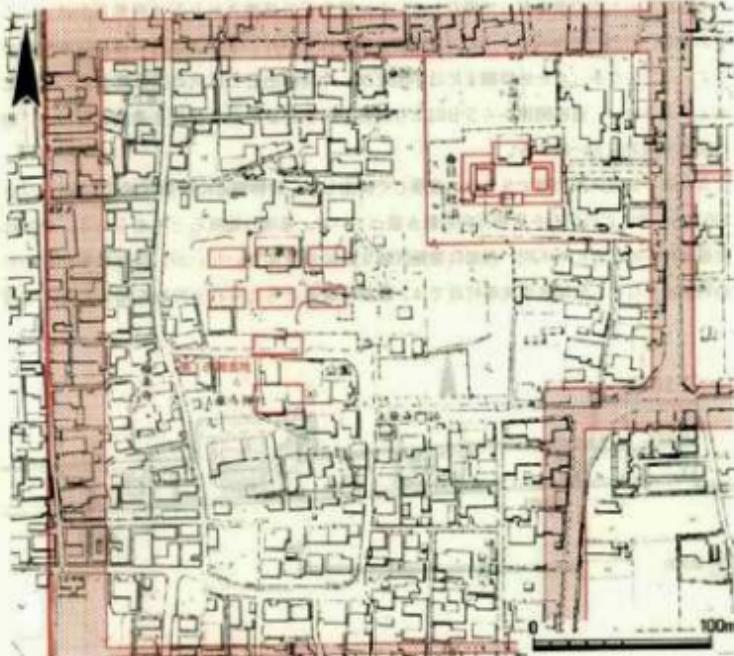


S D03出土陶硯 (1 / 4)

3. 法華寺旧境内の調査 第1次

1 はじめに

本調査は、奈良市法華寺町における特定環境保全公共下水道建設工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、南門の南側の市道で講堂跡が推定されている箇所である。昭和50年度には奈良国立文化財研究所により、同市道の北辺部を既設水道管取り替え工事に伴って立会調査がなされ、東西に10尺等間で並ぶ5間分の掘立柱建物跡が検出されている。当時の所見によると、「中軸線で折り返すと7間の建物になると推定され法華寺講堂もしくはその前身の藤原不比等邸内的主要建築に当たる」と推察されている。今回の調査区は、その真南にあたり、前回の調査同様講堂及び法華寺の前身建物の検出が予測された。調査は、東西約26m、南北約0.8m（発掘面積20.8m²）の発掘区を設定し、昭和63年1月29日から同年2月15日まで行なった。



発掘区位置図

II 検出遺構

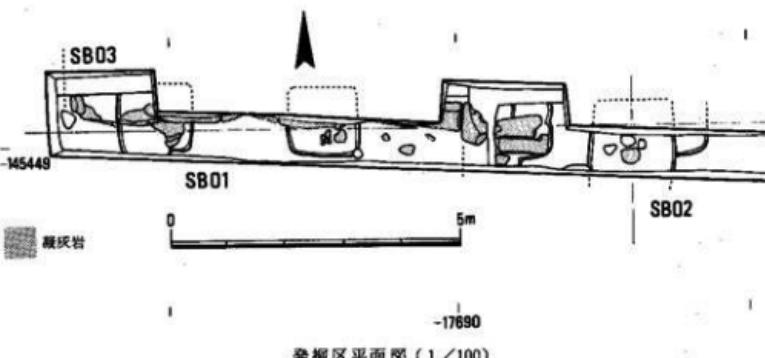
発掘区内の基本的な土層は、約0.2~0.3mの厚さで暗灰褐色バラスが堆積し、この下がすぐに黄褐色粘土の地山になる。発掘区西側では、暗灰褐色バラスと地山の間に鉄分を含む砂と灰色粘土を交互に突き固めた層が約0.1mの厚さで堆積する。地山は、西へ向かってゆるやかな傾斜をもち、地山上面の標高は発掘区東端で65.3m、西端では66.3mである。遺構は地山上面で検出した。

検出した遺構には、建物3棟、土塙がある。

S B01 発掘区西半部で検出した桁行5間(15.0m)以上の東西棟建物。梁行は発掘区外へのびるため不明。柱間寸法は、3.0m等間である。出土遺物はない。位置関係からみて、これらの柱掘形は昭和50年度に検出された掘立柱建物と同じ柱穴であることがわかった。

S B02 S B01と重複して検出した掘立柱建物。2柱穴のみ確認した。柱間寸法は、4.2mを測る。桁行・梁行ともに発掘区外へのびるため規模は不明である。柱掘形の一部分を検出しただけにとどまったが、掘形の大きさは一辺1.3m以上になると考えられる。2柱穴とも根巻石が現位置を保って残存していた。根巻石に使用された石は自然石がほとんどであるが、西側の根巻石の1つには凝灰岩が使われていた。2柱穴以外には柱穴を検出することはできなかったため詳細までは不明だが、今回検出した柱穴は東西棟建物の妻柱と考えておきたい。重複関係からS B01よりは新しいことがわかる。出土遺物はない。主軸は国土方眼方位と一致する。

S B03 発掘区西半部でS B01と重複して検出した。建物南辺には東西幅約1.0m、厚さ約0.3mの凝灰岩の切石を東西方向に敷き並べている。基壇の地覆石と考えられる。東端は発掘区外へのびるため不明。西端は発掘区端までには及んでいないが、残存状態が悪いため判然としない。発掘区中央部付近では、階段の痕跡と考えられる突出を検出した。重複



関係からSB01よりは新しいことがわかる。

出土遺物には、丸瓦、平瓦、軒平瓦（平城宮6667A、6663A）、軒丸瓦（平城宮6137、6301）、土師器片がある。土師器は細片のため時期は不明である。いずれも遺物包含層から出土した。

Ⅲまとめ

今回検出した遺構は、重複関係及び位置関係から3時期に分けることができる。

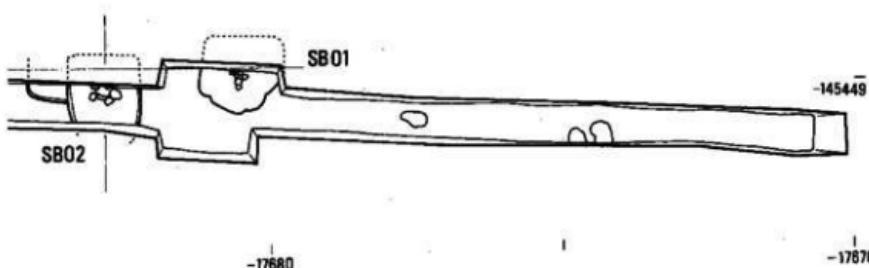
1期 挖立柱建物SB01が建つ時期。法華寺造営以前の遺構と考えられる。出土遺物がないため、SB01が藤原不比等邸の時期のものかは不明である。

2・3期 根巻石をもつ挖立柱建物SB02が建つ時期、及び凝灰岩を敷き、基壇を築成した時期。後者は法華寺造営に伴うもので、講堂の基壇の一部であると考えられる。SB01とSB02は新旧関係があきらかではないため、特定はできない。

以上、検出遺構の概略を述べてきた。今回の発掘区は狭小であったため断片的なことしかわからなかったが、法華寺講堂に関する遺構を検出できたことは大きな成果であり、今後の伽藍配置の復元研究に貴重な資料を提供することになった。このため、奈良市教育委員会文化課は、これらの遺構の重要性から保存対策が必要であると判断し、同市下水道建設課と協議の結果、工事路線を変更することにより遺構保存の措置を講じた。

また、昭和62年度に奈良国立文化財研究所が行なった第174—22次調査地の東側の道路にあたる地点で同下水道建設工事に連して立会調査を実施した。調査の結果、井戸1基、土塙3、北から南にさがる地山の落込みを確認した。検出した井戸は、すでに枠を抜きとられたらしく残存していないかった。埋土からは、丸瓦・平瓦・木くずが出土した。時期は不明である。
(三好美穂)

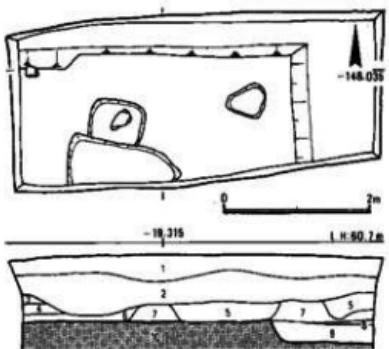
註) 奈良国立文化財研究所 「昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査報告」 1987



4. 薬師寺旧境内の調査 第3次



発掘区位置図（数字は次番号を表す）



発掘区平面図・北壁土層図（1/80）

本調査は、奈良市六条町字金池1275番地で実施した、奥村捨雄氏届出の個人住宅建築に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京右京六条二坊五坪で、薬師寺旧境内の僧綱所推定地に相当する。調査地の北側では、昨年度、第1次、第2次の調査が行われ、中近世の土取り穴や奈良時代の掘立柱建物の一部が検出されている。調査は、南北2.5m、東西5.0m（面積12.5m²）の発掘区を設けて行なった。調査期間は昭和63年3月14日～同年3月19日である。

発掘区内の堆積土層は、基本的に上から茶色土、淡茶色砂、茶灰色砂とつづき、青灰色砂土に至る。そして、中近世の遺構は茶灰色砂土上面から、それ以前の遺構は青灰色砂土上面から構築されている。

検出した遺構は、柱穴2、土塙2である。柱穴は一辺0.7mの隅丸方形掘形のものと径約0.5mの不整形掘形のものとを検出したが、発掘区狭小のため、同一建物のものであるかは不明である。また、土塙も発掘区狭小のため、ともに全形を確認できなかった。なお、西側の柱穴と西側の土塙とは重複関係があり、土塙が新しいことがわかる。

遺物は、茶灰色砂層や西側土塙などから土器、須恵器、瓦器、瓦が出土したが、すべて平安時代以降（大半は中近世）のものであり、奈良時代の遺物はない。

（森下浩行）

平城京城・周辺のその他の調査

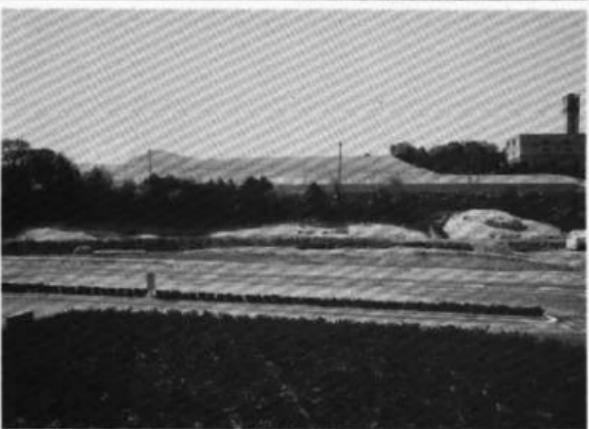
周知の遺跡内での土木工事で発掘調査が必要であるとされたもののうち、比較的小範囲のもの、周辺の調査例やこれまでの届出地の使用状況からみてすでに遺構が遺存していない可能性の高いもの、工事が軽易で遺跡に及ぼす影響がほとんどないと考えられるものなど21件について、試掘調査の意味も含めて奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと合同で緊急に発掘調査を実施した。

このうち87-1次調査では平城京左京四条二坊三・四坪小路の南側溝を、87-4次調査では西一坊大路西側溝を検出した。小路側溝は幅約2m、深さ0.5m、大路側溝は幅約3.4m、深さ約1mである。87-10次調査は松林苑跡の西辺築地推定地に添う市道の擁壁工事に際して行なった。擁壁部のみの調査であったが、市道敷は築地には該当せず、隣接の墓地造成時に築地跡を取り崩し、土砂を盛土にあてているらしいことが知られた。87-12次調査は丘陵の宅地造成工事に際して行なった。敷地の一部が遺跡に該当しており、そこに210m²の発掘区を設けたが遺構ではなく、右京の条坊施工がこの地点には及んでいないことが知られた。87-14次調査は新薬師寺旧境内に250m²の発掘区を設け行なった。順次地山まで掘り下がったが、遺構はなく旧境内地の様相を知ることはできなかった。

(西崎卓哉)

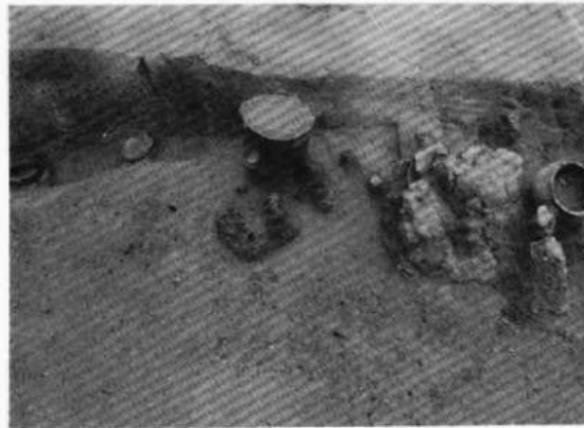
| 次数 | 遺跡名 | 届出地 | 工事内容 | 調査日 | 調査概要 | 届出者 |
|-------|------------|-------------------------------------|----------|-----------|--------------|----------|
| 87-1 | 左京四条二坊四坪 | 尼ヶ辻四段田2436-1 | 駆車塗設 | 4月9日 | 三・四坪地小路南側溝検出 | 松岡齊代 |
| 87-2 | 右京三条三坊五坪 | 宝来町92 | 事務所建築 | 4月13日 | 奈良時代の土塁・溝検出 | 西崎仁教 |
| 87-3 | 左京一条四坊三坪 | 法蓮町465-1 | 店舗建築 | 4月14日 | 奈良時代柱穴・瓦面り検出 | 黒沢住顕 |
| 87-4 | 右京三条一坊一坪 | 三条大路五丁目253 | 事務所建築 | 4月15日 | 西一坊大路南側溝検出 | 興富士住建 |
| 87-5 | 左京四条六坊十坪 | 椿井町3 | 店舗改築 | 4月20日 | 時期不明の旧施設検出 | 神楽坂衣料店 |
| 87-6 | 左京一条七坊十五坪 | 八条町485-1・486-1 488-2・490-2・495-1 | 飲食建築 | 5月12・13日 | 遺構なし | 同一宅地所 |
| 87-7 | 左京四条六坊十四坪 | 東城戸町5 | 共同住宅建築 | 6月24日 | 中・近世土塁検出 | ケーラルビーコ |
| 87-8 | 東大寺旧境内奈良公園 | 雄略町487 | 飲食改築 | 7月6日 | 遺構なし | 松岡貞一 |
| 87-9 | 左京二条四坊八・九坪 | 法蓮町字金治414-1 | 共同住宅建築 | 7月22日 | 中・近世の何處か? | 豊所賀吉 |
| 87-10 | 松林苑 | 佐紀新町地内 | 道路整備工事 | 7月23・24日 | 築地には該当せず | 奈良市長 |
| 87-11 | 称徳院先域 | 西大寺界隈町一丁目 624-1・1・4 | 共同住宅建築 | 8月4日 | 幅4.3mの探し、浅か | 米田勝彦 |
| 87-12 | 右京五条四坊十四坪 | 五条中町1202-2・5218他 | 宅地造成 | 8月5日 | 遺構なし | 奈良県労働省 |
| 87-13 | 右京一条北辺四坊三坪 | 西大寺宝ヶ丘744・745-1 | 共同住宅建築 | 8月11日 | 遺構なし | 野村不動産 |
| 87-14 | 元興寺旧境内 | 元興寺町12-1・2 | 駆使局合住宅建築 | 9月21日 | 中近世土塁・井戸検出 | 足山 亘 |
| 87-15 | 左京三条三坊四坪 | 大宮町七丁目380-1他 | 事務所建築 | 10月28・29日 | 遺構なし | 関西電力㈱ |
| 87-16 | 東七坊大路 | 紀寺町908-3・ 909-4・909-8 | 事務所建築 | 11月5日 | 中・近世の土塁・柱穴検出 | 柳原口広告社 |
| 87-17 | 新薬師寺旧境内 | 高畠町491-1 | 共同住宅建築 | 11月9日 | 遺構なし | 同朝日住連 |
| 87-18 | 元興寺旧境内 | 川之上町2 | 共同住宅建築 | 11月25日 | 小土塁に埋没された柱検出 | 大阪住宅供給事業 |
| 87-19 | 左京三条五坊十一坪 | 油坂町1-51他 | 事務所建築 | 1月13日 | 旧河道か? | 鈴千鶴 |
| 87-20 | 左京五条三坊八坪 | 大安寺町字四条東面町603他 | 倉庫事務所増築 | 2月15日 | 奈良時代柱穴・溝 | 奈良市民生協 |
| 87-21 | 二条大路 | 北新町59-1・2 | 食肆建築 | 3月30日 | 二条大路南側溝検出 | 西本 悟 |

図 版

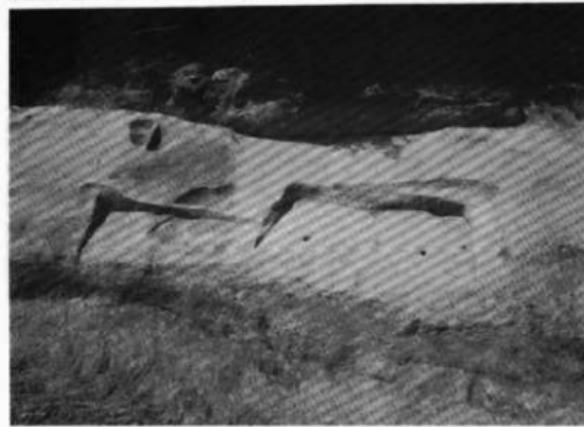




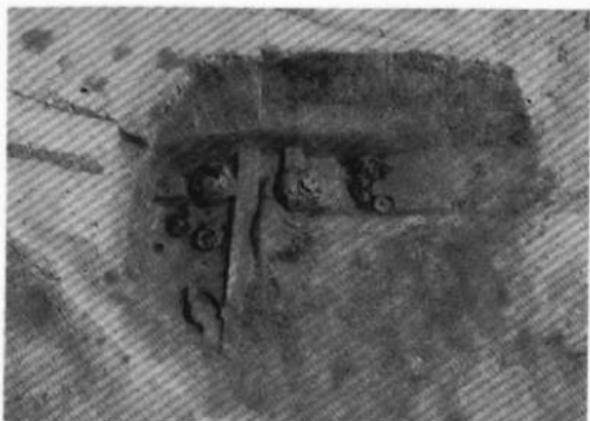
4. SB01 (東から)



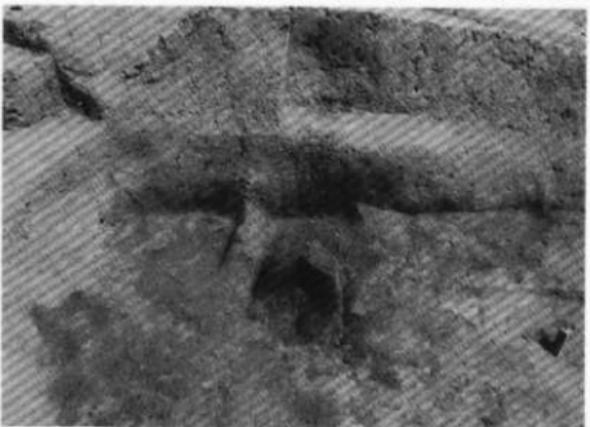
5. SB01土器出土状態 (南から)



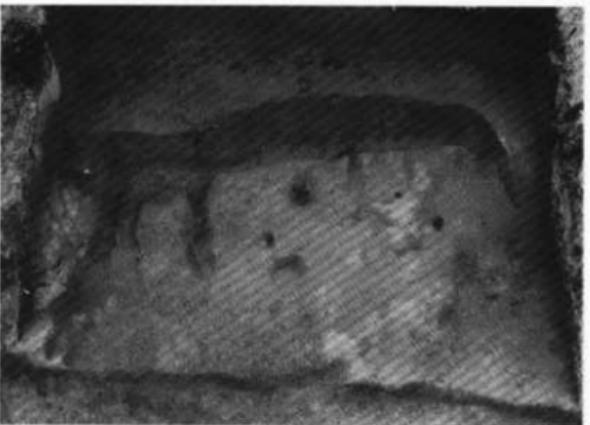
6. SB01完掘後 (東から)



7. S B02土器出土状態（南から）



8. S B02カマド検出状態（南から）



9. S B03（東から）



10. SB04 (南から)



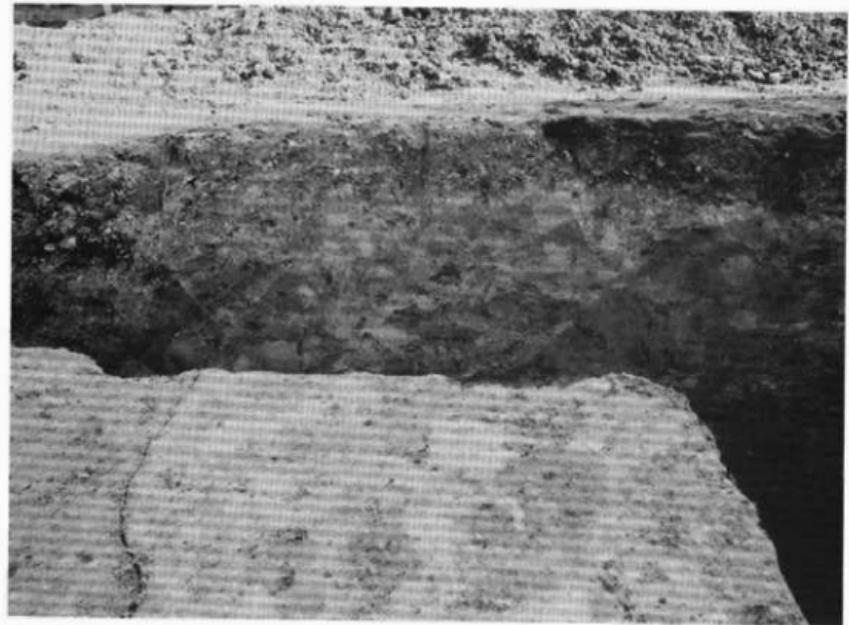
11. SB05 (北から)



12. E区 炭窯 (南から)



1. 発掘区全景（北東から）



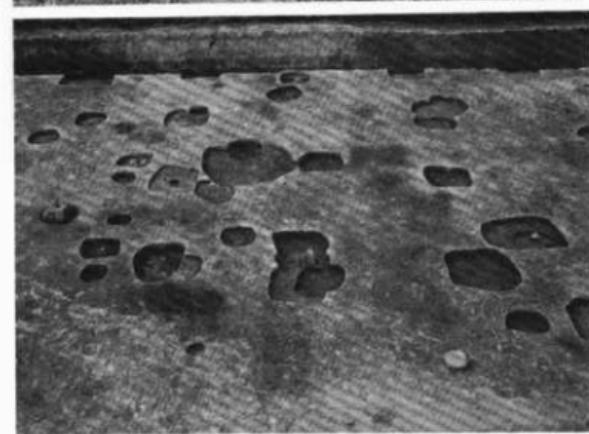
2. 発掘区南東壁面



1. 発掘区全景（奈良時代）



2. 発掘区全景（弥生時代）



3. S B01（南から）



4. S D01 (東から)



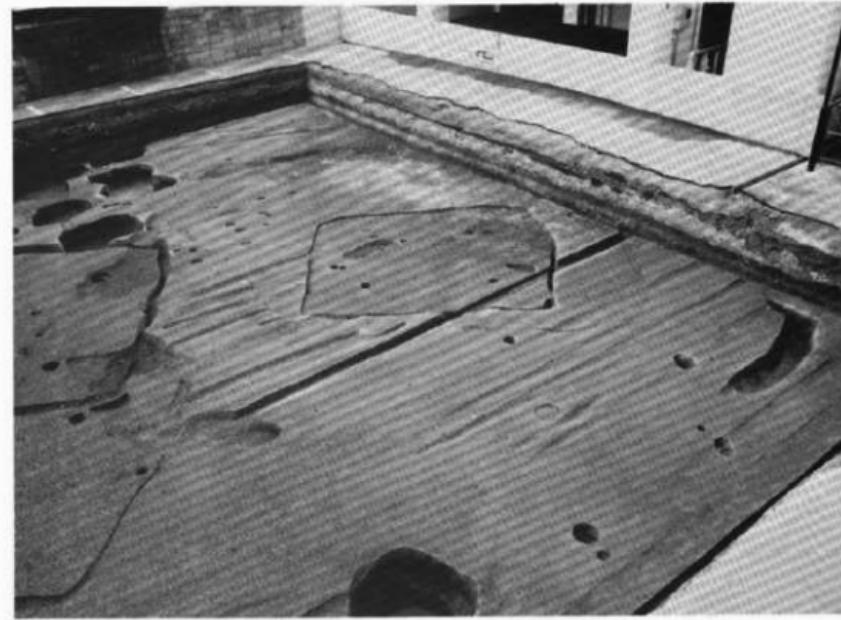
5. S E01 (南から)



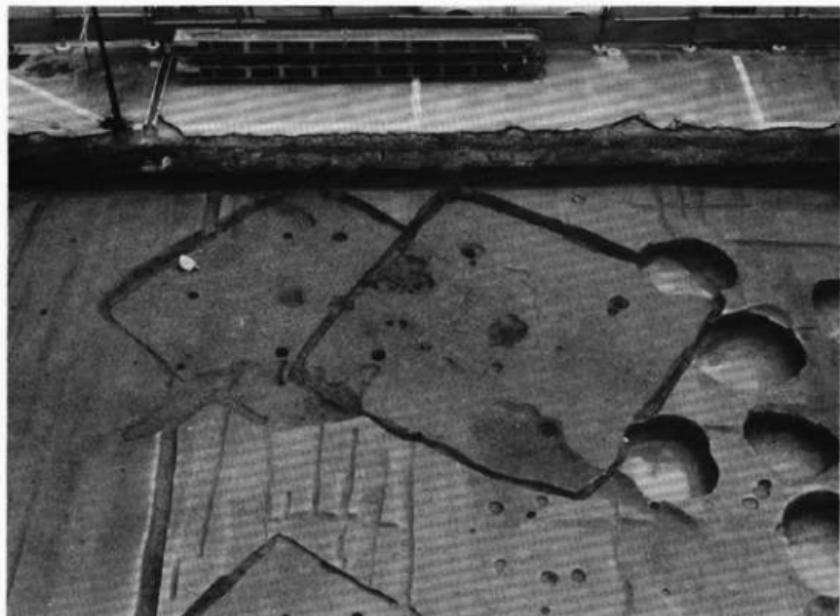
6. S E02 (南から)



1. 発掘区全景(東から)



2. S B02付 S D03(東南から)



3. S B01-S B04 (北から)



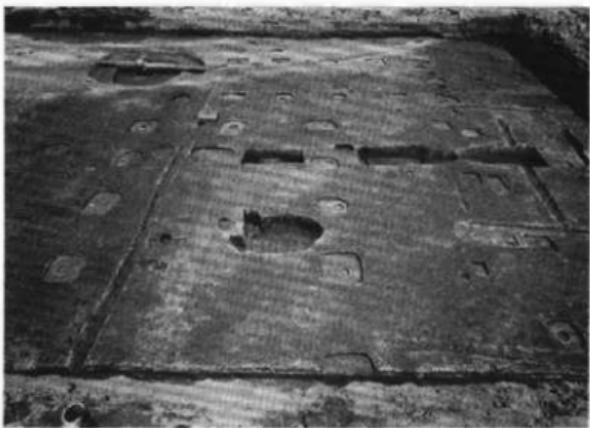
4. S B04 (北東から)



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



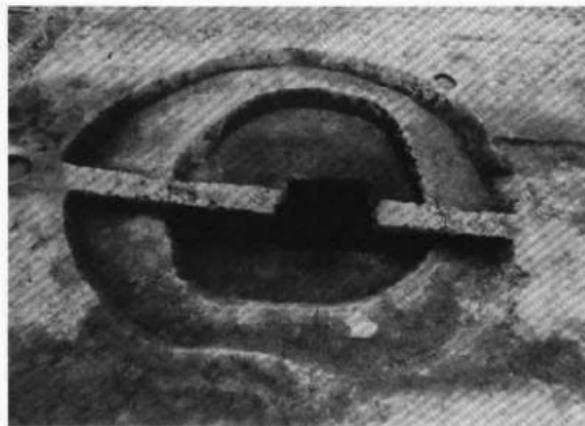
3. S B01・S A02 (西から)



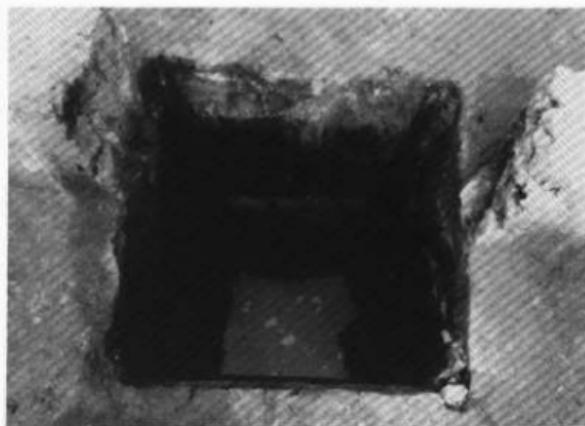
4. S B02 (南から)



5. S B03・04・05 (西から)



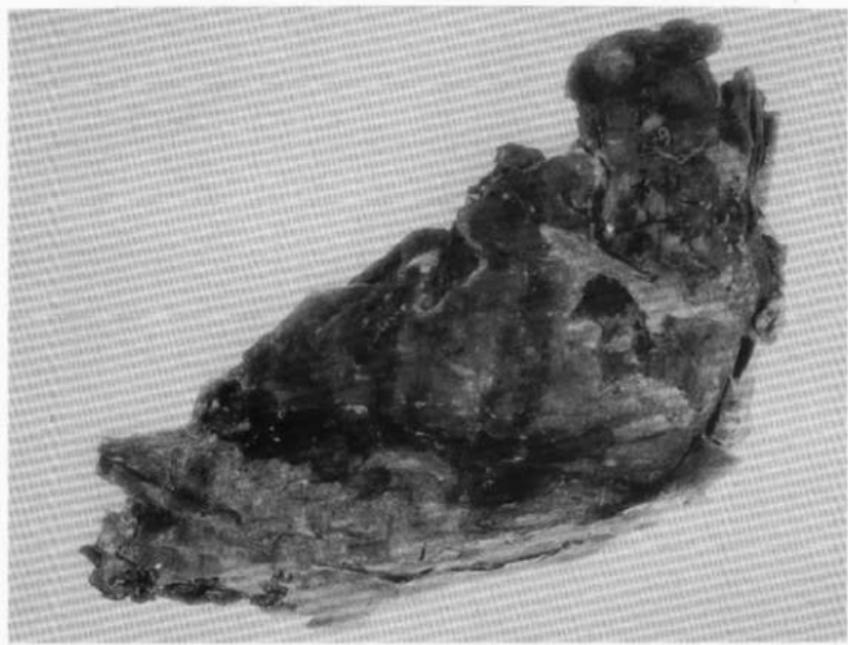
6. SE01 (東から)



7. SE01枠内 (西から)



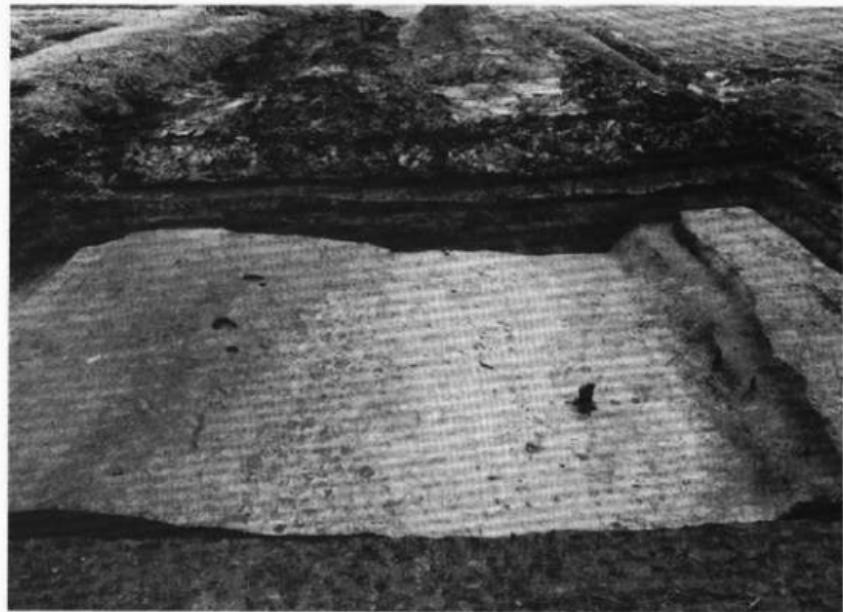
8. SX01 (南から)



9. S E01出土漆紙文書（漆紙文書の写真は奈文研から提供をうけた。）



第138次発掘区（南から）



第141次発掘区（北から）



1. 発掘区全景(北から)



2. SE03・SK02・04・05・10(西から)



1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（西から）



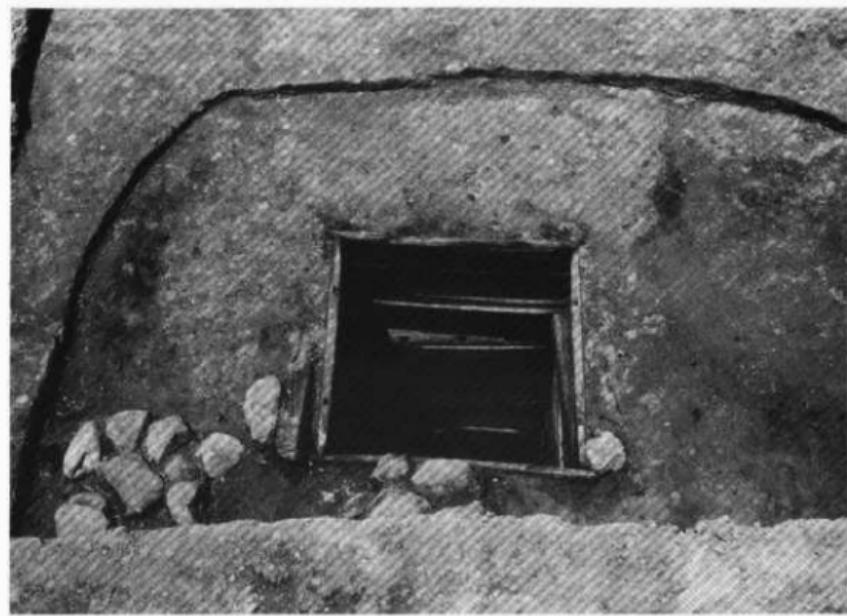
1. 発掘区全景（東から）



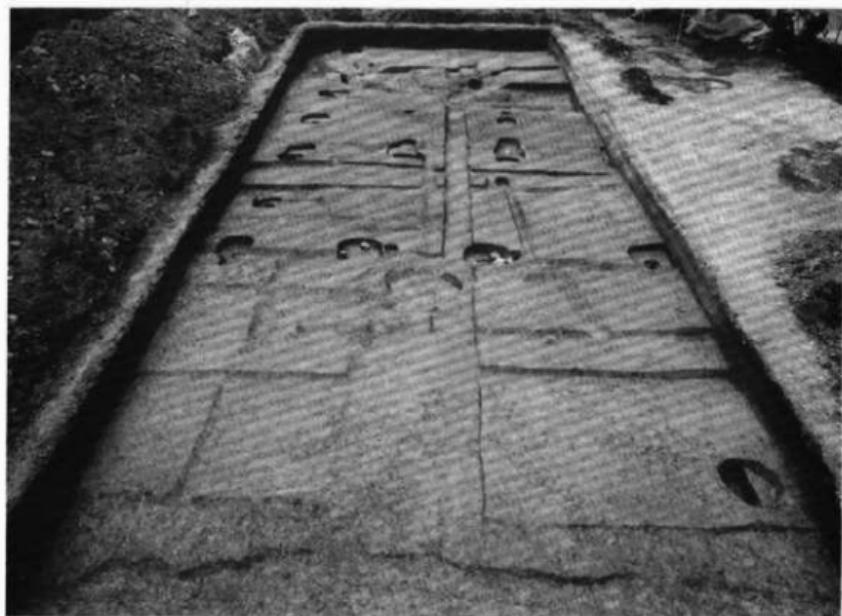
2. 発掘区全景（西から）



1. 発掘区全景（南から）



2. SE01（東から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



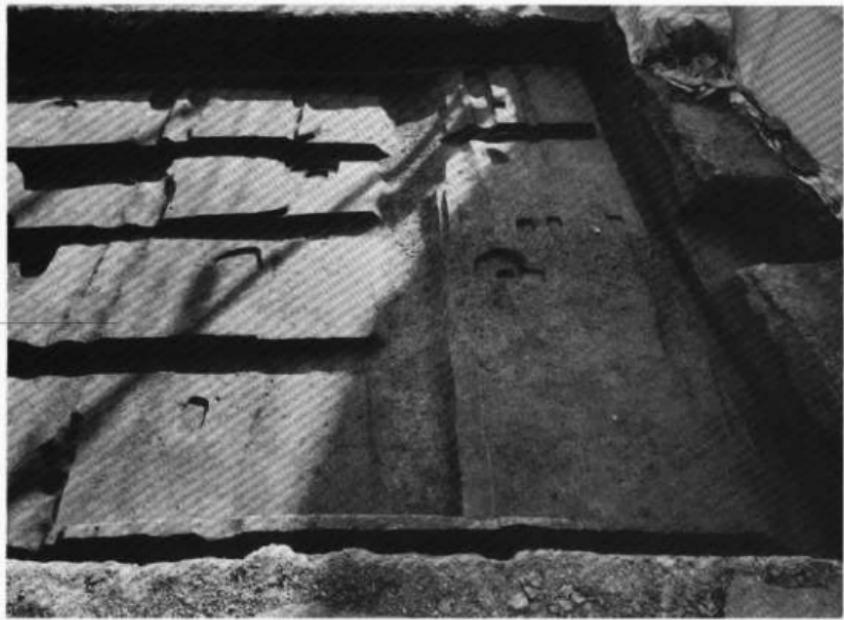
1. 発掘区全景（南から）



2. S E 08 (西から)



1. 発掘区全景（東から）



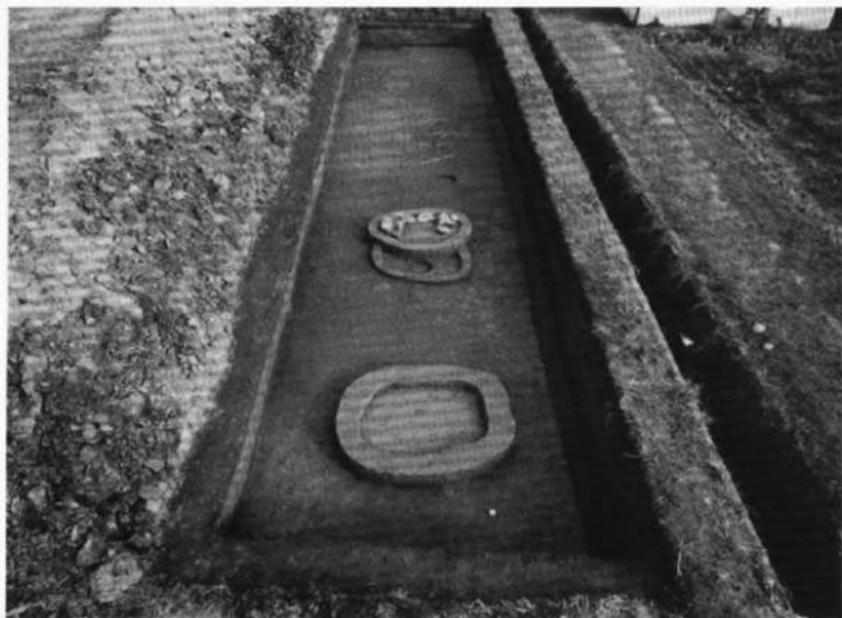
2. SD01・02（北から）



1. 発掘区全景（西から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（西から）



2. SK04・05・06（北から）



1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（西から）



1. 北発掘区全景（西から）



2. 南発掘区全景（東から）



1. 発掘区全景（東から）



2. SD01・02交差部分（西から）



1. 発掘区全景（北から）



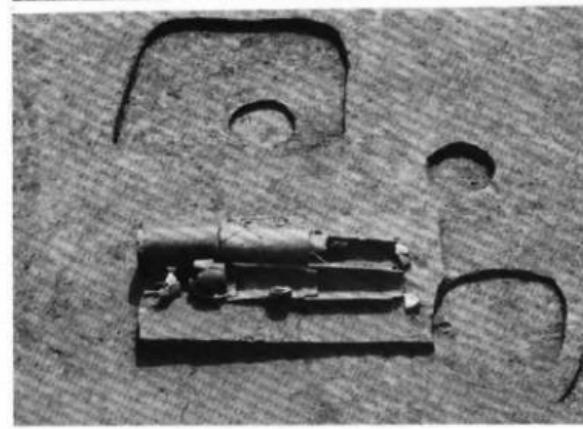
2. 発掘区全景（西から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（西から）



3. S X04全景（北から）



1. 北発掘区全景（南から）



2. 南発掘区全景（東から）



第140次調査
発掘区全景（西から）

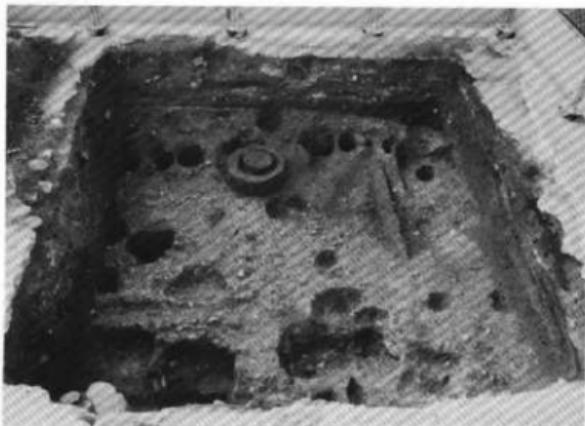


第145次調査
発掘区全景（東から）

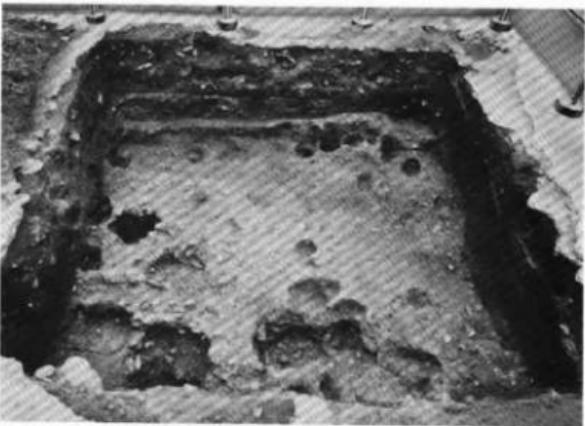


第147次調査
発掘区全景（西から）

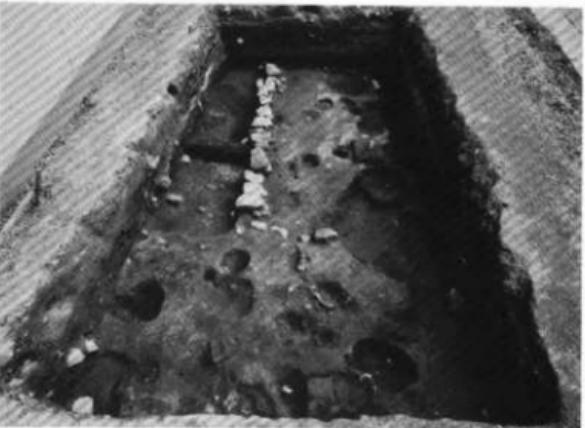
1. 食堂推定地
西発掘区上層全景（北から）



2. 食堂推定地
西発掘区下層全景（北から）

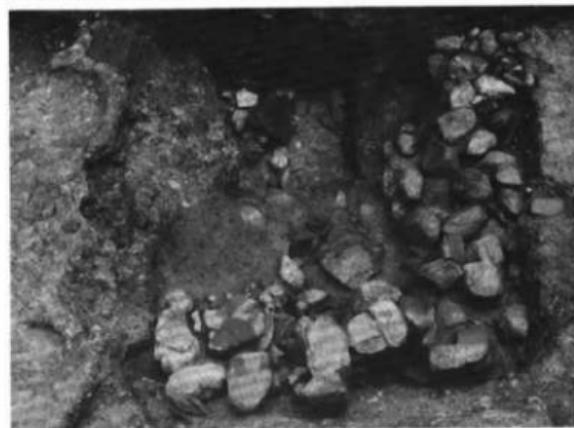


3. 食堂推定地
東発掘区上層全景（西から）

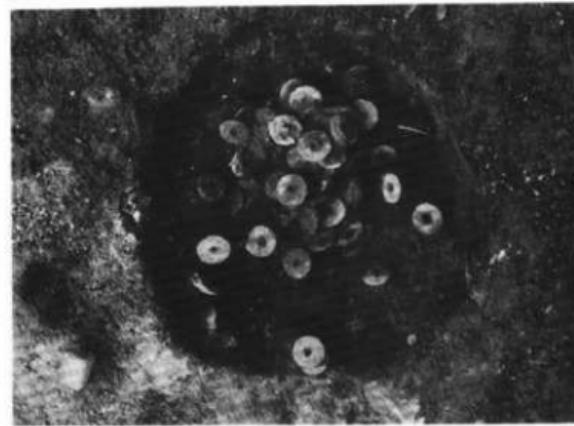




4. 食堂推定地
東発掘区下層全景（西から）



5. 食堂推定地
SK05（南から）



6. 食堂推定地
SK06（東から）